

赤曾Ⅱ遺跡・亀山北遺跡

—国庫補助道路改築事業一般国道408号真岡北バイパスに伴う埋蔵文化財発掘調査—

2004. 3

栃木県教育委員会
(財)とちぎ生涯学習文化財団

あかぞに

かめやまきた

赤曾Ⅱ遺跡・亀山北遺跡

—国庫補助道路改築事業一般国道408号真岡北バイパスに伴う埋蔵文化財発掘調査—

2004.3

栃木県教育委員会
(財)とちぎ生涯学習文化財団

序

赤曾Ⅱ遺跡・亀山北遺跡の所在する真岡市は栃木県の南東部に位置し、大内廃寺や堂法田遺跡をはじめとする数多くの遺跡が所在しております。

このたび、一般国道408号真岡北バイパスの建設に先立ち、路線内に所在する遺跡の取扱いについて、関係機関と協議の上、記録保存を目的とした発掘調査を行いました。

今回の発掘調査では、旧石器時代から平安時代という長期間に亘る遺構・遺物を確認し、貴重な資料を得ることができました。

本報告書は、赤曾Ⅱ遺跡、亀山北遺跡の調査成果をまとめたものです。本書が県民の皆様にとって郷土の歴史を理解する一助となるとともに、各方面において広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまで、多大なるご協力をいただきました真岡市教育委員会、栃木県土木部をはじめとする関係機関、並びに関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成16年3月

栃木県教育委員会

教育長 田嶋 進

例　　言

1. 本書は、栃木県真岡市下籠谷地内に所在する赤曾II遺跡及び真岡市龜山地内に所在する龜山北遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国庫補助道路改築事業一般国道408号真岡北バイパスに伴う事前調査である。
3. 調査は、栃木県土木部の委託事業であり、栃木県教育委員会事務局文化財課の指導により、財団法人とちぎ生涯学習文化財団 堀藏文化財センターが実施したものである。
4. 本遺跡の現地調査及び整理作業・報告書作成の期間ならびに担当者は以下のとおりである。

現地調査

平成15年4月1日～平成15年10月16日

| | | |
|--------|-----|------|
| 調査部 | 部長 | 橋本澄朗 |
| 調査第二担当 | 副主幹 | 田熊清彦 |
| | 主査 | 津野 仁 |
| | 主任 | 篠原浩恵 |
| | 主任 | 相田 孝 |

整理作業・報告書作成

平成15年10月1日～平成16年3月30日

| | | |
|--------|-----|------|
| 調査部 | 部長 | 橋本澄朗 |
| 調査第二担当 | 副主幹 | 田熊清彦 |
| | 主任 | 篠原浩恵 |

5. 報告書の執筆・編集は篠原浩恵が行った。旧石器については芹澤清八（当センター調査部主査）、瓦塔については池田敏宏（当センター調査部主任）の協力を得た。
6. 遺跡の基準点測量及び航空写真撮影・写真測量は株式会社中央航業に委託した。
7. 遺物の保存処理については、車聯哲久（管理普及部普及事業担当主査）が行った。
8. 遺構図版作成は、一部を除き、篠原祐一（管理普及部普及事業担当主査）の指導の下、当センター普及事業担当コンピュータートレース班が行った。
9. 写真撮影は、発掘調査における遺構については担当者が、遺物については、篠原祐一の協力を得て、篠原浩恵が行った。
10. 発掘調査の実施ならびに報告書作成にあたっては、栃木県教育委員会から指導を受けるとともに、次の諸機関・諸氏から御教示・御協力を賜った。記して敬意を表する次第である。（順不同、敬称略）
　　栃木県土木部道路建設課 栃木土木事務所 真岡市教育委員会
11. 発掘調査参加者は次のとおりである。（順不同、敬称略）
　　青柳タケ 飯塚常男 稲毛 清 沖村 栄 押久保毅 太田憲幸 柏川 学 郷上恵子 郷上友代
　　櫻井文江 筧原耕悦 武田重男 野口貞夫 野沢高富 林 静子 柳 なみ 山下スマ子 宮部みさ子
12. 整理作業・報告書作成作業参加者は次のとおりである。
　　賀来孝代 菊池厚子 野沢茂子
13. コンピュータートレース
　　引地千佳子
14. 本遺跡の出土遺物・資料類は、財団法人とちぎ生涯学習文化財団堀藏文化財センターに保管している。

凡　　例

1. 遺跡の略号は赤曾II遺跡MO-AK (MOkasi-IIKazoiiseki)、龜山北遺跡はMO-KY (MOkasi-KameYamakitaiseki) である。
2. 遺構
(1) 遺構実測図に示した方位は、国土方眼座標による。
(2) 遺構実測図に示した断面水準は、海拔標高(m)である。
(3) 各遺構の縮尺は以下を基準とし、これを外れるものについては随時明記した。

遺構実測図 ···· 1/60 穹実測図 ···· 1/30

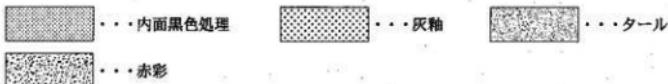
- (4) 遺構番号は、遺構の種類を問わず通し番号を付した。遺構の種類は以下に示す略号で表記した。調査の過程で欠番としたものもあるが、現地調査時の番号をそのまま使用した。
- 遺物の注記は、調査時の遺構番号及び遺物取り上げ番号で行った。
- 堅穴住居跡・・SI 捩立柱建物跡・・SB 土坑・・SK ピット・・P
円形周溝遺構・「コ」字状周溝遺構・・SX
- (5) 土層番号は堆積順序を示すものではない。
- (6) 土層説明中にIPは今市バミスをKPは鹿沼バミスを表す。
- (7) 遺構図版中スクリーントーンが示すものは以下のとおりである。



3. 遺物

- (1) 遺物実測図の縮尺は1/4を基準とし、これを外れるものについては随時明記した。
- (2) 遺物の器質について、須恵器断面を黒塗り、灰釉陶器断面をトーンで表した。
- (3) 遺物実測図は、四分割法を用い、下記に従って記載した。

- ① 器面調整
 - ヘラケズリ・・範囲を実線を示した。矢印はケズリの方向を表す。
 - ヘラナデ・・範囲を破線で示した。
 - ヨコナデ・・下端を破線で示した。
- ② 土器部については仕上げ線を明示するため、口辺端部を除き後線の記載を控えた。
- ③ 上端部の線が中心線より離れるものは復元図であることを示す。
- ④ 遺物図版中のスクリーントーンの示すものは以下のとおりである。



- (4) 遺物観察表は以下に従って記載した。

- ① 色調 「新版 標準土色帖」1998年版
農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財團法人日本色彩研究所 色票監修に据る。
土器については、焼成時の色調に近いと判断される部分で観察し、塗彩・被熱による二次的な色調変化(赤色変化等)・黒斑・煤等は特徴として記載した。これらの変化が全面に亘る場合は、この部分を以て観察した。漆・炭素吸着等の場合も同様に観察した。

- ② 胎土については、混和材の多少により、「粗」「やや粗」「やや緻密」「緻密」とし、混和材の長径を基準に以下とする。

0.5mm未満-微砂粒 0.5~1.0mm-砂粒 1.0~2.2mm-粗砂粒 2.0mm以上-小砾
混和材の色調は白・灰・黒・赤・透明を基本とした。

- ③ 焼成については不良であるものののみ明示した。
- ④ 観察表中の略称は以下を示す。

口・・口辺部 体・・体部 類・・頸部 底・・底部
上・・上位 中・・中位 下・・下位

- (5) 記文及び観察表中の「斑状剥離」は器面の剥離の形状を例えたものである。

- (6) 図版・観察表及び本文の番号は一致する。

- (7) 事実記載及び観察表中の()付きの数値は残存値、[]付きの数値は推定値を示したものである。

目 次

序 例 言 凡 例

第1章 調査にいたる経緯と経過

| | |
|--------------|---|
| 第1節 調査にいたる経緯 | 1 |
| 第2節 調査の経過 | 2 |
| 1. 調査の経過 | 2 |
| 2. 調査の方法 | 3 |
| 3. 調査の組織 | 3 |

第2章 遺跡の環境

| | |
|-----------|---|
| 第1節 地理的環境 | 6 |
| 第2節 歴史的環境 | 6 |

第3章 赤曾II遺跡

| | |
|--------------|----|
| 第1節 遺構・遺物の概要 | 13 |
| 第2節 住居跡 | 14 |
| 1. 調査の概要 | 14 |
| 2. 住居跡 | 14 |
| 第3節 土坑・ピット | 32 |
| 1. 調査の概要 | 32 |
| 2. 陷穴状土坑 | 32 |
| 3. 土坑 | 32 |
| 4. ピット | 32 |
| 第4節 性格不明遺構 | 46 |
| 1. 調査の概要 | 46 |
| 2. 円形周溝遺構 | 46 |
| 3. 「コ」字状周溝遺構 | 46 |
| 第5節 その他の出土遺物 | 51 |
| 1. 旧石器時代 | 51 |
| 2. 縄文時代 | 51 |
| 3. 平安時代 | 51 |

第4章 亀山北遺跡

| | |
|--------------|----|
| 第1節 遺構・遺物の概要 | 54 |
| 第2節 旧石器時代 | 55 |
| 1. 調査の概要 | 55 |
| 2. 遺物 | 55 |
| 第3節 住居跡 | 58 |
| 1. 調査の概要 | 58 |
| 2. 住居跡 | 58 |
| 第4節 掘立柱建物跡 | 76 |
| 1. 調査の概要 | 76 |
| 2. 掘立柱建物跡 | 76 |
| 第5節 土坑・ピット | 77 |
| 1. 調査の概要 | 77 |
| 2. 陷穴状土坑 | 77 |
| 3. 方形竖穴遺構 | 77 |
| 4. 土坑 | 77 |
| 5. ピット | 77 |
| 第6節 その他の出土遺物 | 79 |
| 1. 縄文時時代 | 79 |
| 2. 弥生時代 | 79 |
| 3. 古墳時代 | 79 |

第5章 まとめ

| | |
|------------|----|
| 第1節 赤曾II遺跡 | 81 |
| 1. 調査成果の概要 | 81 |
| 2. 旧石器時代 | 81 |
| 3. 縄文時代 | 81 |
| 4. 古墳時代 | 81 |
| 5. 平安時代 | 81 |
| 第2節 亀山北遺跡 | 85 |
| 1. 調査成果の概要 | 85 |
| 2. 旧石器時代 | 85 |
| 3. 縄文時代 | 85 |
| 4. 弥生時代 | 85 |
| 5. 古墳時代 | 85 |

挿図目次

- 第1図 遺跡位置図
 第2図 調査区図
 第3図 周辺地形区分図
 第4図 周辺遺跡分布図
 第5図 赤曾II遺跡遺構配置図
 第6図 基本土層図
 第7図 第1号・第9号住居跡実測図
 第8図 第2号住居跡実測図
 第9図 第2号住居跡竪溝実測図
 第10図 第2号住居跡出土遺物実測図(1)
 第11図 第2号住居跡出土遺物実測図(2)
 第12図 第3号・第8号住居跡実測図
 第13図 第3号住居跡竪溝実測図
 第14図 第3号住居跡出土遺物実測図
 第15図 第3・8号住居跡出土遺物実測図
 第16図 第4号住居跡竪溝実測図
 第17図 第4号住居跡実測図
 第18図 第4号住居跡出土遺物実測図
 第19図 第5号住居跡竪溝実測図
 第20図 第5号住居跡竪溝実測図
 第21図 第5号住居跡出土遺物実測図
 第22図 第6号住居跡竪溝実測図
 第23図 第7号住居跡実測図
 第24図 第7号住居跡竪溝実測図
 第25図 第7号住居跡出土遺物実測図
 第26図 第8号住居跡竪溝実測図
 第27図 第8号住居跡出土遺物実測図
 第28図 第9号住居跡竪溝実測図
 第29図 第9号住居跡出土遺物実測図
 第30図 第44号住居跡竪溝実測図
 第31図 第26号陥入穴状土坑実測図
 第32図 土坑実測図(1)
 第33図 土坑実測図(2)
 第34図 土坑出土遺物実測図
 第35図 土坑実測図(3)
 第36図 ピット位置図
 第37図 ピット実測図
 第38図 第12号・13号円形周溝遺構実測図
 第39図 第14号円形周溝遺構実測図
 第40図 第15号円形周溝遺構実測図
 第41図 第61号「コ」字状周溝遺構実測図
 第42図 第61号「コ」字状周溝遺構土層堆積図
 第43図 第61号「コ」字状周溝遺構周辺ピット土層堆積図
 第44図 その他の出土遺物実測図(旧石器時代)
 第45図 その他の出土遺物実測図(縄文時代)
 第46図 その他の出土遺物実測図(平安時代)
 第47図 その他の出土遺物実測図
 第48図 亀山北遺跡遺構配置図(1区)
 第49図 亀山北遺跡遺構配置図(3区)
 第50図 基本土層図
 第51図 旧石器時代石器及び剥片実測図
 第52図 旧石器時代調査グリッド図
 第53図 第1号住居跡実測図
 第54図 第1号住居跡出土遺物実測図
 第55図 第2号住居跡実測図
 第56図 第9号住居跡実測図
 第57図 第9号住居跡出土遺物実測図(1)
 第58図 第9号住居跡出土遺物実測図(2)
 第59図 第10号住居跡実測図
 第60図 第10号住居跡出土遺物実測図
 第61図 第11号住居跡実測図
 第62図 第11号住居跡出土遺物実測図
 第63図 第12号住居跡実測図
 第64図 第12号住居跡出土遺物実測図
 第65図 第14号住居跡実測図
 第66図 第14号住居跡出土遺物実測図
 第67図 第15号掘立柱建物跡実測図
 第68図 第6号土坑実測図
 第69図 第8号土坑実測図
 第70図 土坑・ピット実測図
 第71図 その他の出土遺物実測図(縄文時代・弥生時代)
 第72図 その他の出土遺物実測図(古墳時代)

表目次

- 表1 赤曾II遺跡遺構番号对照表
 表2 亀山北遺跡遺構番号对照表
 表3 周辺遺跡一覧表
 表4 第2号住居跡出土遺物観察表
 表5 第3号住居跡出土遺物観察表
 表6 第3・8号住居跡出土遺物観察表
 表7 第4号住居跡出土遺物観察表
 表8 第5号住居跡出土遺物観察表
 表9 第7号住居跡出土遺物観察表
 表10 第8号住居跡出土遺物観察表
 表11 第9号住居跡出土遺物観察表
 表12 土坑出土遺物観察表
 表13 ピット計測表
 表14 第61号「コ」字状周溝遺構周辺ピット計測表
 表15 その他の出土遺物観察表(旧石器時代)
 表16 その他の出土遺物観察表(縄文時代土器)

- 表17 その他の出土遺物観察表（縄文時代石器）
 表18 その他の出土遺物観察表（平安時代）
 表19 その他の出土遺物観察表
 表20 旧石器時代石器観察表
 表21 第1号住居跡出土遺物観察表
 表22 第9号住居跡出土遺物観察表
 表23 第10号住居跡出土遺物観察表

- 表24 第11号住居跡出土遺物観察表
 表25 第12号住居跡出土遺物観察表
 表26 第14号住居跡出土遺物観察表
 表27 ピット計測表
 表28 その他の遺物観察表（縄文時代・弥生時代）
 表29 その他の遺物観察表（古墳時代）

図版目次

- 図版一 赤曾II遺跡
 赤曾II遺跡・龜山北遺跡遠景（南西上空から）
 調査区東半部近景（南から）
 調査区全景（北から）
 調査区南部半近景（南西から）
 水田面より赤曾II遺跡を見る（南西から）
 図版二 赤曾II遺跡 遺構
 第1・第9号住居跡セクション（南東から）
 第9号住居跡竪造（西から）
 第9号住居跡鍬鋤草出土状況（北西から）
 第1・第9号住居跡掘方（南東から）
 第2号住居跡遺物出土状況（西から）
 第2号住居跡掘方（西から）
 第2号住居跡竪（西から）
 第2号住居跡竪出し（西から）
 図版三 赤曾II遺跡 遺構
 第2・第3・8、第4号住居跡完掘（南西から）
 第3・8号住居跡遺物出土状況（南西から）
 第3・8号住居跡掘方（南西から）
 第3号住居跡竪出し（南西から）
 第4号住居跡遺物出土状況（西から）
 第4号住居跡完掘（南から）
 第4号住居跡竪（西から）
 第4号住居跡掘方（南から）
 図版四 赤曾II遺跡 遺構
 第5号住居跡完掘（西から）
 第5号住居跡遺物出土状況（南から）
 第5号住居跡完掘（西から）
 第4号住居跡付近作業風景（南西から）
 第7号住居跡完掘（南西から）
 第7号住居跡掘方（南西から）
 第44号住居跡完掘（西から）
 基本土層（南から）
 図版五 赤曾II遺跡 遺構
 第26号土坑完掘（南西から）
 第26号土坑周辺（南東から）
 第23号土坑周辺（東から）
 第17号土坑完掘（東から）

- 第22号土坑完掘（東から）
 第23号土坑遺物出土状況（北から）
 第48号土坑周辺（北東から）
 調査参加者
 図版六 赤曾II遺跡 遺構
 第12・第13号円形周溝遺構（東南から）
 第14号円形周溝遺構（北から）
 第15号円形周溝遺構（東から）
 第14・第15号円形周溝遺構近景（南東から）
 第61号「コ」字状周溝遺構・周辺ピット（南から）
 第61号「コ」字状周溝遺構近景（南西から）
 第61号「コ」字状周溝遺構・周辺ピット（北から）
 第58号土坑、「コ」字状周溝遺構近景（北東から）
 図版七 赤曾II遺跡 遺物
 SI-02 2~9・11・12・14・15
 SI-03 6
 SI-03・08 1・7
 SI-04 1・2~6・8・9
 図版八 赤曾II遺跡 遺物
 SI-04 10・11・14~18
 SI-05 1~5・7~9
 SI-06 1
 図版九 赤曾II遺跡 遺物
 SI-08 2・5
 SI-09 2・3・5・6
 SK-11 1
 SK-23 2・3
 SK-33 1
 SK-41 1
 SK-45 1
 その他の遺物 旧石器時代1・2
 その他の遺物 縄文時代1・2・4・5
 その他の遺物 平安時代3
 その他の遺物 近世
 図版十 龜山北遺跡 遺構
 赤曾II遺跡・龜山北遺跡遠景（南上空から）
 水田面より龜山北遺跡を見る（東から）
 旧石器調査グリッド近景（北東から）

J.9グリッド南東部分UP (南西から)

基本土層 (南から)

図版十一 亀山北遺跡 遺構

第1号住居跡完掘 (南西から)

第2号住居跡完掘 (南西から)

第9号住居跡完掘 (東から)

第9号住居跡伊跡 (南から)

第9号住居跡床面施設 (東から)

第9号住居跡壁柱穴 (東から)

第9号・第10号住居跡完掘 (北から)

作業風景 (北東から)

図版十二 亀山北遺跡 遺構

第10号住居跡遺物出土状況 (北東から)

第10号住居跡 (北東から)

第10号住居跡貯蔵穴 (北東から)

第10号住居跡東壁付近 (北西から)

第11号住居跡完掘 (北東から)

第11号住居跡伊跡 (北西から)

1区近景 (北西から)

第12号住居跡貯蔵穴 (南西から)

図版十三 亀山北遺跡 遺構

第15号掘立柱遺物群 (北西から)

第15号掘立柱建物跡 p1 (北東から)

第15号掘立柱建物跡 p2 (北東から)

3区近景 (東から)

第6号土坑完掘 (南から)

第7号土坑完掘 (北から)

第8号土坑出土状況 (南から)

赤曾II遺跡から亀山北遺跡を見る (北東から)

図版十四 亀山北遺跡 遺物

旧石器時代 1~10

SI-09 1・6~10・16・21・31・38・39

図版十五 亀山北遺跡 遺物

SI-09 19・32・33・36・40・42

SI-10 1~4・6・8~10・14・17・19~21

図版十六 亀山北遺跡 遺物

SI-10 18・22

SI-11 1

SI-12 1~6

その他の遺物 桶文時代 1・2

その他の遺物 弥生時代 3~11

第1章 調査にいたる経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯

赤曾II遺跡と亀山北遺跡の発掘調査は、栃木県土木部道路建設課及び真岡土木事務所が行った一般国道408号真岡北バイパスの建設に伴い実施した。真岡北バイパスは、県内外の地域の連携と交流促進を目的とした栃木新時代創造計画の一環である鬼怒・テクノ通りの一路線であり、栃木県東部の文化・行政・商工業の中核をなす真岡市と、西に隣接する県都宇都宮を結ぶ交通の要衝となるものである。

当該事業を所轄する栃木県土木部道路建設課（以下土木部）では、平成12年9月20日の栃木県教育委員会事務局文化財課（以下文化財課）との事業打合会において、道路建設予定地内に遺物包蔵地の所在する旨の説明を行い、平成13年3月7日付け道建第179号で文化財課あて工事予定区内の埋蔵文化財所在調査を依頼した。文化財課は平成13年3月15日に工事予定区内の踏査を行い、赤曾II遺跡・亀山北遺跡の所在を確認し、平成13年3月28日付け文財第723号で回答した。両遺跡の取扱については、平成13年9月13日・平成14年9月11日に行われた当該事業を担当する真岡土木事務所と文化財課との事業打合会、平成14年9月30日に行われた土木部と文化財課との個別協議、平成14年10月7日の現地調査により、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。これをうけて、平成15年4月1日付け道建第1号において教育委員会教育長あて発掘調査の依頼がなされた。文化財課では、同日付け文財第68号で（財）とちぎ生涯学習文化財団（以下財団）理事長あて発掘調査の見積書の提出を依頼、埋蔵文化財センター（以下センター）では、同日付けとち理文第



第1図 遺跡位置図

32号で回答した。次いで文化財課より同日付け文財第139-3号で財団理事長あて委託契約締結の依頼がなされ、センターでは同日付けとち埋文第35号でこれを受諾した。文化財課では同日付け文財第140-3号で土木部長あて報告し、栃木県知事と財団理事長との間で埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結した。

第2節 調査の経過

1 調査の経過

調査の経過について概略を記す。平成15年度に現地調査及び整理作業・報告書作成作業を行い、調査部調査第二担当がこれを担当した。

調査範囲 赤曾Ⅱ遺跡 11,600m²・亀山北遺跡 13,000m²

調査費用 107,208,000円（うち消費税 5,106,000円）

契約期間 平成15年4月1日から平成16年3月30日

所管である土木部と担当となる真岡土木事務所との細部調整後、平成15年5月21日からトレンチ調査を開始し、重機によ表土除去後、6月4日から発掘作業員による作業を開始し、遺構精査・諸記録を行い9月26日に現地作業を終了した。両遺跡の作業期間は、赤曾Ⅱ遺跡は6月4日～7月3日、重機による埋め戻し・表土除去を挟み、7月25日～8月5日、亀山北遺跡は7月4日～7月23日・8月6日～9月26日である。以後、現地撤収及び埋め戻し作業、諸届け等を行い、10月16日に真岡土木事務所への現地引き渡しを行った。

遺構確認件数が当初の見込みを下回ったことにより調査期間が短縮されたことから、土木部は9月25日付で追加号外で教育長あて発掘調査の変更について依頼した。文化財課では財団理事長あてこれを依頼、センターでは平成15年9月26日付けとち埋文第210号で調査費用の減額に係る委託契約の変更を協議し、同日付け文財第472号の文化財課から通知により、9月29日付けとち埋文第224号で変更契約を締結した。文化財課では10月1日付け文財第473号で土木部あて報告を行った。変更項目は以下のとおりである。

調査費用 46,371,000円（うち消費税 2,897,000円）

2 調査の方法

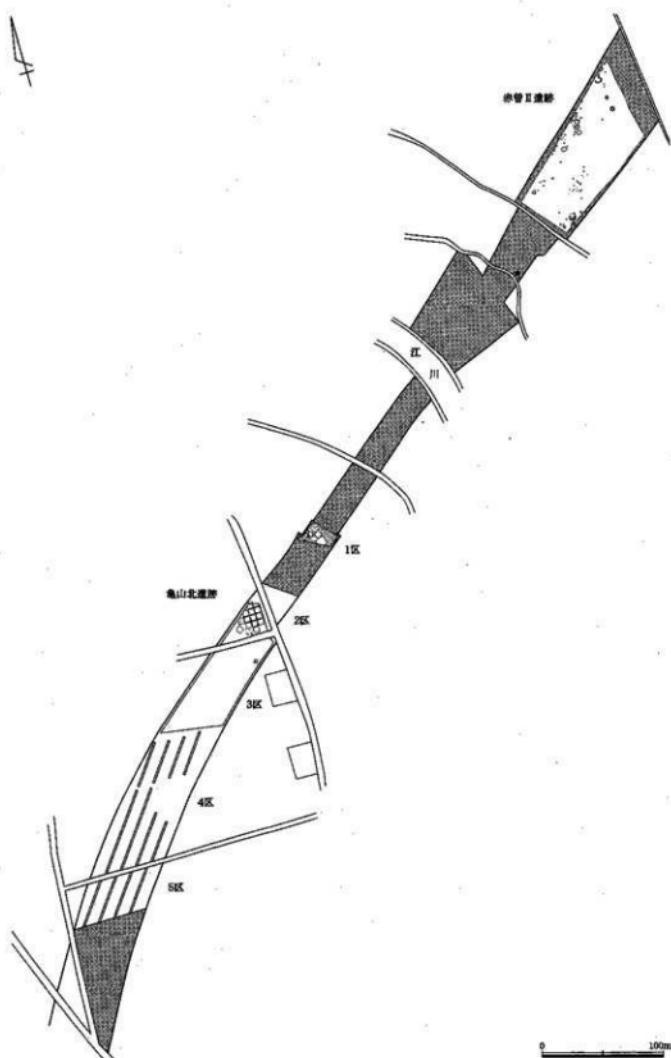
【現地調査】

赤曾Ⅱ遺跡は、調査区外に廃土置き場を確保出来ないことから、調査区内で廃土の盛り返しを行うこととし、面積の1/2ずつ2回に分割して調査を行った。

亀山北遺跡は、調査区が江川を臨む台地の端部から台地中央部に向けて南北方向に約450mに亘り、当初より遺構の粗密が予想されたことや、調査区の現況から遺構の残存の有無が不確定だったことから、調査面積の約1/3にトレンチによる遺構確認調査を行った。調査区は、現道や前年に真岡市教育委員会で行った発掘調査区（以下真岡市調査区）を挟んでいることから、便宜的に、5箇所に分けて調査を行い、調査区の北東端部から1～5区と呼称した。1区は台地の北東端部にあり江川に向いた傾斜地である。2区は、1区と真岡市調査区を挟んで南北側にある。3～5区は台地の平坦部に位置する。トレンチ調査を行った区域は、調査着手時に開田時の削平やその後の耕作によって遺構確認面が深く掘削されていた2・4・5区である。

表土除去に伴い確認された遺構の精査は、赤曾Ⅱ遺跡・亀山遺跡とも以下の手順・手法で行った。

- 1 重機による表土除去後、遺構確認作業。国家座標に基づき、10m四方のグリッド杭を建植、端数にあたる地区にはm単位の杭を建植。グリッド名は南西角を基準とした。



第2図 調査区図

2 穫穴住居跡については以下を基本に行った。

- ① 遺構の中央に十文字の土層観察用のベルト（セクションベルト）設定し、これを残して覆土を除去。この間に出土した遺物については、遺構に伴出する可能性の高い床面付近の遺物のみを原位置に残した。
- ② 覆土除去後セクション図作成・写真撮影。
- ③ セクションベルト除去後、出土遺物の位置・出土高を記録（遺物出土状況図作成）。写真撮影後遺物の取り上げ。
- ④ 火葬・柱穴・貯蔵穴等付属施設の覆土除去。この間必要に応じて付属施設のセクション図・遺物出土状況図作成、写真撮影。
- ⑤ 遺構全体の平面図・断面図作成、レベリング（遺構内の高さを記録）及び写真撮影。
- ⑥ 平面図の作成は平板測量を用いて行った。平面図・断面図については1/20、竪図については1/10の縮尺を基本に行った。

3 土坑などについても、竪穴住居跡同様の方法を用いたが、土層確認は遺構の大きさによる作業スペースの点から、覆土を半載して行った。

4 確認した遺構は、奈良国立文化財研究所で行った平城京跡調査時に使用された略号を参考に、竪穴住居跡をSI、掘立柱建物跡をSB、土坑をSK、ピットをP、性格不明遺構をSXと表した。

旧石器時代の調査は、遺構精査中の遺物の出土及び真岡市調査区の成果から亀山北遺跡3区において行った。国家座標に基づく10m四方のグリッドを5m×5mに四分割し、更に、南西角を基準に4m×4mのグリッドを設定して行った。掘削グリッドは市松状を基本としたが、遺物の出土状況を判断して隣接グリッドも掘削した。

【整理作業】

整理作業は埋蔵文化財センターで実施した。

現地作成の遺構実測図は、事実確認・修正後第二原図を作成し、センターにおいてコンピュータートレースを行い図版化した。

出土遺物は、洗浄・注記作業後接合し、欠失部分についてはクレイティックスを充填して復元し、遺物実測図を作成した。これを墨書き（トレース）し、報告書印刷時にデジタルデータ化して図版とした。

上記の作業に併行して、遺物の事実記載等の原稿執筆、遺物観察表等の表作成・執筆を行うとともに、遺物の写真撮影を行った。

【報告書作成作業】

報告書刊行に必要な実調査以外の原稿執筆・図版作成を行い、遺構・遺物図版・原稿等と併せて割付し、印刷校正後刊行となった。

本報告書作成に係る遺物、遺構・遺物実測図・写真、空中写真等の成果品、各種台帳の整理を行い、収蔵庫・記録保管室に収納し、赤曾II遺跡・亀山北遺跡発掘調査の全ての作業を完了した。

3 調査の組織

平成15年度の発掘調査を実施した組織は以下のとおりである。

主作者 財團法人とちぎ生涯学習文化財団 理事長職務代行者 佐藤 誠 事務局長 古橋 哲一
総務企画部長 渡辺 和夫 総務企画次長 岡 健夫

埋蔵文化財センター 常務理事兼所長 篠原 洋
 主幹兼調査部長 橋本澄朗
 調査第二担当副主幹 田熊清彦 調査第二担当主査 木村雅人
 植木茂雄
 津野 仁
 主任 手塚達弥
 篠原浩恵
 相田 孝
 片根義幸

表1 赤曾II遺跡遺構番号対照表

| 地盤番号 | 調査番号 | 遺構 | 地盤番号 | 調査番号 | 遺構 | 地盤番号 | 調査番号 | 遺構 |
|-------|--------|-------|-------------|------------|------|------------|------------|--------------------|
| S1-1 | 住居跡 | SK-32 | 土坑 | p 2 | p 18 | SX-61開通ビット | SK-62 | 土坑 |
| S1-2 | 住居跡 | SK-33 | 土坑 | p 3 | p 19 | SX-61開通ビット | SK-71 | SX-50 土坑 |
| S1-3 | 住居跡 | SK-34 | 土坑 | p 4 | p 17 | SX-61開通ビット | SK-72 | 欠番 土坑(SX-03重複) |
| S1-4 | 住居跡 | SK-35 | 土坑 | p 5 | p 15 | SX-61開通ビット | P 73 | ビット |
| S1-5 | 住居跡 | P 36 | ビット | p 6 | p 14 | SX-61開通ビット | P 74 | ビット |
| S1-6 | 住居跡 | SK-37 | 土坑 | p 7 | p 13 | SX-61開通ビット | P 75 | ビット |
| S1-7 | 住居跡 | SK-38 | 土坑 | p 8 | p 12 | SX-61開通ビット | P 76 | ビット |
| S1-8 | 住居跡 | P 39 | ビット | p 9 | p 11 | SX-61開通ビット | P 77 | ビット |
| S1-9 | 住居跡 | P 40 | ビット | p 10 | p 10 | SX-61開通ビット | P 78 | ビット |
| SK-10 | 土坑 | SK-41 | 土坑 | p 11 | p 7 | SX-61開通ビット | P 79 | ビット |
| SK-11 | 土坑 | SK-42 | 土坑 | p 12 | p 8 | SX-61開通ビット | P 80 | ビット |
| SK-12 | 円形周溝遺構 | SK-43 | 土坑 | p 13 | p 9 | SX-61開通ビット | P 81 | ビット |
| SK-13 | 円形周溝遺構 | S1-44 | 住居跡 | p 14 | p 6 | SX-61開通ビット | P 82 | ビット |
| SK-14 | 円形周溝遺構 | SK-45 | 土坑 | p 15 | p 5 | SX-61開通ビット | P 83 | ビット |
| SK-15 | 円形周溝遺構 | P 46 | ビット | p 16 | p 4 | SX-61開通ビット | P 84 | ビット |
| SK-16 | 土坑 | P 47 | ビット | p 17 | p 21 | SX-61開通ビット | P 85 | ビット |
| SK-17 | 土坑 | SK-48 | 土坑 | p 18 | p 20 | SX-61開通ビット | P 86 | ビット |
| SK-18 | 土坑 | SK-49 | 土坑 | p 19 | P 70 | SX-61開通ビット | P 87 | ビット |
| SK-19 | 土坑 | SK-50 | 土坑(SX-07重複) | p 20 | p 3 | SX-61開通ビット | P 88 | ビット |
| SK-20 | 土坑 | SK-51 | 土坑 | p 21 | p 1 | SX-61開通ビット | P 89 | ビット |
| SK-21 | 土坑 | SK-52 | 土坑 | p 22 | p 2 | SX-61開通ビット | P 90 | ビット |
| SK-22 | 土坑 | SK-53 | 土坑 | p 23 | p 22 | SX-61開通ビット | P 91 | ビット |
| SK-23 | 土坑 | P 54 | ビット | p 24 | P 69 | SX-61開通ビット | P 92 | ビット |
| SK-24 | 土坑 | SK-55 | 土坑 | p 25 | P 68 | SX-61開通ビット | P 93 | ビット |
| SK-25 | 土坑 | SK-56 | 土坑 | p 26 | P 64 | SX-61開通ビット | SK-94 | 土坑(SX-08重複) |
| SK-26 | 船穴状土坑 | SK-57 | 土坑 | p 27 | P 65 | SX-61開通ビット | SK-95 | 欠番 土坑 |
| SK-27 | 欠番 | SK-58 | 土坑 | p 28 | P 63 | SX-61開通ビット | SK-96 | 欠番 土坑 |
| SK-28 | 土坑跡 | SK-59 | 土坑 | p 29 | P 67 | SX-61開通ビット | P 97 | 欠番 ビット |
| SK-29 | 土坑 | SK-60 | 土坑 | p 30 | P 66 | SX-61開通ビット | P 98 | 欠番 ビット(SK-04重複) |
| SK-30 | 土坑 | SX-61 | □字状周溝遺構 | p 31 | p 24 | SX-61開通ビット | | |
| SK-31 | 土坑 | p 1 | p 16 | SX-61開通ビット | p 32 | p 25 | SX-61開通ビット | |

表2 亀山北遺跡遺構番号対照表

| 地盤番号 | 調査番号 | 遺構 | 地盤番号 | 調査番号 | 遺構 | 地盤番号 | 調査番号 | 遺構 |
|------|-------|-------|------|---------|--------|------|------|-----|
| S1-1 | 住居跡 | SK-7 | 土坑 | SK-13 | 土坑 | P 16 | | ビット |
| S1-2 | 住居跡 | SK-8 | 方形窓穴 | S1-14 | 住居跡 | P 17 | | ビット |
| P 3 | ビット | S1-9 | 住居跡 | SB-15p1 | 獨立柱遺物跡 | P 18 | | ビット |
| P 4 | ビット | S1-10 | 住居跡 | p 2 | P 15 | P 19 | | ビット |
| SK-5 | 土坑 | S1-11 | 住居跡 | p 3 | | P 20 | | ビット |
| SK-6 | 船穴状土坑 | S1-12 | 住居跡 | p 4 | P 16 | P 21 | | ビット |

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

赤曾II遺跡・亀山北遺跡は栃木県真岡市赤曾及び亀山地内に所在する。真岡市北西部の田園地帯であり、両遺跡は江川を挟んで対峙する位置にある。両遺跡の距離は直線にして500m弱、真岡市街地は南東に3.0km強の位置にある。

栃木県は関東平野の最北にあり、東は茨城県、西は群馬県、南は埼玉県、北は福島県に隣接する内陸県である。地形は東・西側の山塊と中央部に開けた南北に細長い平地帯とに三分でき、各々は東部山地・西部山地・中央部平地と呼称される。中央部平地は、主として、南流する河川の浸食によってもたらされた細長い沖積低地と河成段丘面とからなり、堆積した火山灰層（関東ローム層）の層序関係等によって、宝積寺面→宝木面→田原面→絹島面（沖積低地）とに形成時期が区分される。

赤曾II遺跡・亀山北遺跡の載る宝積寺台地は、中央部平野の東縁辺付近に位置し、宝積寺面に相当する。遺跡付近の主要河川は、宝積寺台地の西側に鬼怒川、東側に五行川、中央部平野と東部山地を分ける位置に小貝川があり、ほぼ平行して南流する。鬼怒川は広大な氾濫原を抱える本県最大の河川で、茨城県守谷町で利根川に合流する。五行川は茨城県下館市で小貝川に合流し、小貝川は取手市で利根川に合流する。台地は、これら主要河川と、いずれは主要河川に合流することとなる小河川の浸食によって、ほぼ南北方向に細長く狭量に刻まれ、幾つもの樹枝状の小開析谷が形成されるが、台地上には平坦面が良く残る。

赤曾II遺跡・亀山北遺跡付近の宝積寺台地は、江川の浸食による小開析谷によって台地が区切られ、石法寺台地とも別称される。江川は、鬼怒川付近に源を発し、両遺跡より5.5kmほど南で五行川に注ぐ小河川である。川筋は蛇行を繰り返しつつ南流し、赤曾II遺跡・亀山北遺跡付近では、最も大きな屈曲となり、さながら「S」字状を呈する。亀山北遺跡は江川の西岸にあり、張り出した「く」字の突端から、赤曾II遺跡は東岸にあり、「く」字の奥まった深部から、川筋の屈曲を眼下にしたこととなる。

江川は現在では農業用水として整備され、豊富な水量から周辺の耕作地に潤沢な恵みをもたらしている。遺跡付近の台地は、畑作・陸田として、低地は多くが水田化され、カワニラやミズトラノオなどの稀少植物の確認もある。現状から往時を偲ぶ縁を見つけることは儘ならぬが、付近に湧水の確認はなく、台地の合間を蛇行を繰り返しつつ流れ下る様に水の流れの変わらぬ姿が彷彿とされ、江川の流れによって遺跡が展開したと想像するに十分といえる。

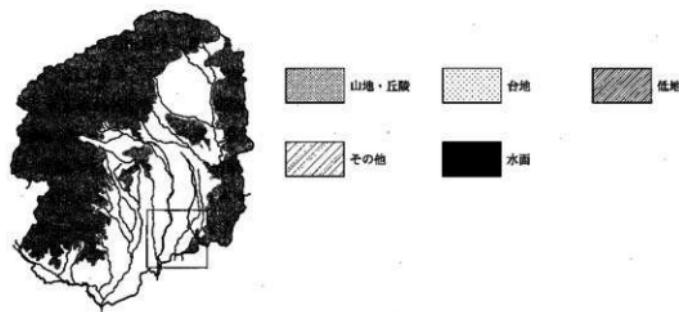
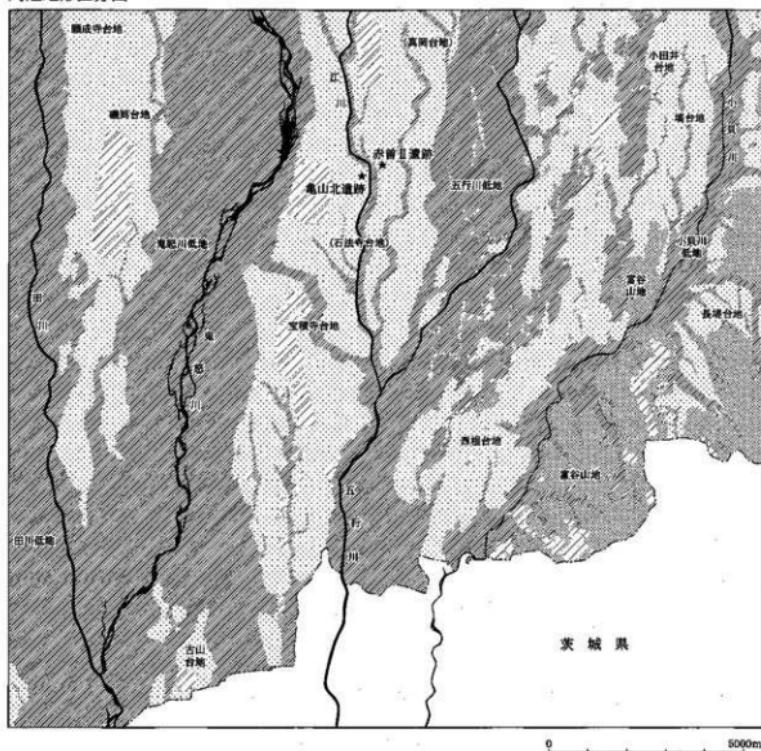
赤曾II遺跡は、台地平坦部に位置し、標高は86.5m前後、低地との比高約18.5mである。亀山北遺跡は台地端部の斜面に位置し、標高80~83.5m、低地との比高約15mである。

第2節 歴史的環境

赤曾II遺跡・亀山北遺跡周辺には多くの遺跡が所在し、古来より本県の鬼怒川東岸の中心が両遺跡周辺であったことを窺い知ることができる。しかし、多くは分布調査によって時期や範囲の知れた遺跡であり、発掘調査の行われた遺跡は少ない。このため、不明確な部分が多いが、本節では、両遺跡付近の遺跡との関わりを中心に各時期の様相の把握に努めたい。

【旧石器時代】 本遺跡付近での調査例には、伊勢崎II遺跡（22）、磯山遺跡（34）で発掘調査がある。磯山遺跡は、本県旧石器時代調査の先駆けとなった遺跡で、独立丘陵上に立地する。遺物は、ベン先形ナイフ

周辺地形区分図



第3図 周辺地形区分図

(Cタイプ) や剥片剥離の特徴から「礫山技法」と称されたナイフ形石器・(Aタイプ)などが、田原ローム下部～宝木ローム上部の黒色帯において出土した。出土したナイフ形石器は形状・技法から、Aタイプ(縦長の剥片を用いて基部の周縁のみに細かい調整剥離を加えた比較的大形な石器)・Bタイプ(Aタイプに比し小形で、基部が調整され打痕を残さない)・Cタイプ(小形の不定形剥片を用い、基部或いは側刃の一部に調整剥離が加えられるが、定形的には認められない。形状は台形で、作り方は切り出し形石器に似る)の3タイプに類別される。伊勢崎Ⅱ遺跡は、亀山北遺跡同様江川西岸に位置する。15基のブロック・26基の礫群を確認し、石器製作の場が推定されている。文化層はATを挟んだ2枚で、接合関係に富んだ石器群が出土したことと石器の主体が剥片類でtoolの少ないことが特徴である。この他、遺物の出土層位が未確認であるが、内野遺跡(?)から礫山遺跡Aタイプに似たナイフ形石器1点、大曲北遺跡(25)から柳葉形の尖頭器1点が出土している。これら以外は、採集による確認で、八木岡遺跡(26)・城内遺跡(43)から石刀、南高岡遺跡(79)から礫山遺跡Cタイプの剥片、猿山遺跡(85)から尖頭器2点が出土した他、山崎台遺跡(78)の遺跡等が知られている。

【縄文時代】両遺跡付近には、周知の遺跡が多いが、稻荷山遺跡(23)・山崎遺跡(67)・柳久保遺跡(65)・井頭遺跡(49)・熊倉A遺跡(40)・城内東遺跡(44)以外は表面採集による確認であり、詳細は明らかではなく、両遺跡の位置する江川付近の遺跡を時期毎に列挙することで当該時期の概要把握の代替とした。草創期は、稻荷山遺跡(23)から調査に伴って出土した微隆起線文土器は、大谷寺遺跡(字都官市)・川木谷遺跡(黒羽町)・登谷遺跡(茂木町)などと並んで県内でも貴重な資料である。早期は、山崎遺跡(67)からの採集遺物が知られる程度である。前期は、稻荷山遺跡(23)・丸山遺跡(27)・山崎遺跡(67)・山崎台遺跡(78)・山王薬師堂脇遺跡(11)において遺物が採集されている。中期は、稻荷山遺跡(23)・丸山遺跡(27)・柳久保遺跡(65)・礫山遺跡(34)・山崎台遺跡(78)・熊倉A遺跡(40)・荻田遺跡(45)・城内遺跡(43)・城内北A遺跡(41)・城内北B遺跡(42)・於宮遺跡(20)・井頭遺跡(49)・塚原遺跡(5)・山王遺跡(12)・城内東遺跡(44)などがある。後期は、柳久保遺跡(65)・山崎台遺跡(78)・城内遺跡(43)・於宮遺跡(20)・塚原遺跡(5)・山王薬師堂脇遺跡(11)・城内東遺跡(43)などがある。これらから明らかなように、現状では中期に遺跡分布中心がある。また、台地平坦面から縁辺部にかけて立地する遺跡が多く、赤曾II遺跡(1)・亀山北遺跡(2)もこれら例に漏れない。江川流域の遺跡からの出土遺物について詳説を付記すると、稻荷山遺跡(23)では、浮島式・阿玉台式・塚原遺跡(5)では加曾利E I～IV式・称名寺式・掘之内I・II式が出土する。

【弥生時代】本遺跡周辺では、小貝川流域と江川流域に分布域が認められる。小貝川流域は遺跡の密集地域であり、県内でも特異な様相を見せる。遺跡は所在位置によって、山崎遺跡(67)を核として柳久保遺跡(65)・能仁寺遺跡(69)・拠点集落とされる長堤遺跡(90)と新田山遺跡(91)・高齢神社東遺跡(89)・車堂遺跡(88)・目生田北遺跡(87)・石並遺跡(第4図外)の小規模遺跡群という3グループに大別できる。江川付近には、現井頭用水合流点付近に稻荷山遺跡(23)・伊勢崎Ⅱ遺跡(22)・下高間木西遺跡(82)・現井頭用水湧水点に井頭遺跡(49)・江川の屈曲部に亀山北遺跡(2)がある。表面採集によって確認された遺跡も多く、詳細は判然としないが、二軒屋式或いは十王台式を伴う後期の遺跡が多い中、亀山北遺跡(2)・下高間木西遺跡(89)で中期の土器が出土したことは特筆される。

【古墳時代】亀山北遺跡の主体となる前期を中心に時代を概観したい。

前期では、山崎1号墳(68)、亀の子塚古墳(芳賀町)、上根二子塚1号墳・3号墳(92)、星の宮浅間塚古墳(86)などの前方後方墳の築造から、五行川・小貝川流域に、小地域の首長の誕生が想起されている。江

川流域では嵇荷山遺跡（23）で方形周溝墓5基が確認されている。集落跡としては、五行川流域に谷近台遺跡（57）、吹上遺跡（47）、真岡工業高校北遺跡（39）、城内遺跡（43）、谷中遺跡（35）、熱田遺跡（46）、箕輪前遺跡（54）、江川流域に井頭遺跡（49）、塚原遺跡（5）、伊勢崎II遺跡（22）、下高間木西遺跡（82）、龜山北遺跡（2）がある。これらの中で特筆されるのは、東海系の「S」字型が多量に出土した谷近台遺跡（57）である。「S」字型に着目すると、五行川流域では、谷近台遺跡（57）の他、吹上遺跡（47）、真岡工業高校北遺跡（39）、江川流域では、龜山北遺跡（2）、伊勢崎II遺跡（22）と、限られた遺跡のみに出土が認められる。

中期以降を概観すると、芳賀郡内最大の前方後円墳である鷲筑古墳（21）が江川流域に築造される。両遺跡付近の著名な遺跡としては、五行川流域の鷲筑古墳（55）、江川流域には龜山北遺跡（2）に極めて近い位置に龜山大塚古墳（84）があり、どちらも円墳で多くの人物・形象埴輪が伴う。

【奈良・平安時代】 赤曾II遺跡の主体となる時期である。当時の赤曾II遺跡は、古代下野国芳賀郡に属する。芳賀郡は、古代下野九国の中、那珂川流域の那須郡と並んで上郡とされ、「和名抄」によれば十四郷を管掌する下野国最大の郡とされている。赤曾II遺跡（1）と直線距離にして約4km北東の現在の真岡市大内地区には、芳賀郡衙・郡寺に推定される塔法田遺跡（53）、大内魔寺（56）があり、古代芳賀郡の中心地と見られている。また、鬼怒川流域には「郡倉別院」と推定される中村遺跡（13）があり、赤曾II遺跡（1）は古代芳賀郡の中枢近くに位置することとなる。

集落跡については、比較的豊富な調査例から様相の明らかな遺跡も多いが、特筆されるのは、星の宮ヶカチ遺跡（93）、井頭遺跡（49）である。星の宮ヶカチ遺跡（93）は、9世紀代の集落跡で、大型な建物跡を含む住居跡・を含む住居跡24軒・掘立柱建物跡8棟が規則的に配置されている。多量の墨書き器を含む出土遺物から律令官人層との関連が強いとの指摘がある。井頭遺跡は、8世紀中葉～10世紀初頭の集落跡で、住居跡124軒・掘立柱建物跡12棟が確認されている。1975年に発刊された報告書によれば「湧水地を控え、低湿地を農業生産の場として臨む」農耕集落の典型とされるとともに、「芳賀郡衙の建立（整備）に際して、何らかの形で関係」した「強力な政治的基盤を背景に結集された」計画村落であるとの見解がなされている。また、生産遺跡としては、小貝川以西に南高岡窯跡群（76）が最も近い位置にあるが、稼働時期や供給先などに不明な点が多い。関連が明らかな生産遺跡としては、第4回の範囲となるが、真岡市の東に隣接する益子町に、広範囲な須恵器の供給が明確な益子古窯群や官衙・郡寺へ供給された瓦生産窯である西山古窯跡などがある。

《主な参考文献》

- 大金宣亮・橋本澄朗他 1974 「栃木県埋蔵文化財調査報告第14集 井頭」 栃木県教育委員会
 真岡市史編さん委員会 1984 「真岡市史」第一巻 考古資料編
 真岡市史編さん委員会 1987 「真岡市史」第六巻 原始古代中世通史編

表3 周辺遺跡一覧

| No | 遺跡名 | 所在地 | 種別 | 時期 | 主な参考文献 |
|----|--------|----------|-----|--------|-------------------------|
| 1 | 赤曾II遺跡 | 真岡市下越谷赤曾 | 集落跡 | 平安 | |
| 2 | 龜山北遺跡 | 真岡市龜山 | 集落跡 | 旧石器・古墳 | 『第268集栃木県埋蔵文化財保護行政年報』25 |
| 3 | 古内I遺跡 | 真岡市下越谷古内 | 集落跡 | 縄文 | 『古内I・II遺跡確認調査報告書』 |

| No | 遺跡名 | 所在地 | 種別 | 時期 | 主な参考文献 |
|----|-------------|-------------------|--------|-------------------|------------------------------------|
| 4 | 古内Ⅱ遺跡 | 真岡市下籠谷字吉内 | 集落跡 | 縄文～古墳 | 『古内・Ⅱ遺跡確認調査報告書』 |
| 5 | 保原遺跡 | 真岡市下籠谷字保原 | 散布地 | 縄文 | 『真岡市史』第1巻考古資料編 |
| 6 | 北原遺跡 | 真岡市下籠谷字北原 | 集落跡 | 古墳(7c代) | 『真岡市史』第1巻考古資料編 |
| 7 | 内野遺跡 | 真岡市下籠谷 | 集落跡 | 旧石器・縄文～平安 | 『真岡市史』第1巻考古資料編 |
| 8 | 勝瓜南原古墳群 | 真岡市下籠谷字南原、勝瓜 | 古墳 | 古墳 | 『真岡市史』第1巻考古資料編 |
| 9 | 御殿山古墳群 | 真岡市上大沼 | 古墳 | 古墳 | 『真岡市史』第1巻考古資料編 |
| 10 | 北原台古墳群 | 真岡市上大沼字北原台 | 古墳 | 古墳(6c後～7c前) | 『真岡市史』第1巻考古資料編 |
| 11 | 山王薬師堂協定遺跡 | 真岡市長田字山王 | 散布地 | 縄文 | 『真岡市史』第1巻考古資料編 |
| 12 | 山王遺跡 | 真岡市長田字山王 | 散布地 | 縄文 | 『真岡市史』第1巻考古資料編 |
| 13 | 中村遺跡 | 真岡市中字間木堀 | 寺院跡 | 奈良・平安(8c末～11c) | 『栃木県埋蔵文化財調査報告第28集 栃木県真岡市中村遺跡調査報告書』 |
| 14 | 中村大塚遺跡 | 真岡市中 | 古墳 | 古墳(6c末) | 『真岡市史』第1巻考古資料編 |
| 15 | 宿中天神山古墳群 | 真岡市宿中字正法寺西 | 古墳 | 古墳(6c末～7c前) | 『真岡市史』第1巻考古資料編 |
| 16 | 中村城址 | 真岡市中 | 城郭跡 | 中世 | 『栃木県の中世城跡』 |
| 17 | 若旅富士山古墳群 | 真岡市若旅 | 古墳 | 古墳(6c後～7c中) | 『真岡市史』第1巻考古資料編 |
| 18 | 小橋横塚古墳 | 真岡市字小橋 | 古墳 | 古墳 | 『真岡市史』第1巻考古資料編 |
| 19 | 小橋Ⅰ遺跡 | 真岡市字小橋 | 不明 | 不明 | 『栃木県埋蔵文化財調査報告第194集 大曲北遺跡・小橋Ⅰ遺跡』 |
| 20 | 於宮遺跡 | 真岡市八木周字於宮 | 散布地 | 縄文 | 『真岡市史』第1巻考古資料編 |
| 21 | 瓢箪原古墳 | 真岡市八木周 | 古墳 | 古墳 | 『真岡市史』第1巻考古資料編 |
| 22 | 伊勢崎Ⅱ遺跡 | 真岡市伊勢崎 | 集落跡 | 旧石器～平安 | 『栃木県埋蔵文化財調査報告第225・240集 伊勢崎Ⅱ遺跡』 |
| 23 | 新荷山遺跡 | 真岡市高勢町(旧西高間木、伊勢崎) | 集落跡 | 縄文・弥生～古墳 | 『新荷山遺跡』『認定登録証第1次』 |
| 24 | 八木岡遺跡 | 真岡市八木岡 | 散布地 | 旧石器 | 『真岡市史』第1巻考古資料編 |
| 25 | 大曲北遺跡 | 真岡市八木岡 | 集落跡 | 奈良～平安 | 『栃木県埋蔵文化財調査報告第194集 大曲北遺跡・小橋Ⅰ遺跡』 |
| 26 | 八木岡Ⅰ遺跡 | 真岡市八木岡 | 集落跡 | 奈良～平安・近代 | 『栃木県埋蔵文化財調査報告第211集・八木岡Ⅰ遺跡』 |
| 27 | 丸山遺跡 | 真岡市台町 | 散布地 | 縄文～古墳 | 『真岡市史』第1巻考古資料編 |
| 28 | 沼尻八幡山古墳 | 真岡市東沼字沼尻 | 古墳 | 古墳(6c後～7c前) | 『真岡市史』第1巻考古資料編 |
| 29 | 西物井遺跡 | 二宮町西物井 | 集落跡 | 縄文・古墳～中・近世 | 『栃木県埋蔵文化財調査報告第238集西物井遺跡』 |
| 30 | 峰高前遺跡 | 二宮町峰高前 | 集落跡 | 古墳～近世 | 『埋蔵文化財センター年報』第13号 |
| 31 | 曲田 | 二宮町高田 | 集落跡 | 縄文・古墳 | 『埋蔵文化財センター年報』第13号 |
| 32 | 市之塚 | 二宮町市塚 | 集落跡 | 古墳前～後 | 『第262集栃木県埋蔵文化財保護行政年報』24 |
| 33 | 東大島の箱式石棺 | 真岡市東大島 | 古墳 | 古墳(6c～7c) | 『真岡市史』第1巻考古資料編 |
| 34 | 鹿山遺跡 | 真岡市東大字鹿山 | 集落跡 | 旧石器 | 『真岡市史』第1巻考古資料編 |
| 35 | 谷中遺跡 | 真岡市東沼 | 集落跡・墓壙 | 古墳(中～後期)・奈良・平安・近世 | 『233集 栃木県埋蔵文化財保護行政年報』22 |
| 36 | 御正遺跡 | 真岡市田町沼澤三 | 集落跡 | 古墳(7c代) | 『真岡市史』第1巻考古資料編 |
| 37 | 旧日本蓄音機工場内遺跡 | 真岡市台町 | 集落跡 | 古墳 | 『真岡市史』第1巻考古資料編 |
| 38 | 西部下如来遺跡 | 真岡市西郷下如来 | 寺院跡 | 奈良～平安 | 『真岡市史』第1巻考古資料編 |
| 39 | 真岡工農高校北遺跡 | 真岡市西郷 | 集落跡 | 縄文(中期) | 『真岡市史』第1巻考古資料編 |
| 40 | 熊倉Ⅰ遺跡 | 真岡市熊倉 | 集落跡 | 縄文～古墳 | 『真岡市史』第1巻考古資料編 |
| 41 | 城内北A遺跡 | 真岡市台町 | 散布地 | 縄文 | 『真岡市史』第1巻考古資料編 |
| 42 | 城内北B遺跡 | 真岡市台町 | 散布地 | 縄文 | 『真岡市史』第1巻考古資料編 |
| 43 | 城内遺跡 | 真岡市台町 | 集落跡 | 縄文 | 『真岡市史』第1巻考古資料編 |
| 44 | 城内東遺跡 | 真岡市台町 | 散布地 | 縄文 | 『真岡市史』第1巻考古資料編 |
| 45 | 萩田遺跡 | 真岡市熊倉町 | 散布地 | 縄文 | 『真岡市史』第1巻考古資料編 |
| 46 | 熱田遺跡 | 真岡市田烏 | 集落跡 | 古墳 | 『真岡市史』第1巻考古資料編 |
| 47 | 吹上遺跡 | 真岡市堀内 | 集落跡 | 古墳 | 『真岡市史』第1巻考古資料編 |

| No | 遺跡名 | 所在地 | 種別 | 時期 | 主な参考文献 |
|----|-----------|-------------|-------|--------------|---------------------------------------|
| 48 | 井頭遺跡(太郎家) | 真岡市下越谷字井頭 | 古墳・集落 | 古墳・平安 | 『群馬県埋蔵文化財調査報告書第264号 井頭遺跡』 |
| 49 | 井頭遺跡 | 真岡市下越谷字井頭 | 集落跡 | 弥生～奈良・平安 | 『群馬県埋蔵文化財調査報告書第14集 井頭』 |
| 50 | 上り戸遺跡 | 芳賀町西高橋 | 集落跡 | 绳文・奈良・平安 | 『群馬県埋蔵文化財センターレポート』第13号 |
| 51 | 亀の子塚古墳 | 芳賀町西高橋字高峰 | 古墳 | 古墳 | 『「真岡市史」第1巻考古資料編』 |
| 52 | 京泉シトミ原古墳群 | 真岡市京泉 | 古墳 | 古墳(6c後～7c) | 『「真岡市史」第1巻考古資料編』 |
| 53 | 堂田遺跡 | 真岡市京泉字堂田 | 集落跡 | 奈良・平安 | 『「真岡市史」第1巻考古資料編』 |
| 54 | 箕輪前遺跡 | 真岡市飯貝字箕輪前 | 集落跡 | 古墳 | 『「真岡市史」第1巻考古資料編』 |
| 55 | 舞櫛古墳 | 真岡市京泉字舞櫛原 | 古墳 | 古墳(6c後) | 『「真岡市史」第1巻考古資料編』 |
| 56 | 大内院寺跡 | 真岡市京泉字内院、飯貝 | 寺院跡 | 奈良(7c末～8c後半) | 『「真岡市史」第1巻考古資料編』 |
| 57 | 谷近台遺跡 | 芳賀町西水沼字谷近台 | 集落跡 | 古墳 | 『宇大史学2』 |
| 58 | グシ内南遺跡 | 芳賀町祖母井 | 集落跡 | 平安 | 第268集群木県埋蔵文化財保護行政年報』25 |
| 59 | 赤坂道上北遺跡 | 市貝町上根 | 集落跡 | 绳文 | 『群馬県埋蔵文化財センターレポート』第13号 |
| 60 | 高林遺跡 | 市貝町上根 | 集落跡 | 绳文・古墳～平安 | 『群馬県埋蔵文化財調査報告書第272集 高林遺跡』 |
| 61 | 彦七新田遺跡 | 市貝町上根 | 集落跡 | 绳文・古墳後～平安 | 『群馬県埋蔵文化財センターレポート』第13号 |
| 62 | 鶴田A遺跡 | 真岡市鶴田町内 | 集落跡 | 旧石器・古墳～奈良・平安 | 『群馬県埋蔵文化財調査報告書第243・253集 鶴田A遺跡 I・II遺跡』 |
| 63 | 岡古墳群 | 真岡市西田井字岡 | 古墳 | 古墳(7c後) | 『「真岡市史」第1巻考古資料編』 |
| 64 | 深田遺跡 | 真岡市根本 | 集落跡 | 古墳・平安 | 『「真岡市史」第1巻考古資料編』 |
| 65 | 柳久保連跡 | 真岡市根本字柳久保 | 集落跡 | 绳文・弥生～古墳 | 『「真岡市史」第1巻考古資料編』 |
| 66 | 柳久保東連跡 | 真岡市根本 | 散布地 | 绳文中期・弥生後期～奈良 | 『群馬県埋蔵文化財地図』 |
| 67 | 山崎遺跡 | 真岡市根本字山崎 | 古墳 | 绳文～弥生 | 『「真岡市史」第1巻考古資料編』 |
| 68 | 山崎古墳群 | 真岡市根本字山崎 | 古墳 | 古墳(5c初から6c) | 『「真岡市史」第1巻考古資料編』 |
| 69 | 能仁寺西連跡 | 真岡市根本字上根 | 散布地 | 弥生 | 『「真岡市史」第1巻考古資料編』 |
| 70 | 大根山古墳 | 真岡市根本字大根山 | 集落跡 | 古墳 | 『「真岡市史」第1巻考古資料編』 |
| 71 | 大崩遺跡 | 真岡市根本字大崩 | 集落跡 | 古墳 | 『「真岡市史」第1巻考古資料編』 |
| 72 | 森ノ木古墳群 | 真岡市根本字森ノ木 | 古墳 | 古墳 | 『「真岡市史」第1巻考古資料編』 |
| 73 | 神宮寺跡古墳 | 真岡市根本字森ノ木 | 古墳 | 古墳(後期末葉) | 『「真岡市史」第1巻考古資料編』 |
| 74 | 峰の岩尾古墳 | 真岡市御殿宇十九坂 | 古墳 | 古墳(7c中～末) | 『「真岡市史」第1巻考古資料編』 |
| 75 | 小林大塚古墳 | 真岡市小林 | 古墳 | 古墳 | 『「真岡市史」第1巻考古資料編』 |
| 76 | 南高岡麻績群 | 真岡市南高岡 | 墓跡 | 古墳～平安 | 『「真岡市史」第1巻考古資料編』 |
| 77 | 福井林遺跡 | 真岡市道祖士字福井林 | 集落跡 | 古墳(後期末葉) | 『「真岡市史」第1巻考古資料編』 |
| 78 | 山崎台遺跡 | 真岡市南高岡 | 散布地 | 绳文 | 『「真岡市史」第1巻考古資料編』 |
| 79 | 南高岡連跡 | 真岡市南高岡 | 散布地 | 旧石器 | 『「真岡市史」第1巻考古資料編』 |
| 80 | 竹内瀧跡 | 真岡市南高岡字大手 | 散布地 | 绳文 | 『「真岡市史」第1巻考古資料編』 |
| 81 | 長田浅間塚 | 真岡市長田 | 高塚 | 近世 | 『群馬県埋蔵文化財調査報告書第266集 長田浅間塚』 |
| 82 | 下高岡木西連跡 | 真岡市下高岡木 | 集落跡 | 古墳・中世 | 『群馬県埋蔵文化財調査報告書第268集下高岡木西連跡』25 |
| 83 | 下船連跡 | 真岡市八木岡 | 集落跡 | 中世 | 『群馬県埋蔵文化財センターレポート』第13号 |
| 84 | 龜山大塚古墳 | 真岡市龜山 | 古墳 | 古墳(6c末～7c初) | 『「真岡市史」第1巻考古資料編』 |
| 85 | 鏡山連跡 | 真岡市龜山字鏡山 | 散布地 | 旧石器 | 『「真岡市史」第1巻考古資料編』 |
| 86 | 星の宮浅間塚古墳 | 益子町塙字星の宮 | 古墳 | 古墳 | 『益子町史』第1巻考古資料編 |
| 87 | 生田目北連跡 | 益子町生田目 | 散布地 | 弥生 | 『益子町史』第1巻考古資料編 |
| 88 | 車堂連跡 | 益子町生田目 | 集落跡 | 绳文・弥生・奈良・平安 | 『益子町史』第1巻考古資料編 |
| 89 | 高幡神社東連跡 | 益子町生田目 | 散布地 | 弥生 | 『益子町史』第1巻考古資料編 |
| 90 | 長堀連跡 | 真岡市長堀 | 集落跡 | 绳文～奈良 | 『長堀連跡発掘調査報告書』 |
| 91 | 新田山連跡 | 真岡市長堀 | 散布地 | 弥生 | 『益子町史』第1巻考古資料編 |
| 92 | 上根二子塚古墳 | 市貝町上根二子塚 | 古墳 | 古墳 | 『群馬県市貝町上根二子塚古墳群』 |
| 93 | 星の宮ケカチ連跡 | 益子町塙字ケカチ | 集落跡 | 古墳・奈良・平安 | 『益子町文化財調査報告書星の宮ケカチ連跡』 |



第4図 周辺遺跡分布図

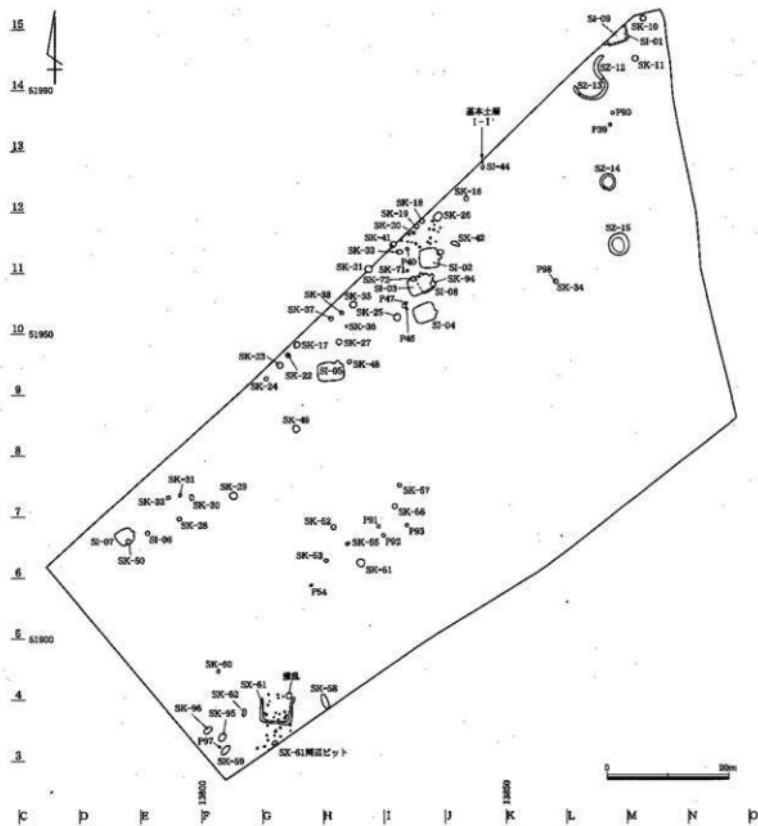
第3章 赤曾II遺跡

第1節 遺構・遺物の概要

本調査区内からは、住居跡10軒、土坑・ピット75基、性格不明遺構3基を確認した。しかし、本調査区内には、耕作による筋状の擾乱が東西・南北に複数本入り、遺構の残存状況は極めて悪い。また、竪基底面のみが残存する遺構が存在することから、遺構面の削平により、失われた遺構が存在する可能性は否めない。

遺構の配置を見ると、調査区北東辺の中央に集中し、そこを中心とした同心円上に数基の遺構の散在が認められる。しかし、SX-61は遺構の存在しない空白部を挟んで調査区南西に孤立する。

調査区内において確認された遺物は、収納箱約25箱を数える。本報告書掲載遺物の総数は、土師器など約



第5図 遺構配置図

100点で、概ね遺構の時期に相当する遺物である。

各時期の様相を概略すると、弥生時代、奈良時代、中世の遺構・遺物はないが、旧石器時代以降、以下を確認した。

旧石器時代は遺構の確認はないが、剥片3片が出土した。

縄文時代は当該時期と判断される陥穴状土坑1基、若干の縄文土器・石器を確認した。

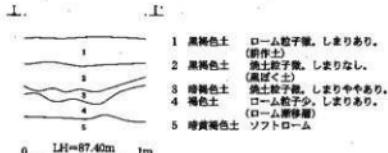
弥生時代は遺構・遺物の確認はない。

古墳時代は遺構の確認はないが、ごく少量の土器片が出土した。

平安時代は本調査区の主体となる時期で、住居跡

8軒を確認した。これ以外の土坑・ピット・性格不明遺構の中にもこの時期に属するもののが存在する可能性は極めて高い。出土した遺物の大多数はこの時期にある。

近世は遺構の確認はないが、ごく少量の陶器片が出土した。



第6図 基本土層（第5図I-I'）

第2節 住居跡

1. 調査の概要

本調査区からは、10軒の住居跡を確認した。SI-01・02・03・04・05・07・08・09は平安時代の遺構と判断される。SI-06・44は竈の基底面が残るのみで時期等の判別はできない。しかし、平安時代の住居跡と判断される8軒とは、遺構の深さに大きな差異があり、この点をもって平安時代以外の時期の推定も可能となろう。

平安時代と判断した8軒は、床面に残る遺物が少ないことが共通する。出土遺物は覆土内へ混入遺物であるためか、総じて破片が小さく、壊とした破片の中に高台付壊が含まれる可能性があるなど、器種等を明確には判り得ないものが多い。

2. 住居跡

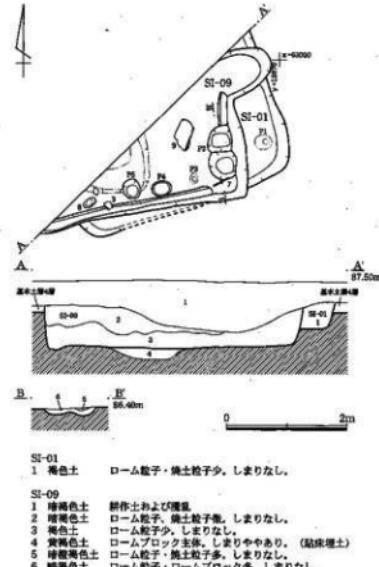
第1号住居跡・SI-01（第7図・図版二）

位置 L-14・15グリッドに位置する。

重複 SI-09と重複し、本遺構が先行する。また、遺構の北西半部は調査区外にある。このため、本遺構自体の残存部分は板めて少ない。

規模 東西壁7.16m、床面までの深さ約0.4m。主軸方向はN-24°-W。

壁 床面より直立気味に立ち上がる。



第7図 第1号・第9号住居跡実測図

岡溝 確認されなかった。

仕切溝 確認されなかった。

柱穴 重複するSI-09の遺構部分と併せて、5基のピットを確認したが、帰属については明確な判断はなし得ない。しかし、位置的な状況からは、いずれかが主柱穴となる可能性は否定しきれない。各々の深さは、P1-SI-01床面から19cm、SI-09の床面からP 2-12cm、P 3-15cm、P 4-25cm、P 5-22cmである。

床面 残存部分はほぼ平坦である。特に硬化する部分は認められない。

覆土 自然堆積と判断される。

貯蔵穴 確認されなかった。

その他の施設 確認されなかった。

火焚 確認されなかった。

出土遺物 覆土中から土師器壺小片7片、破碎石原石1点が出土した。何れも小片であり図示し得なかつたが、壺は少なくとも3個体分の破片がある。形態の判別できる口縁は2片で何れも「下野型」であり、このうち一片は胎土中に金雲母片を含む。

本遺構の時期を推定することは難しいが、1~3期に埋没過程あったとみて大過あるまい。

第2号住居跡 SI-02 (第8~11図・図版二、七)

位置 I-11グリッド。

重複 重複する造構はない。

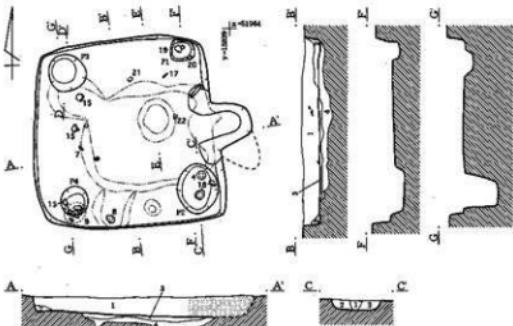
規模 ほぼ正方形で、東西約3.1m、南北約3.1m。床面までの深さ約0.3m。主軸方向はN-9°W。

壁 略少の角度をもって立ち上がる。

岡溝 確認されなかった。

仕切溝 確認されなかった。

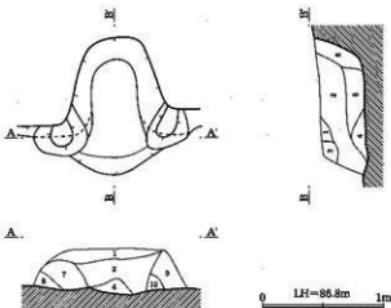
柱穴 4本を確認した。主柱穴と考えられる。土層の堆積状況を確認し得たのはP2・3のみであるが、何れも柱痕を確認できる。遺物の出土状況からは廃絶後短期間での埋没が想定され、柱は床面下のみが残存したものと考えられる。出土遺物は、P1からNo.6・土師器壺・壺小片2片・須恵器壺微細片1片、P2からNo.13が出土する。No.6が貼床遺物と接合する以外は出土位置は不明である。



- 暗褐色土 ローム粒子(～0.2mm)、焼土粒子若干、炭化物粒子少。しまり・粒性ややあり。
- 褐色土 ローム粒子多、ロームブロック(～1.0)少、炭化物粒子多。しまり・粒性ややあり。
- 黒褐色土 ローム粒子、ロームブロック少。焼土粒子、炭化物若干。硬くしまる。(貼床埋土)
- 黄褐色土 ローム粒子、ロームブロック主。しまりあり。(貼床埋土)
- 黒褐色土 ローム粒子、ロームブロックごく多。硬くしまる。(貼床埋土)
- 黒褐色土 ローム粒子、ロームブロックごく多。しまりややなし。(貼床埋土)
- 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロックごく多。しまりなし。(貼床埋土)

- 暗褐色土 ロームブロック少、焼土粒子、炭化物粒子多。しまりややあり。(柱脚)
- 黒褐色土 ロームブロック多、焼土粒子、炭化物粒子少。しまりややあり。(壁土)
- 暗褐色土 ローム粒子、焼土粒子少。(埋土)

第8図 第2号住居跡実測図



- 1 噴褐色土
2 赤褐色土
3 噴褐色土
4 赤褐色土
5 噴褐色土
6 噴褐色土
7 噴褐色土
8 噴褐色土
9 噴褐色土
10 噴褐色土
- 施土粒子・山砂少。しまりなし。(魔崩高土)
施土粒子多。風化少。山砂や多。しまりなし。(流入土)
粘土ブロック。施土粒子少。しまりあり。(掛け口崩落土)
施土粒子少。風化少。しまりなし。(流入土)
施土粒子少。風化少。しまりなし。(流入土)
ローラー入静子。しまりなし。(流入土)
粘土ブロック。黒褐色土。しまりややあり。(魔崩)
粘土粒子や多。しまりややあり。(魔崩)
灰褐色粘土多。施土少。風化物質。しまりあり。(魔崩)
粘土ブロック少。施土多。しまりややあり。(魔崩)

第9図 第2号住居跡実測図

袖(7層)は被熱の度合が高い。天井部は山砂を含む5層で構築される。掛け口は灰褐色粘土で構築される。粘土は袖に使用されたものと同材と見られる。天井部・掛け口部は竪の埋没が進行する過程で崩落したものと考えられる。竪内の被熱の状況からは使用頻度は低かったものと考えられる。また、煙道右壁(南側)は大きく掘り込まれ、灰色粘土と焼土を主体とした堆積土が見られる(第8図破線部分)。

竪内から土師器坏・壺小片各1片・須恵器坏小片2片・炭化した桃核1片が出土したが混入遺物である。

出土遺物 図示した以外に、土師器・須恵器など100片弱が出土した。多くは埋没過程での覆土中への混入遺物であり、No15が覆土上層一下層出土の破片の接合遺物であることから、住居廃絶後短時間で埋没したものと判断できる。このため、床面付近から出土したNo4・8・17(刀子)・18(砥石)についても、混入遺物である可能性は否めない。また、床面から30cm弱の覆土を挟んで炭化材が散見されるが、住居跡・出土遺物に罹火の痕跡は確認できない。

覆土からは土師器坏10片強・壺50片弱・須恵器高台付坏1片・大壺2片・微細片10片弱・砾石1片が出土した。貼床内からはNo6の他、土師器坏2片・壺1片・微細片1片・須恵器坏1片・高台付坏1片・微細片3片が出土した。柱穴内・竪内の遺物は先述のとおりである。

出土遺物には出土位置に関わる差異は認めらない。土師器坏は内面ミガキ・外面ロクロによって仕上げられ、口縁端部は直立するものが多い。内面を黒色処理するものは4片あり何れもミガキを伴う。土師器壺は体部小片が多く統じて煮沸用と判断できる。底部は10片程度で底面をヘラケツリする。須恵器は軟質の微細片が多く産地を明確にし得ない。No4は内外面体

床面 概ね平坦である。中央部は貼り床が施され、硬化する部分とはほぼ一致する。

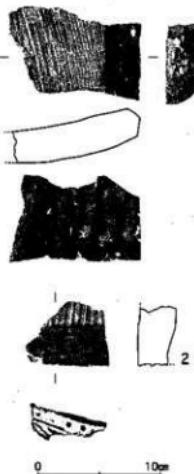
覆土 遺物出土状況からは、2層堆積後短期間に1層が堆積したものと判断でき、住居廃絶後、時をおかずして埋没したものと考えられる。3~7層は貼床埋土で、床面となる3層は焼土を含んで硬くしまる。

貯蔵穴 確認されなかった。

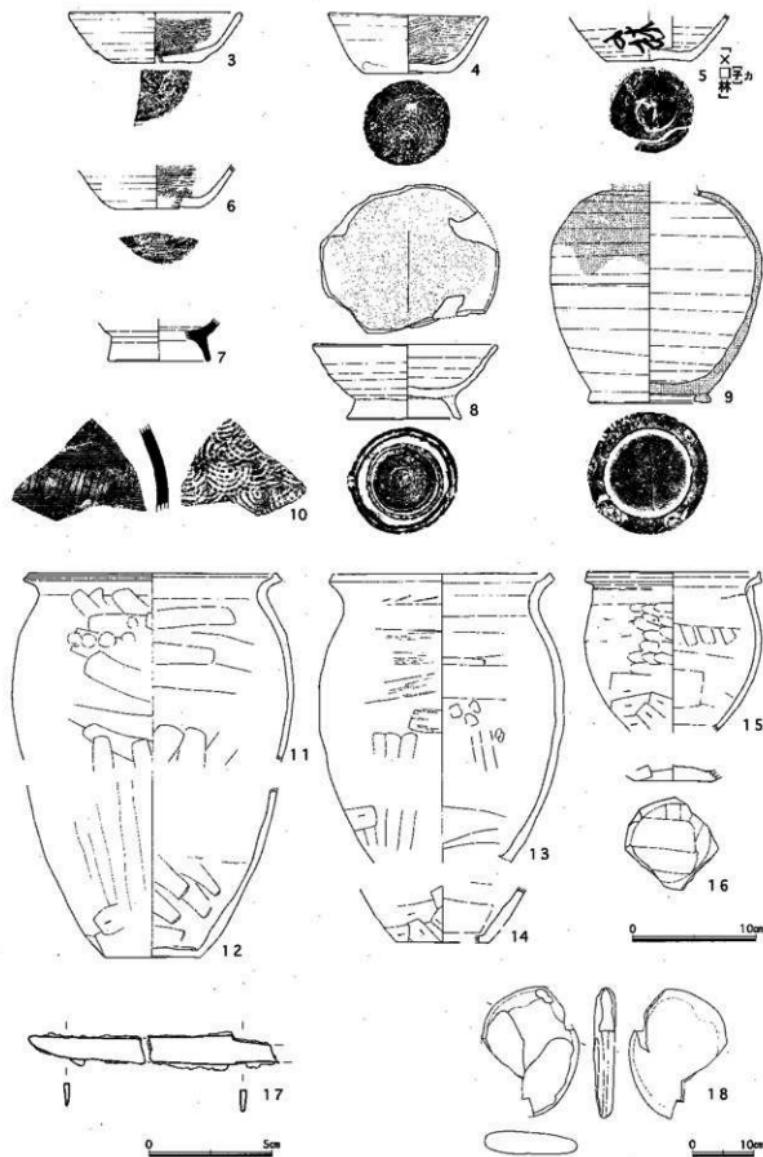
火處 竪を火處とし、東壁中央部に位置する。

煙道部は、東壁より60.0cm程住居外に奥壁が設えられる。東壁を掘り込んだローム面をもって火壁となし、被熱によって硬化するとともに赤色に変化する。火床の掘り込みは5.0cm程で、焼土の堆積が認められる。火床底面は被熱によりブロック状に硬化する。袖部は焼土を多量に含む8・10層を芯に灰色粘土を含む7・9層で構築される。左

袖(7層)は被熱の度合が高い。天井部は山砂を含む5層で構築される。掛け口は灰褐色粘土で構築される。粘土は袖に使用されたものと同材と見られる。天井部・掛け口部は竪の埋没が進行する過程で崩落したものと考えられる。竪内の被熱の状況からは使用頻度は低かったものと考えられる。また、煙道右壁(南側)は大きく掘り込まれ、灰色粘土と焼土を主体とした堆積土が見られる(第8図破線部分)。



第10図 第2号住居跡出土遺物実測図(1)



第11図 第2号住居跡出土遺物実測図（2）

表4 第2号住居跡出土遺物観察表

| 番号 器種 | 寸法 | 特徴 | 色調 | 胎土 焼成 | 出土状況 (注記) 残存状況 |
|------------------|--------------------------------|---|---|---------------------------|---------------------------------|
| 1 瓦 | 厚: 2.8 | 凹: 布目 凸: 端部へラケズリ 粘土模み込み | 10YR4/2 灰黄褐 | 緻密 白色粒 小顆 | 覆土 軽瓦破片 |
| 2 瓦 | | 凹: 布目 凸: 刺落 字瓦及当部左端部: 均正唐草文 幅広の周縁部に株文・界織・文様の一部が残る | 10YR4/2 灰黄褐 | 緻密 白色粒 | No.7 覆土最下層 字瓦当破片 |
| 3 土師器 杯 | 口:[14.0] 高:[7.0] 底: 4.1 | 内: ナデ→黒色處理→ヘラミガキ (ヨコ→底周タテ→斜) 放射状のミガキは數本單位か 外: ロクロナデ (右端) 底: ハラ切り | 内: 10YR3/2 黒褐 外: N1.5/0 黒 | 緻密 白色微細粒 | 貼床内 口1/6 底1/4 |
| 4 土師器 杯 | 口: 13.0 底: 7.0 高: 5.1 | 内: ロクロロクロナデ→ヘラミガキ (ヨコ→体上左斜) 外: ロクロナデ (右端) 底: 回転糸切り 体下部~底摩滅により不明瞭 | 内: 10YR7/6 明黄褐 外: 10YR5/3 鈍い黄褐 | やや緻密 角閃石 灰粗砂粒 | No.1 床面付近 完形 |
| 5 土師器 杯 | 口: 一 底: 6.7 高: (3.8) | 内: ロクロナデ (右端) 染素焼着 外: ロクロナデ (右端) 墨書模倣 | 内: 10YR6/4 鈍い黄褐 外: 7.5YR5/4 鈍い黄褐 | 緻密 透明ガラス質粒子 白色粗砂粒 | 覆土 1/3 底完存 |
| 6 土師器 杯 | 口: 一 底: [7.2] 高: 3.4 | 内: 黒色處理→ヘラミガキ (体ヨコ→底一方向) 裏面の1/4様式の付着物 外: ヘラケズリ→乾へラケズリ→ヘラミガキ →ロヨコナデ | 内: N1.5/0 黒 外: 10YR5/3 鈍い黄褐 | 緻密 | 貼床 1/5 底1/4 |
| 7 須恵器 高台付灰 | 口: 一 高台: [8.3] 高: (3.4) | 内内: ロクロナデ 底: ロクロナデ→高台貼り付け | 内外: 2.5YR7/2 灰黒 | 緻密 白色砂粒 | 覆土 底1/4 |
| 8 土師器 杯 | 口: [15.1] 底: 9.3 高: 4.1 | 内: ロクロナデ 体下位~底底剥離 外: ロクロナデ 底: 回転へラケズリ→高台貼り付け 内側タール付着 優明且貼りか | 内: 10YR3/2 黒褐 外: 10YR6/4 鈍い黄褐 | 緻密 透明ガラス質微粒 | No.4床面付近 口1/3 体2/3 底完存 |
| 9 灰陶器 蓋 | 口: 一 高台: 10.0 高: (17.5) | 内: ロクロナデ (右端) 底部自然陶 外: 回転へラケズリ→ロクロナデ (右端) 肩から灰綠色 底: 回転糸切り→回転へラケズリ→高台貼り付け 高台に垂れた跡に窓底の土が付着 | 内: 7.5Y7/1 灰白 外: N7/0 灰白 | 緻密 砂粒 | No.5覆土下層 底完存 |
| 10 須恵器 甕 | 厚: 0.9 | 内: 同心円文で具痕 外: 平行押書き→カキ目 | 内: N4/0 灰 外: 7.5Y6/1 灰 | 緻密 白微細粒 | 覆土 体破片 |
| 11 土師器 甕 | 口: [20.4] 底: 一 高: (15.4) | 内内とも摩滅により不明瞭 内: ヘラナデ→ロヨコナデ 体下半劣化 外: ヘラケズリ (体ヨコ体下タテ) 一体上のみ指痕度 →ロヨコナデ 粗上腹羽眼 | 内: SYR6/6 椎 外: 7.5YR6/6 椎 | やや緻密 白色粒 赤色スコリア | 覆土 1/6 |
| 12 土師器 甕 | 口: 一 底: [7.8] 高: (14.0) | 内外とも摩滅により不明瞭 内: ヘラケズリ→ナデか 外: ヘラケズリ (タテ→ヨコ) 一部僅付着 底: ヘラケズリか | 内: SYR6/8 椎 外: 7.5YR7/8 黄褐 | やや緻密 粗砂粒 白色粒 赤色スコリア | 覆土 1/3 底1/6 |
| 13 土師器 甕 | 口: [17.7] 底: 一 高: (23.5) | 内: (ヘラケズリ、ヨコ) →ナデ (ヨコ) →ロヨコナデ 上・下位汚れ 外: ヘラケズリ (タテ) →上位ナデ (ヨコ) →ロヨコナデ 口様式の汚れ 下位被熱劣化のため不明瞭 | 内: 10YR3/1 黒褐 外: 7.5YR5/4 鈍い褐 | やや緻密 微細粒 白色ガラス質微粒 | P2内 体1/8 口1/5 |
| 14 土師器 甕 | 口: 一 底: [7.6] 高: (4.7) | 内: ナデ 底・体の側部は圧着のため強く押し込まれる 外: ヘラケズリ (ヨコ→底周一部斜) 底: ヘラケズリか→ロヨコナデ→ミガキ (ヨコ左→右) 底部剥離 | 内: 10YR6/3 鈍い黄褐 外: 10YR3/1 黒褐 | やや緻密 角閃石 | 覆土 底1/3 |
| 15 土師器 甕 | 口: [14.2] 底: 一 高: (13.0) | 内: 体横上→口横上 横上部へラケズリ→ナデ (ヨコ →タテ→ヨコ) →ロヨコナデ ロヨコナデ ロヨコナデ 外: 粘土横上→ヘラケズリ→横上部指ナデ→体中位以下 ヘラケズリ、ロヨコナデ | 内: 10YR3/3 暗褐 外: 10YR3/3 暗褐 | やや緻密 白色ガラス質微粒 | No.8覆土下層 No.6・9上層 1/3 |
| 16 土師器 甕 | 口: 一 底: [6.2] 高: 一 | 内: 回転方向のナデ 底: 回転ヘラケズリ | 内外: 10YR2/1 黒 | 緻密 砂粒 | 覆土 底1/3 |

| 番号 器種 | 寸法 | 特 徴 | 色調 | 焼成 | 出土状況 (括弧) 残存状況 |
|----------------|----------------------------------|---|---------------|-----|----------------------|
| 17 鉢型 刀子 | 長:(10.0) 幅:(1.80) 重: 9.36g | 両区 壁は角鋸 刃部断面三角形 2枚組合 基は先端欠損 2枚組合か | | | No11 一部欠 |
| 18 砥石 | 長:(21.1) 幅:(16.1) | 厚: 3.4 河原石転用 一面・側面研磨面 厚: 125.83g 両側に縦状付着 砥石後被熱か | 2.5Y7/1 灰白 | 流紋岩 | No2床面付近 No3覆土下層 |

下位の炭素吸着部位が一致する。No 8は燈明皿に転用される。No 5の焼成は穂糠であるが底部が厚い。被熱した可能性がある。No 9は猿産。No 10は南那須猿産か。No 2は8世紀中葉の西山瓦窯産の宇瓦。

本遺構は廃絶後短期間で埋没したと推測できることから、No1等1期と見られる遺物の出土もあるが、2期と考えたい。

第3号住居跡・SI-03(第12~15図・図版三、七)

位置 I-10グリッドに位置する。

重複 SI-08・SK-51・94と重複し、SI-08との重複により遺構東半を欠する。SI-08とは本遺構が後出する。しかし、現地調査時に遺構の範囲を明確にし得ず、不明な点が少なくない。SK-51・94との新旧関係は不明。

規模 東西に長い方形で、東西3.8m・南北3.0m。床面までの深さ約0.4m。主軸方向はN-26°-W。

壁 直立気味に立ち上がる。

周溝 確認されなかった。

仕切溝 確認されなかった。

柱穴 確認されなかった。

床面 重複するSI-08の床面とは3.0cm程度の高低差が推測できる。床面の範囲は明確ではないが、残存する床面は概ね平坦である。西壁付近に貼床が施される。床面は中心部が硬化していたものと推定できる。

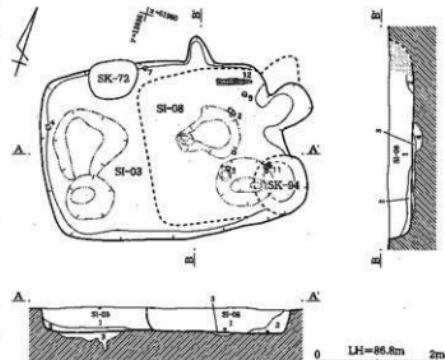
覆土 自然堆積と判断される。3・4層は貼床埋土である。

貯蔵穴 確認されなかった。

火處 窓を火處とする。北壁東寄りに位置する。攪乱により窓の詳細は不明である。

煙道部・奥壁は北壁のローム面を掘り込み火壁となす。奥壁は北壁より約40.0cm住居外に設えられる。火床は床面より15.0cm程度掘り窪められ、焼土の堆積(3層)が認められる。天井部は山砂を主体とした2層で構築される。また、煙道左壁(西側)は大きく掘り込まれ、灰色粘土と焼土を主体とした堆積土が見られる(第12図破線部分)。

出土遺物は少なく、No 1・6の他、土師器壺1片、甕15片のみである。No 6は遺構

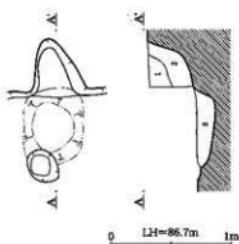


- SI-03
 1 黄褐色土 ローム粒子(～0.1mm)少・炭化物粒子微。
 2 明褐色土 ローム粒子(～0.1mm)多・しまり・粘性ややあり。
 3 黄褐色土 ローム・褐色土混合層・しまりややあり・粘性あり。
 SK-09
 1 黄褐色土 ローム粒子(～0.2mm)・焼土粒子(～0.1mm)若干・炭化物粒子微。
 2 黄褐色土 ローム粒子(～0.1mm)・炭化物粒子少・しまり・粘性ややあり。
 3 黄褐色土 ローム・褐色土少・しまりややあり・粘性あり。
 4 黄褐色土 ローム上部・褐色土少・しまりややあり・粘性あり。

第12図 第3号・第8号住居跡実測図

築時の供物か。

出土遺物 図示した以外では、覆土からの土師器坏4片・壺2片、前述の竪出土遺物とその量は少ない。しかし、重複するSI-08との帰属が明確ではない遺物に、第15図No 4・6・7・8の他、土師器坏54片・高台付坏5片・壺220片弱（何れも煮炊用）、須恵器壺2片、製塩土器6片、甕材と見られる粘土塊1点、被熟し破碎・赤色変化した河原石30片弱、炭化材がある。何れも覆土からの出土である。

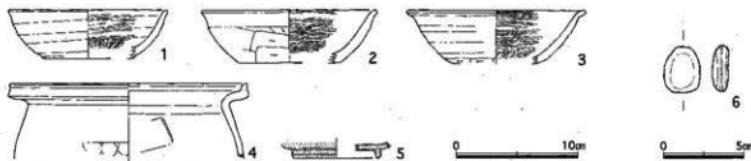


- 1 明褐色土 ローム粒子主。焼土粒子。
しまりややあり。(底付上)
- 2 黄色土 山砂地性。ローム粒子少。
しまりあり。(底付上)
- 3 暗褐色土 ローム粒子や多。燒土多。
しまりなし。(黄ロビット)

第13図 第3号住居跡竪出土実測図

出土遺物には出土位置に関わる差異は認めない。土師器坏は内面ミガキ：外面クロコによって仕上げられる。内面を黒色処理するものは3片あり何れもミガキを伴う。口縁端部は外反する1片が出土した。土師器壺は何れも煮炊用と判断できる。壺底部は6片あり、4片はナデで仕上げられる。No 2はロクロではなくヘラケズリで仕上げられる。No 3は器種を断じ得ないが高台付坏か。No 5は光ヶ丘1号窯様式。重ね焼きの痕跡が見える。No 6は端正な形状の小形の丸形河原石で、被熟による劣化が著しい。甕内からの出土であり、供物形態として甕構築時に置かれたものと考えられる。No 7は土師器壺体部片。

SI-03・08の出土遺物について付記する。土師器坏は内面ミガキ：外



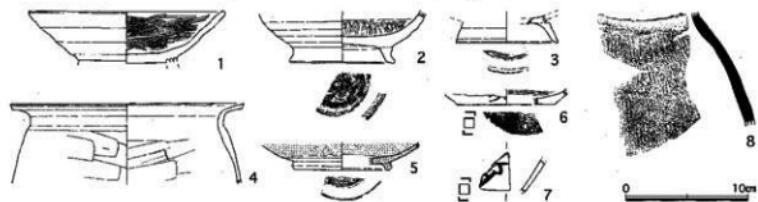
第14図 第3号住居跡出土遺物実測図

表5 第3号住居跡出土遺物観察表

| 番号 器種 | 寸法 | 特徴 | 色調 | 埴土 焼成 | 出土状況 (注記) 焼成状況 |
|------------------|-------------------------------|---|---|-----------------------------|-----------------------------|
| 1 土師器 坏 | 口:[13.0] 底:[7.6] 高: 4.0 | 内: ヘラミガキ(体ヨコ→底) 外: ロクロナデ(右翫) | 内: 2.5YR5/6 明赤褐 外: 7.5YR5/6 明褐 | 緻密 透明ガラス質微粒 白色粒子 | 竪 1/6 口1/4 |
| 2 土師器 壺 | 口:[14.4] 底:[4.4] 高: 4.3 | 内: ヘラミガキ(体ヨコ→底) 黒色処理か 口端摩滅 外: ヘラケズリ→ロヨナデ | 内: 5YR3/1 黑褐 外: 5YR6/6 棕 | 緻密 透明ガラス質微粒 白色粒子 | SI-03覆土 SI-03・08 口1/6 |
| 3 土師器 高台付坏 | 口:[14.6] 底: - 高: (4.3) | 内: ヘラミガキ(底一方向→体ヨコ→ロヨコ) 外: ロクロナデ→体下端ヘラケズリ | 内: 5YR4/4 純い赤褐 外: 5YR6/6 棕 | やや緻密 金雲母 白色粒 白色ガラス質粒子 | 覆土 体1/6 |
| 4 土師器 壺 | 口: 19.6 底: - 高: (6.2) | 内: ナデ(ヨコ)→ロヨコナデ 体斑状剥離・煤状付着物 オロコゲ付着 外: 指頭圧痕→ロヨコナデ | 内: 7.5YR4/3 棕 外: 5YR5/6 明赤褐 | 緻密 透明ガラス質粒子 白色粒 | No1覆土上 口1/6 |
| 5 灰陶陶器 | 口: - 底: (5.8) 高: (1.3) | 内: ロクロナデ 重ね焼き底 底: 回転ヘラヘケズリ→高台貼り付け 内面底周一体・外面に灰綠色灰陶 | 内: 5YR7/1 灰白 外: 2.5YR6/1 オリーブ灰 | 緻密 白色粒 | 覆土 高台1/6 |
| 6 小器 | 長: 2.85 幅: 2.2 | 厚: 1.0 重: 7.07g | 被熟による劣化顯著 赤色変化 | 2.5YR4/6 赤褐 | |

面口クロで仕上げられるものが多く、内外ともロクロで仕上げられるものは4片である。内面を黒色処理するものは30片弱あり何れもミガキを伴う。口縁端部は外反するものが多い。底部は15片あり何れも回転ヘラ切りで、更にナデが施されるものが3片ある。高台付帯の台部は何れも貼り付けで、2片は「ハ」字に開く。口縁部形態の判別できる土師器壺は13片で「下野型」が6片ある。底部は5片で、4片はヘラケズリされ、1片は粘土の積み上げ痕を残す。壺は何れも煮炊用と判断できる。No.5は遠江～三河地方產か。No.8は三和窯産で平底壺の肩部と見られる。製塩土器は胎土に白色針状物質を含む。被熱により劣化した器壁は極めて薄い。No.1の被熱は欠損部の劣化から廻奏後と考えられる。

本遺構の時期を明確にするのは難しいが、SI-03の出土遺物からはNo.5とともにNo.3などが混入するが2期、SI-03・08の出土遺物からは1～2期を埋没過程と捉えたい。



第15図 第3・8号住居跡出土遺物実測図

表6 第3・8号住居跡出土遺物観察表

| 番号 器種 | 寸法 | 特徴 | 色調 | 胎土 焼成 | 出土状況 (住紀) 残存状況 |
|-------------------|--------------------------------|---|--|---------------------------------|----------------------|
| 1 土師器 高台付帯 | 口: [16.0] 高台: — 高: (4.5) | 内: 黒色処理→ラミガキ 口縁・底を中心に摩滅 外: ロクロナデ 被熱により劣化 底: 高台貼り付け | 内: 10YR3/1 錆い黄褐 外: 10YR6/4 | やや粗 白微砂粒 白砂粒 白粗砂粒 | 覆土 口～体1/4 底完存 |
| 2 土師器 高台付帯 | 口: — 高台: — 高: (4.3) | 内: ヘラミガキ (体ヨコ→底一方) 外: ロクロナデ 底: 回転糸切りか→高台貼り付け | 内: 10YR5/3 錆い黄褐 外: 10YR6/4 錆い黄褐 | やや粗 白微砂粒 白砂粒 白粗砂粒 | 覆土 底1/3 |
| 3 土師器 高台付帯 | 口: — 高台: — 高: (2.3) | 内: ロクロナデ 底: 回転糸切りか→高台貼り付け ロクロナデ | 内: 10YR5/4 錆い黄褐 外: 10YR6/4 錆い黄褐 | 緻密 灰色繊 白・赤・黒色微砂粒 透明ガラス質粒子 | 覆土 高台1/4 |
| 4 土師器 壺 | 口: [9.5] 底: — 高: (6.5) | 内: ナデ→ロヨナデ 外: ヘラケズリ→ロヨナデ | 内: 5YR5/4 錆い赤褐 外: 5YR5/6 明赤褐 | 緻密 金墨母 白色粒 黑色ガラス質粒子 | 覆土 体1/8 |
| 5 灰釉陶器 高台付帯 | 口: — 高台: [7.8] 高: (2.3) | 内: ロクロナデ 灰釉ハケヌリ 密ね焼き痕 外: ロクロナデ 灰釉ハケヌリ 墨書き書き 底: 回転ヘラケズリ→高台貼り付け | 内: SYR7/2 灰白 外: SYR7/1 灰白 | 緻密 黑砂粒 白粗砂粒 | 覆土 底1/5 |
| 6 土師器 壺 | 口: — 底: [8.0] 高: (1.3) | 内: 黒色処理→ラミガキ 外: ロクロナデ 墨書き書き 底: 回転ヘラケズリ | 内: 10YR2/1 黒 外: 7.5YR8/4 錆い褐 | 緻密 金墨細粒 | 覆土 底1/8 |
| 7 土師器 壺 | 口: — 底: — 高: — | 内: 黒色処理→ラミガキ (ヨコ) 外: ロクロナデ 墨書き | 内: 7.5YR2/1 黒 外: 7.5YR6/6 深 | 緻密 白色ガラス質粒子 | 覆土 体破片 |
| 8 須恵器 壺 | 口: — 底: — 高: — | 内: 当て具痕 壺状剥離痕 外: 平行叩き→ロヨナデ 被熱 | 内: SYR5/6 明赤褐 外: SYR5/4 錆い赤褐 | 緻密 金墨母 透明ガラス質粒子 | 覆土 体破片 |

第4号住居跡・SI-04 (第16~18図・図版三, 七, 八)

位置 I-10グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 東西に長い方形で、東西33m・南北29m。床面までの深さ約0.15m。主軸方向はN-18°-W。

壁 若干の角度をもって掘り込まれる。

周溝 確認されなかった。

仕切溝 確認されなかった。

柱穴 確認されなかった。

床面 概ね平坦である。竪前面に貼床が施され、硬化する部分とほぼ一致する。

覆土 1~3層は自然堆積と判断される。4~7層は貼床埋土である。

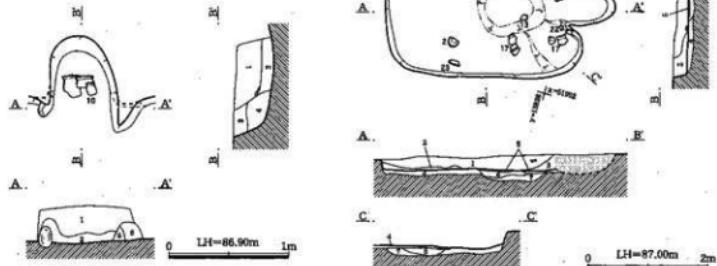
貯藏穴 確認されなかった。

その他の施設 確認されなかった。

火焚 竄は火焚とする。東壁南寄りに位置する。東壁を掘り込んだローム面をもって煙道とし、奥壁は住居外約50cmに設えられる。左側の袖は自然崩落したと見られ、芯材となった河原石のみが残る。右袖は山砂を含む5~6層で構築される。火床の掘り込みは浅く、目立った焼土の堆積は認められない。天井・掛口の痕跡は明瞭でないが、4層は天井崩落土か。袖内側火床付近が火壁となるが被熱の痕跡は薄い。

竪内からはNo3・5・7・9・10・12・14・16・18以外に120片程が出土する。土師器坏30片弱・高台付坏1片、須恵器壺1片以外は、煮炊用の土師器壺の小片である。また、炭化桃核が出土した。

出土遺物 図示した以外は、覆土から土師器5片、貼床内から10片強が出土した以外は前述した竪内への混入遺物である。床面からは、No13・26、貼床からはNo2の他土師器坏1片・壺10片弱、須恵器壺1片が出土した。壺は糸切りの底部破片である。竪出土の土師器坏は多くが内面ミガキ・外面ロクロで、1



- | | |
|--------|-------------------------------|
| 1 塗褐色土 | ローム粒子微。鐵土粒子少。山砂や多。しまりなし。(底土) |
| 2 明褐色土 | 鐵土粒子や多。山砂多。しまりなし。(底土) |
| 3 明褐色土 | 山砂や多。山砂や中多。しまりややあり。(天井崩落土の底土) |
| 4 明褐色土 | 鐵土粒子少。山砂や中多。しまりややあり。(天井崩落土) |
| 5 黄色土 | 鐵土粒子少。山砂や多。しまりややあり。(袖) |
| 6 黄色土 | 明褐色土・山砂少。しまりあややあり。(袖) |

- | | |
|--------|---|
| 1 塗褐色土 | ローム粒子 (~0.2mm)、鐵土粒子 (~0.1mm) 少。洪化物鐵土微。しまり・粘性ややあり。 |
| 2 塗褐色土 | ローム粒子 (~0.2mm)、鐵土粒子 (~0.1mm) 少。洪化物鐵土微。しまり・粘性ややあり。 |
| 3 黄色土 | ローム粒子 (~0.2mm)、鐵土粒子 (~0.2mm) 少。しまりあり。粘性ややあり。 |
| 4 塗褐色土 | ローム粒子 (~0.2mm)、鐵土粒子 (~0.2mm) 少。洪化物鐵土微。しまりあり。粘性ややあり。 |
| 5 明褐色土 | ローム・ブロック (~1.0cm) 多。硬くしまる。粘性あり。 |
| 6 明褐色土 | ローム・ブロック (~1.0cm) 少。硬くしまる。粘性あり。 |
| 7 明褐色土 | ローム・明褐色土混合層。しまり・粘性あり。 |

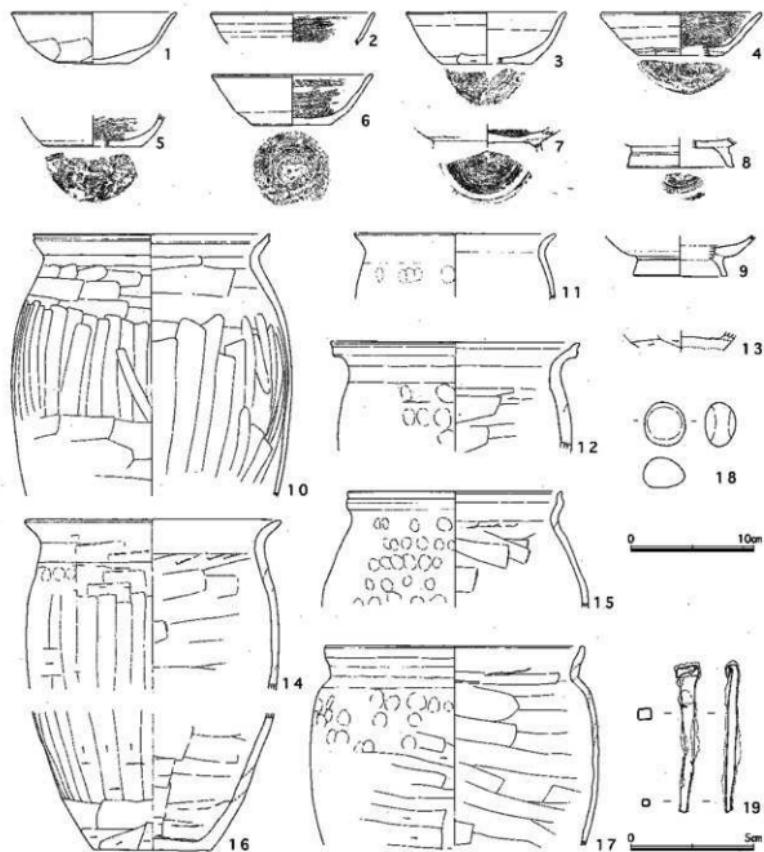
第16図 第4号住居跡実測図

第17図 第4号住居跡実測図

片のみ外面体下位をヘラケズリする。黒色処理されるものは16片ある。底部は3片で底面はヘラケズリされる。高台付坏の台部は貼り付け。口縁部形態の判別可能な土師器壺は7片で、「下野型」と「鶴田中原タイプ」が各1片ある。「鶴田中原タイプ」の混入する点が特徴的である。須恵器は焼成不良で、外面に格子目叩きが見られる大甕。常陸産か。炭化桃核は半部を欠するが長さ〔2.6〕cm・幅約1.8cm。

No10・15・17は所謂「下野型」の範疇を逸している。No14は在地化した「武藏型」か。No10は竈掛口に掛けられたものか。No16は木葉底。No18は竈構築時に置かれた供物形代か。No22は土師器壺体部片。No20・25・26は甕の投棄材と見られる被熱した河原石。これ以外に拳大のものが2点出土する。

本遺構の時期は、No11・16など1期と判断される遺物の混入もあるが、No1・3・17などから2期を埋没過程としたい。



第18図 第4号住居跡出土遺物実測図

表7 第4号住居跡出土遺物観察表

| 番号 記録 | 寸法 | 特徴 | 色調 | 胎土 焼成 | 出土状況 (在社) 残存状況 |
|------------------|----------------------------------|---|--------------------------------------|---|--------------------------------------|
| 1 土師器 环 | 口: 13.4 底: 5.7 高: 4.1 | 内: 摩滅顯著 ナデ 外: ロクロナデ→体下端へラケズリ 底: ヘラケズリ→ナデ | 内: 7.5YR7/6 棕 外: 7.5YR8/6 浅黄褐 | やや緻密 白灰微砂粒 透明ガラス質微細粒 金雲母 | No9 極土下層 ほぼ完形 |
| 2 土師器 环 | 口: [13.4] 底: 一 高: (2.5) | 内: 摩滅顯著 ヘラミガキ 黒色処理 外: ロクロナデ | 内: N1.5/ 黒 外: 7.5YR5/4 銀い黄 | 緻密 金雲母 赤色粒 | 胎末 口1/5 |
| 3 土師器 环 | 口: [11.1] 底: [7.2] 高: 4.2 | 内: ロクロナデ 斑状剥離 外: ロクロナデ→体下端へラケズリ 摩滅 底: 回転ハタリコロナデ | 内: 7.5YR7/6 棕 外: 10YR7/4 銀い黄 | 緻密 透明ガラス質粒子 赤色粒 金雲母 | 電覆土 口~底1/2 |
| 4 土師器 环 | 口: [13.0] 底: [6.8] 高: 3.5 | 内: ヘラミガキ (体・底持ち手取扱跡) 外: ロクロナデ→体下端へラケズリ 外: 体へラケズリ→ロクロナデ→体上へラケズリ摩滅 底: ヘラケズリ | 内: 2.5YR5/8 明赤褐 外: 10YR6/4 銀い黄 | 緻密 砂粒 角閃石 白黒赤小穂 | 極土 口1/4 底1/3 |
| 5 土師器 环 | 口: 一 底: [8.2] 高: (2.6) | 内: ヘラミガキ (体ヨコ→底一方) 外: ロクロナデ 摩滅 底: 回転ハタリ | 内: 10YR6/6 明黄褐 外: 10YR7/6 明黄褐 | 緻密 透明ガラス質微細粒 | 電覆土 底1/2 |
| 6 土師器 环 | 口: [13.1] 底: 6.6 高: 4.1 | 内: 摩滅顯著 ヘラミガキ (体ヨコ→底一方) 底斑状剥離 外: ロクロナデ (右端) 斑状剥離若干 底: 回転ハタリ | 内: 7.5YR6/6 棕 外: 10YR6/6 明黄褐 | 緻密 透明ガラス質粒子 長石微細粒 | No4 床面付近 口1/3 底はぼ完形 |
| 7 土師器 高台付环 | 口: 一 高台: 一 高: 一 | 内: 黒色処理→ヘラミガキ 外: ロクロナデ→ヘラミガキ (タテ) 底: 回転ハラケズリ+高台貼り付け | 内: 7.5YR5/6 明褐 外: 10YR4/6 褐 | 緻密 透明ガラス質微細粒 白砂粒 | 電覆土 底1/3 |
| 8 土師器 高台付环 | 口: 一 高台: [8.6] 高: (2.4) | 内: ロクロナデ 外: ロクロナデ 底: 回転糸切り→高台貼り付け | 内外: 7.5YR6/6 棕 | 緻密 白色ガラス質微細粒 赤色スコリア | 電 底1/4 高台一部 |
| 9 土師器 高台付环 | 口: 一 高台: [7.1] 高: (3.4) | 内: ロクロナデ 外: ロクロナデ→下端回転へラケズリ 底: 高台貼り付け | 内外: 5YR4/6 褐 | 緻密 金雲母 赤色粒 | 電覆土 高台1/6 |
| 10 土師器 麦 | 口: [19.2] 底: 一 高: (21.2) | 内: ヘラヘラケズリ (タテ) →ロヨコナデ・体ナデ (ヨコ) 体中位以下汚れ 外: 指痕压痕→ヘラケズリ (体上ヨコ→タテ→下ヨコ →ロヨコナデ 二次焼成 体上リング状の汚れ 体中以下白色粘土付着 | 内: 7.5YR7/6 明黄褐 外: 10YR7/6 棕 | 緻密 透明ガラス質粒子 角閃石 石英粒子 赤スコリア 小穂 | 電 口完存 体1/2 |
| 11 土師器 麦 | 口: [16.4] 底: 一 高: (5.2) | 内: ナデ→ロヨコナデ 外: ナデ→ロヨコナデ・体指痕压痕 | 内: 2.5Y3/1 黒褐 外: N2/0 黒 | やや緻密 石英 小穂 | 電覆土 口1/4 |
| 12 土師器 麦 | 口: [20.2] 底: 一 高: (8.8) | 内: ヘラナデ→ロヨコナデ 指痕付着 外: 指痕压痕→ロヨコナデ 内外とも被熱劣化 | 内外: 17.5YR4/4 褐 | やや緻密 灰色砂粒 褐 角閃石 | 電覆土 口1/5 |
| 13 土師器 麦 | 口: 一 底: 一 高: 一 | 内: ナデ 外: 体下端へラケズリ (ヨコ) 底: 剥離 | 内: 10YR6/4 銀い黄 外: 10YR6/3 銀い黄 | 緻密 透明ガラス質微粒子 角閃石 白砂粒 | No12床底 底内面のみ |
| 14 土師器 麦 | 口: [20.9] 底: 一 高: (13.7) | 内: ナデ→ロヨコナデ 外: (ヘラナデ タテ) →指痕压痕→体へラケズリ (タテ=ヨコ)・ヨコナデ | 内外: 5YR5/6 明赤褐 | 緻密 白色微細粒 角閃石 赤色粗粒 小穂 | 電覆土 口1/6 |
| 15 土師器 麦 | 口: [17.4] 底: 一 高: (9.4) | 内: ヘラナデ→ロヨコナデ 体中位斑状剥離 外: 指痕压痕→ロヨコナデ 内外とも口を中心に汚れ | 内: 10YR6/4 銀い黄 外: 10YR5/4 銀い黄 | 緻密 角閃石 透明ガラス質微粒子 | No7 極土中層 口1/5 |
| 16 土師器 麦 | 口: 一 底: 9.6 高: (11.2) | 内: ナデ (ヨコ) 半面斑状剥離 外: 指痕压痕→ヘラケズリ (タテ=ヨコ) | 内: 5YR5/6 明赤褐 外: 2.5YR5/6 明褐 | 緻密 透明ガラス質粒子 赤色スコリア | 電覆土 底2/3 |
| 17 土師器 麦 | 口: [21.0] 底: 6.1 高: (16.2) | 内: ナデ→ロヨコナデ 口へ斑状剥離 外: ヘラケズリ体上指痕压痕→ロヨコナデ 口を中心に粘土付着 | 内: 2.6YR4/6 赤褐 外: 2.5YR5/8 明赤褐 | 緻密 透明ガラス質粒子 微細粒 小穂 | 極土中層 下層 No11, No13 口2/3体1/3 |
| 18 河原石 板 | 長: 3.5 幅: 3.3 重: 41.91g | 白色の経内襷 供物形代か | 7.5Y7/2 灰白 | 輝石安山岩 | 電 |
| 19 鉄製釘 | 長: 6.0 幅: 0.45 | 端部折り返し 断面四角形 先端欠損 | | | No8 極土下層 |

第5号住居跡・SI-05 (第19~21図・図版四、八)

位置 G・H-9グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 東西に長い方形で、東西4.2m・南北2.9m。床面までの深さ約0.16m。主軸方向はN-3°-W。

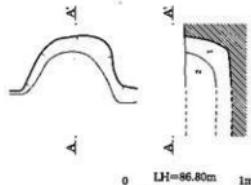
壁 角度をもって立ち上がるか。

周溝 現確認されなかった。

仕切溝 確認されなかった。

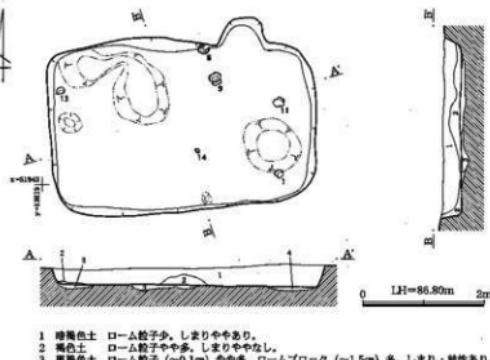
柱穴 確認されなかった。

床面 燐ね平坦である。竪前面が硬化する。遺構南東部・北西部に貼床が施される。何れもビット



- 1 明褐色土 焼土粒子少・山野。しまりややあり。
(斑点灰井粘土)
- 2 黄褐色土 焼土粒子・山野や多。しまりなし。
(燒土土)

第19図 第5号住居跡竪実測図



第20図 第5号住居跡実測図



第21図 第5号住居跡出土遺物実測図

状の掘り込みを伴う。

覆土 4層に分層が可能で、2層は人為埋土、1層は自然堆積と判断される。3・4層は貼床埋土で、3層が床面の主体をなす。

貯蔵穴 確認されなかった。

その他の施設 西壁中央部・南壁中央部にピット状の掘り込みを確認した。柱穴の可能性もあるが、何れも、貼床に伴う位置に穿たれていることから、床面上の何らかの施設であった可能性も否定できない。

火坑 窓を火坑とする。北壁東寄りに位置する。残存状況は極めて悪く、擾乱により袖等を欠しており、窓道の掘方のみが残存する。天井は砂漠を含む1層で構築されたものと判断される。

窓内からは土器類・壺・甕小片20片強が出土する。何れも混入遺物と判断される。

表8 第5号住居跡出土遺物観察表

| 番号 器種 | 寸法 | 特徴 | 色調 | 胎土 焼成 | 出土状況 (性記) 残存状況 |
|------------------|----------------------------------|--|--|--|---------------------------------|
| 1 土師器 壺 | 口:[13.4] 底: 8.2 高: 5.0 | 内: ロクロナダ→黒色處理→ヘラミガキ 外: ロクロナダ 底: 回転目切り | 内: N2/0 黒 外: 7.5YR7/4 鉛い澄 | 緻密 角閃石 赤色粒 | No.5 横土中層 口~体1/6 底5/6 |
| 2 土師器 高台付壺 | 口:[13.0] 高台: 一 高台付高: (2.6) | 内: ロラミガキ 口中心に摩滅 外: ロクロナダ→体下端回転ヘラケズリ 底: 回転ヘラケズリ→高台貼り付け | 内: 7.5YR5/4 鉛い澄 外: 7.5YR6/4 鉛い澄 | 緻密 透明ガラス質微細粒 白砂粒 白粗砂粒 | 覆土 口~底1/4 |
| 3 土師器 壺 | 口:[13.3] 底: 7.0 高: 5.0 | 内: ロラミガキ (体下ヨコ→底下斜→底) 黒色處理 口端摩滅 外: ロクロナダ→体下端回転ヘラケズリ 墓春模様書き 底: 回転ヘラケズリ | 内: N2/0 黒 外: 7.5YR6/6 根 | 緻密 透明白ガラス質粒子 白粗砂粒 灰色輝 角閃石 | No.1 覆土中層 口~底1/2 |
| 4 須恵器 壺 | 口:[14.0] 底: [7.0] 高: 3.8 | 内: ロロナダ 外: ロクロナダ 墓春模様書き | 内: 2.5Y6/3 鉛い黄 外: 2.5Y6/2 灰黄 | 緻密 白砂粒 白砂粒 粗砂粒 | 覆土 口~底1/3 |
| 5 須恵器 壺 | 口:[14.2] 底: [8.4] 高: 4.6 | 内: ロクロナダ 外: ロクロナダ→体下端手持ちヘラケズリ 底: ヘラ切り 中央部ヘラケズリ 内外とも摩滅 | 内: 10YR7/3 鉛い黄褐 外: 10YR7/4 鉛い黄褐 | やや緻密 透明白ガラス質微細粒 小範 焼成やや不良 | 覆土 体1/4 底1/2 |
| 6 須恵器 壺 | 口: 一 底: 7.2 高: (1.8) | 内外とも摩滅顯著 内: ロクロナダか 底: ヘラ切り | 内: 2.5Y5/1 黄灰 外: 2.5Y7/1 灰白 | 緻密 角閃石 白色微細粒 | 覆土 底完存 |
| 7 須恵器 壺 | 口:[12.0] 底: [6.4] 高: 4.0 | 内: ロラミガキ (体ヨコ→底周斜→底) 口端摩滅 外: ロクロナダ 墓春 | 内: 2.5Y6/2 灰黄 外: 2.5Y5/2 暗灰黄 | 緻密 角閃石 | 覆土 口~底1/6 |
| 8 須恵器 高台付壺 | 口:[15.2] 底: 一 高台付高: (4.7) | 内: ロクロナダ 外: ロクロナダ→体下端回転ヘラケズリ | 内: 2.5Y6/4 鉛い黄 外: 5Y3/2 オリーブ黒 | やや緻密 角閃石 灰色輝 白砂粒 白粗砂粒 燒成やや不良 | No.4 覆土上層 口~体1/2 |
| 9 須恵器 高台付壺 | 口: 16.1 高台付高: 8.3 高: 6.0 | 内: ロクロナダ 摩滅・剥落顯著 外: ロクロナダ→体下端回転ヘラケズリ 墓春模様書き 底: 回転ヘラケズリ→高台貼り付け | 内: 2.5Y7/4 浅黄 外: 10YR6/4 純い黄根 | やや緻密 角閃石 白ガラス質微砂粒 白砂~粗砂粒 焼成やや不良 | No.3 覆土下層 口~体4/5 高台2/3 |
| 10 土師器 壺 | 口:[13.3] 底: 一 高:(12.4) | 内: ハケ目→ロヨコナダ・体ナダ→下半ヘラナダ 口オコゲ付着 外: ヘラケズリ (体下ヨコ→下斜) →ロヨコナダ 全面に墨付着 口底状剥離 | 内外: 10YR3/2 黒褐 | 緻密 透明白ガラス質砂粒 白砂粒 角閃石 | No.6 覆土中層 口~体1/3 |
| 11 須恵器 壺 | 口: 一 底: 一 高: 一 | 内: 同心円文當て具痕 外: 平行印き→力目 | 内: 5Y5/1 沈 外: 5Y5/1 沈 | やや緻密 白粗砂粒 | 覆土 小片 |
| 12 瓦 | 厚: 1.5 | 凹: 布目 凸: 鶴印き | 凹: 2.5Y4/2 暗灰黄 凸: 2.5Y5/2 暗灰黄 | 反曲防粒 白砂粒 | 覆土 小片 |
| 13 鉄製不明 | 長: 4.5 幅: 5.5 | 厚: 4.5 重: 4.05g 断面方形 一方太く一方細い 釘或いは縫の露被が | | | 覆土 |

出土遺物 図示した以外に、覆土中から土師器壺・壺80片強、須恵器壺6片、布目瓦片2片、被熱した破碎河原石1片、竈から土師器壺3片・壺20片弱が出土した。床面からの出土はNo14・13(不明鉄製品)である。No14は拳大の河原石である。

竈出土の土師器壺は、内外ともロクロ：底部ヘラケズリ-1片・内面ミガキ：外面ロクロ-2片である。口縁部形態の判別可能な壺は2片で「武藏型」1片を含む。覆土出土の土師器壺は、内面ミガキ：外面ロクロ-2片・内面ミガキ・外面ロクロ後下位ヘラケズリ：底面回転ヘラ切り-2片・底面回転糸切り1片である。口縁部形態の判別可能な壺は2片で「武藏型」、底部は2片でヘラケズリされる。壺は何れも煮炊用と判断される。須恵器は内面格子目当て具痕、外面平行叩き後カギ目・内面同心円文当て具痕が見える。布目瓦は男瓦・女瓦の判別ができない。No7はミガキを伴う須恵器で墨書きが施されるか。No5・6・8・9は益子産。No4は常陸産。No10は台付壺か、在地化した「武藏型」か。No13鉄は鐵の範被或いは釘を想定し得る。図示し得なかったが、口縁部形態の判別可能な土師器壺4片は「武藏型」3片・単口縁1片で、「下野型」の混入がない点が特徴的である。

本遺構の時期は、No3などから1期を埋没過程としたい。

第6号住居跡・SI-06(第22図)

位置 E-6グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模・造構状況等 前平により竈基底部のみが残存する。焼土が厚く堆積することから火床と見られる。

出土遺物 確認されなかった。

第7号住居跡・SI-07(第23~25図・図版四)

位置 D-6グリッドに位置する。

重複 SK-50と重複する。新旧関係は不明である。

規模 不整な方形である。北西辺が最も長く約2.8m、東南辺が最も短く約1.0m。床面までの深さ約0.16m。主軸方向はN-30°-W。

壁 耕作による擾乱が著しく明確ではないが、直立気味に立ち上がる。

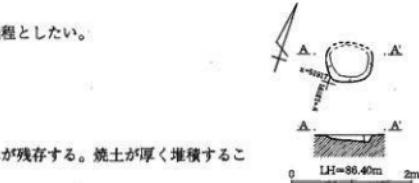
周溝 確認されなかった。

仕切溝 確認されなかった。

柱穴 確認されなかった。

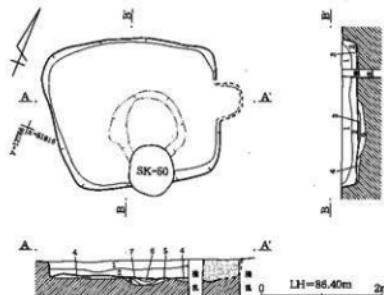
床面 概ね平坦と推測される。中央部に貼床が施され、竈前面から中央部に広がる硬化面の一部となる。

覆土 2層に分層が可能で、自然堆積と見られる。3~8層は貼床埋土で、4層が床面となる。床面の一部を構成する3層は



1 黒色土 焼土粒子や多、山砂少、しまりなし。

第22図 第6号住居跡
竈実測図



- 1 ローム粒子 (~0.1m) や干、しまりややあり、粘性あり。
- 2 ローム粒子 (~0.1m) 若干、ロームブロック (~1.5cm) 少、しまりややあり。
- 3 黒褐色土 ローム粒子 (~0.2m) やや多、硬くしまる。(貼床埋土)
- 4 黒褐色土 ローム粒子 (~0.2m) やや多、ロームブロック (~0.5cm) 硬くしまる。(貼床埋土)
- 5 黑褐色土 ローム粒子 (~0.2m) しまり・粘性あり。(貼床埋土)
- 6 黑褐色土 ローム粒子 (~0.2m) 多、ロームブロック (~1.5cm) しまり。(貼床埋土)
- 7 黑褐色土 ローム粒子 (~0.2m) 多、硬くしまる。(貼床埋土)
- 8 黑褐色土 ローム粒子 (~0.1m) ロームブロック (~0.1m) 少、しまり・粘性あり。

第23図 第7号住居跡実測図

6層の硬化部分と判断できる。

貯蔵穴 確認されなかった。

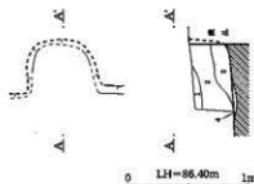
その他の施設 確認されなかった。

火處 瓦を火處とし、東壁北寄りに位置する。撓乱により残存状況は極めて悪く、煙道の掘方が残存するのみである。袖の基部にあたる壁面に、袖の構築土と判断される灰褐色粘土主体土が付着する。天井は山砂・粘土を主体とする1層で構築される。

窓内からは、No.1・2・3の他、土師器壺10片強・須恵器壺1片が出土する。

出土遺物 図示した以外に、覆土から土師器高台付壺1片・壺20片弱・貼床から土師器壺4片・須恵器壺1片が出土する。窓からの出土は前述のとおりである。床面及び床面付近からの遺物の出土はない。

覆土出土の高台付壺の台部は貼り付け、壺底面は糸切りとみえる。壺は何れも煮炊用と判断される。No.3は所謂「鶴田中原タイプ」壺である。



- 1 灰褐色土 土師粒子・山砂主体。ローム粒子少、褐色土。しまりあり。(煙道天井崩落土)
- 2 喜褐色土 ローム粒子、土師粒子、山砂少。しまりなし。(窓下)
- 3 明褐色土 土師粒子多、山砂少。しまりなし。(窓入土及び底面)
- 4 灰褐色土 ローム粒子(<0.1mm)やや多、土師粒子(<0.1mm)、灰褐色粒子(<0.1mm)少、被熱色より著しく硬化。

第24図 第7号住居跡窓実測図

本遺構については不明な点が多く、1~3期が埋没過程であつたこと以外は詳らかにし得ない。

第8号住居跡 SI-08(第12、26~27図・図版三、八、九)

位置 I-10グリッドに位置する。

重複 SI-03・SK-51と重複する。SI-03とは本遺構が先行するが、現地調査時に遺構の範囲を明確にし得ず、不明な点が少なくない。SK-51との新旧関係は不明である。

規模 東西南北2.4m程の正方形と推定される。床面までの深さ約0.22m。主軸方向はN28°W。

壁 直立気味に立ち上がる。

周溝 確認されなかった。

仕切溝 確認されなかった。

柱穴 確認されなかった。

表9 第7号住居跡出土遺物観察表

| 番号 器種 | 寸法 | 特徴 | 色調 | 胎土 焼成 | 出土状況 (注記) 残存状況 |
|--|---|--------------------------------------|-----------------------------------|-----------|----------------------|
| 1 口:[13.9] 土師器 底: (3.3) 壺 底: (3.3) | 内: ロクロナデ 頸粘土付着 斜状剥離著しく顯著 外: ロクロナデ 全面に煤粘付着物 | 内: 7.5YR5/6 明褐色 外: 7.5YR3/2 黒褐色 | やや緻密 透明ガラス質微細粒 白微砂粒 灰砂粒 | 壺 口1/8 | |
| 2 口:[18.2] 土師器 底: (6.0) 壺 底: (6.0) | 内: 摩滅顯著(ナデ→ロヨコナデ) 外: ナデ→ロヨコナデ 底: 山砂上底顯著 | 内: 10YR7/4 純い黄褐色 外: 10YR8/4 浅黃褐色 | やや粗 角閃石 透明ガラス質粒子 白砂粒 白褐色 | 壺 口1/8 | |
| 3 口:[23.0] 土師器 底: (8.2) 壺 底: (8.2) | 内: ナデ(約)→ロヨコナデ 斜状剥離 内れ 外: 指痕底底→ハラナデ→ロヨコナデ 底: 山砂上底顯著 | 内: 10YR5/4 純い黄褐色 外: 10YR6/4 純い黄褐色 | やや緻密 赤色スコリア 角閃石 白微砂粒 | 壺 口1/8 | |

床面 重複するSI-08の床面とは3.0cm程の高低差が推測できる。床面の範囲は明確ではないが、概ね平坦である。竈前面に貼床が施される。床面は全面に亘り硬化していたものと推定できる。

覆土 自然堆積と判断される。3・4層は貼床埋土。

貯蔵穴 確認されなかった。

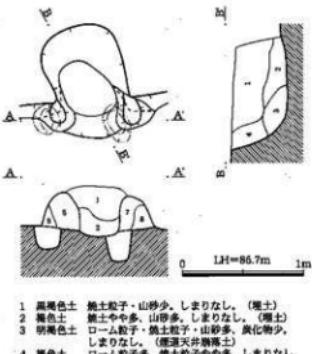
他の施設 確認されなかった。

火坑 竈を火坑とする。東壁に位置する。

煙道部は、東壁より60.0cm程住居外に奥壁が設えられる。袖部は山砂を含む6・8層を芯に山砂とロームを含む5・7層で構築される。両袖の下には10.0cmのピットが穿たれる。竈構築時のものか。天井部は山砂・ロームを含む3層で構築される。袖部・天井部以外に竈構築土層は認められない。煙道部や火床に被熱の痕跡が薄いことや焼土の堆積が認められること、天井部と見られる3層の堆積が、流入土と判断される1・2層上であることから、火床を渡った後廃絶されたものと考えられる。竈内からは土師器壺・甕小片50片強、製塩土器小片1片が出土するが何れも混入遺物である。

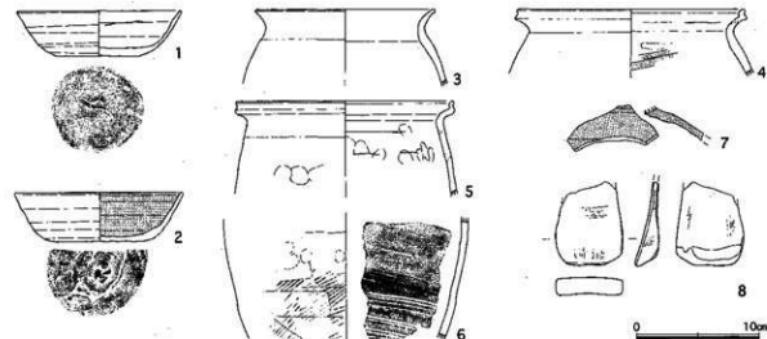
出土遺物 図示した以外に50片強、竈出土の小片と併せて100片強が出土する。このうち、緑色釉を施した灰陶器小片が3片ある他は土師器壺・甕の小片である。No.12の炭化材は床面との間に覆土を挟むことや、出土遺物・遺構面に被熱の痕跡が認められることから混入遺物と判断できる。

床面直上からのNo.5の他、土師器壺「下野型」1片、素口縁1片・体部10片強が出土した。床面付近からはNo.3の他、土師器壺10片強は出土した。竈内から出土した土師器壺は内面ミガキ：外面ロクロ・2片、底部回転ヘラケグリ・1片である。製塩土器は被熱により劣化した器壁の薄い小片で胎土に白色針状物質を含む。覆土からは土師器壺5片・甕30片・灰釉陶器片が出土する。土師器壺は何れも内面ミガキで3片は



- 1 黒褐色土 焼土粒子・山砂少、しまりなし。(燒土)
- 2 黄褐色土 焼土や多、山砂多、しまりなし。(燒土)
- 3 明褐色土 ローム粒子・焼土粒子・山砂多、焼土物少、しまりなし。(煙道天井構築土)
- 4 黄色土 (燒土) ローム粒子少、焼土粒子や多、しまりなし。
- 5 明褐色土 ローム粒子少、山砂多、しまりなし。(燒)
- 6 黄褐色土 黑褐色土上、山砂少、しまりなし。(燒)
- 7 带褐色土 山砂少、黒褐色土多、しまりなし。(燒)
- 8 黄色土 ローム粒子・山砂多、しまりなし。(燒)

第26図 第8号住居跡竈実測図



第27図 第8号住居跡出土遺物実測図

表10 第8号住居跡出土遺物観察表

| 番号 器種 | 寸法 | 特徴 | 色調 | 胎土 焼成 | 出土状況 (注記) 残存状況 |
|---------------------------|---------------------------------|--|---------------------------------------|-------------------------------------|----------------------|
| 1 土師器 壺 底 高: | 口: [13.3] 底: 6.8 高: (3.7) | 内: ロクロナデ 外: ロクロナデ 底: 回転ヘラ切りナデ | 内外: 7.5YR6/6 標 | 緻密 金屬母 赤スコリア | 窓火床 口~体2/3 底全存 |
| 2 土師器 壺 底 高: | 口: [13.6] 底: [8.0] 高: 4.0 | 内: ロクロナデ 黒色処理 外: ロクロナデ 摩滅 底: 回転ヘラ切り | 内: 2.5YR4/2/1 黒 外: 7.5YR7/8 黄橙 | やや粗 角閃石 白微砂粒 | No.2 口~体1/2 |
| 3 土師器 甕 底 高: | 口: 14.5 底: (6.2) | 内: 外面被黒色化及び摩滅調査 内: ロヨコナデ 外: ロヨコナデ 赤色変化・オコゲ付着 | 内: 7.5YR8/6 外: 7.5YR7/6 標 | 粗 白微砂粒 角閃石 | No.4床面付近 口1/4 |
| 4 土師器 甕 底 高: | 口: [18.3] 底: (5.5) | 内: ハケ目→ロヨコナデ・体ナデか 摩滅 斑状剥離 外: ナデ→ロヨコナデ 摩滅 | 内: 5YR6/6 標 外: 5YR5/6 標 | やや緻密 透明ガラス質粒子 白粗砂粒 | 窓 口1/6 |
| 5 土師器 甕 底 高: | 口: [17.6] 底: (7.8) | 内: 外面被黒色 内: 指頭底→ロヨコナデ 赤色変化 汚れ | 内: 5YR5/6 明赤褐 外: 7.5YR8/8 黄橙 | やや緻密 角閃石 透明ガラス質粒子 白粗砂粒 白小織 | 覆土 口1/3 |
| 6 土師器 甕 底 高: | 口: — 底: — 高: — | 内: ハケ目 外: ハケ目→指頭底 | 内: 10YR4/5/3 鈍い黄褐 外: 7.5YR7/6 標 | 緻密 透明ガラス質粒子 白微砂粒 白小織 | 窓 体破片 |
| 7 灰釉陶器 甕 底 高: | 口: — 底: — 高: — | 内: ロクロナデ 外: ロクロナデ→肩回転ヘラケズリ 全面褐色反転 | 内: 7.5Y7/1 灰白 外: 7.5Y6/2 灰オーリーブ | 緻密 透明ガラス質粒子 | 覆土 体破片 |
| 8 灰石 | 長: (6.7) 幅: 5.5 | 厚: 1.6 重: 58.3kg | 10YR6/3 錐い黄橙 | 流紋岩 | 覆土 |

黒色処理される。口縁端部は直立する1片をが出土する。甕のうち1片は体部外面に須恵器同様の平行叩きが見られる。甕は何れも煮炊き用と判断される。灰釉陶器は緑色釉が施された肩部小片である。

No.2の黒色処理はミガキを伴わない。No.7は猿投産。No.8は石質から仕上げ歎か。No.4・5など口縁部形態の判別できる土師器甕の殆どが「下野型」である点特徴的である。

本遺構の時期を明確にするのは難しいがSI-03との重複を鑑み1-2期を掘溝時期と捉えておきたい。

第9号住居跡・SI-09(第7, 28~29図・図版二, 九)
位置 L-14・15グリッドに位置する。
重複 SI-01と重複し、本遺構が後出する。また、遺構の北西半部は調査区外にある。

規模 南西隅が調査区外にあたるため推定とはなるが、東西壁 [3.6] m。床面までの深さ約0.64m。主軸方向はN-7°-W。

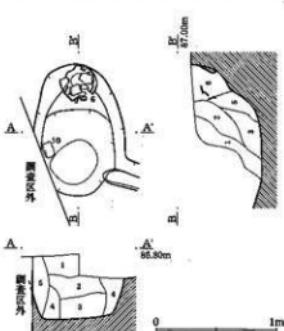
壁 床面より直立気味に立ち上がる。

周溝 遺構の残存する南東半部には、南東隅部を除き周溝が巡る。

仕切溝 確認されなかった。

柱穴 重複するSI-09の遺構部分と併せて、5基のピットを確認したが、帰属については明確な判断はなし得ない。各々の深さはSI-01に記した。

床面 西半部に貼り床が施される。残存部分はほぼ平坦であり、



- 1 硫黄色土 ローム粒子少、堆土粒子多、山砂、しまりややあり。(焼入土)
- 2 棕色土 堆土粒子、山砂少、しまりややあり。(焼入土)
- 3 灰褐色土 ローム粒子少、堆土粒子、山砂多、しまりややなし。(透通崩落土)
- 4 明褐色土 ローム粒子、堆土粒子、山砂多、ロームアッコック少、しまりややなし。(崩落土)
- 5 明灰色土 山砂生地、ローム粒子多、堆土粒子少、しまりややなし。(透通天井崩落土)
- 6 褐色土 ローム粒子多、堆土粒子少、山砂少、しまりなし。(焼入土)

第28図 第9号住居跡竪実測図

硬化する。

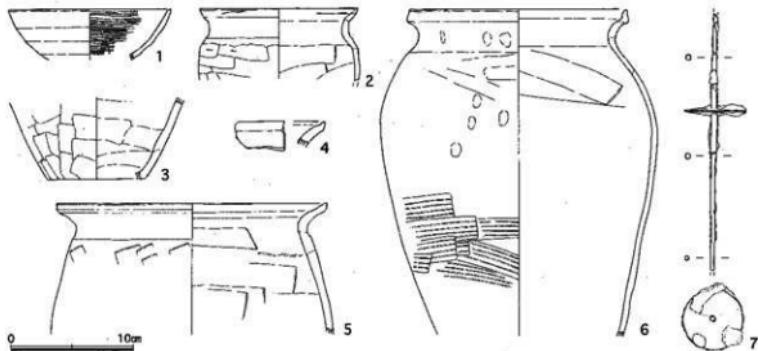
覆土 自然堆積と判断される。4層は貼床埋土であるが、然程の硬化は認められない。

貯藏穴 確認されなかった。

その他の施設 確認されなかった。

火炉 龍を火炉とする。東壁に位置する。重複と攪乱のため残存度は低く、特に、袖部は自然崩落と攪乱から明確な確認はなし得ていない。

煙道部は、東壁より70.0cm程住居外に奥壁が設えられる。煙道は山砂を含む構築土（4層）によって整えられる。奥壁には土器器窓の脇部下半（No.6）を逆位に据え、内壁の崩落を防止したものと考えられる。火



第29図 第9号住居跡出土遺物実測図

表11 第9号住居跡出土遺物観察表

| 番号 器種 | 寸法 | 特徴 | 色調 | 胎土 焼成 | 出土状況 (住記) 残存状況 |
|----------------------------|-----------------------------------|--|----------------------------|--|----------------------|
| 1 土器 壺 底: 高: | 口:[13.4] 底: 高:(4.1) | 内:ヘラミガキ(底一方角→体ヨコ) 黒色處理 外:ロクロナデ | 内:SY2/1 黒 外:7.5YR6/6 棕 | 黒 白鐵砂粒 赤色スコリア | No.3床底? 口~体1/6 |
| 2 土器 壺 底: 高: | 口:[13.0] 底: 高:(5.8) | 内:ヘナナデ→ロヨコナデ 口端以下汚れ 外:ヘラケズリ(ヨコ一部タテ)→ロヨコナデ | 内:5YR6/6 棕 外:SYR6/8 棕 | やや鐵 角閃石 白鐵砂粒 白砂粒 | 壺 口1/4 |
| 3 土器 壺 底: 高: | 口:— 底:[8.0] 高:(6.6) | 内:ナデ 外:ヘラケズリ(ヨコ) 底:ヘラケズリか | 内:7.5YR7/6 棕 外:SYR6/6 棕 | やや粗 透明ガラス質粒子 白鐵砂粒 | No.3壁土中層 底1/4 |
| 4 土器 壺 底: 高: | 口:— 底:— 高:— | 内:ロヨコナデ 外:ロヨコナデ | 内外:2.5YR5/8 明赤褐 | やや鐵 金属母 白砂粒 白鐵砂粒 白小磚 | 壺 口一部 |
| 5 土器 壺 底: 高: | 口:[22.0] 底: 高:(10.7) | 内:ヘナナデ→ロヨコナデ 外:ヘナナデ→ロヨコナデ 彼熱痕 体鉢土付着 | 内:SYR4/8 棕 外:5YR5/8 明赤褐 | やや粗 金属母 透明ガラス質細粒 白鐵砂粒 白磚 | 壺 口~体1/2 |
| 6 土器 壺 底: 高: | 口:17.8 底: 高:(26.5) | 内:頸・体斑状剥離窓 外:体下半汚れ・斑状剥離 頸以下粘土付着 (体ナデ→ロヨコナデ・体下半ハケ目) | 内:SYR5/4 外:SYR5/6 明赤褐 | やや粗 金属母 透明ガラス質粒子 白鐵砂粒 白磚 白鐵砂粒 白砂粒 | 壺 口完存 体1/6 |
| 7 鉄製 鋸鋸車 底: 高: | 長:(20.9) 鉄製 鋸鋸車 底: 高: | 輪轂は円形であるが上端はやや角形状 上下端欠損 | | | No.4壁土下層 |

床の掘り込みはごく浅い。目立った焼土の堆積は認められず、底面は被熱により若干硬化する程度である。袖部・火壁・天井部・掛け口は明確にしないが、3・5層は煙道部及び天井部の崩落土か。竈掘方内からNo.9とは別個体の焼成粘土塊が出土したことや、竈前面の遺構床面付近から出土した長方形粘土塊（No.9）を構部材と考えるならば、天井及び掛け口（或いは袖部も含むか）を人為的に除去し、火床を浚った後、廃絶されたものと推測できる。

出土遺物については、竈内からはNo.2・5・6の他、土師器壺や甕の小片90片弱、須恵器壺微細片1片、被熱した河原石1点（No.8）が出土したが、先述のNo.6とNo.8以外は混入遺物と判断される。No.8は原位置とは判断できないが、支脚か。

出土遺物 図示した以外に、土師器壺・甕50片強、須恵器壺・甕5片が出土した。No.1・8・9が床面付近から、掘方から出土した土師器甕小片2片・前述の竈出土以外は覆土中への混入遺物である。竈から出土した土師器壺は内外ともロクロ：口縁端部外反・1片・内面黒色処理1片を含む。口縁部形態の判別可能な甕は、「下野型」2片、「く」字3片である。覆土出土の土師器壺は内外ともロクロ・3片（うち1片は口縁端部外反）・内面ミガキ：外面ロクロ・3片で、内面黒色処理3片を含む。No.2は「武藏型」甕。

数量的には甕の小片の出土が多く、何れも煮炊用と判断できる。また、図示したNo.5・6をはじめ、胎土中に金雲母片を含む甕の破片が多い。ただし、胎土に金雲母片を含む土師器片のうち、口縁部・底部破片

は各1片ずつであり、個体数は限定される可能性はある。

遺構の時期を明確にするのは難しいが1期が埋没過程と捉えておきたい。

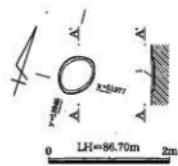
第44号住居跡・SL44（第30図・図版四）

位置 J-12グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模・遺構状況等 前平により竈基底部のみが残存する。焼土が厚く堆積することから火床と見られる。

出土遺物 確認されなかった。



1 黄色土 黑土粒子・山砂少・しまなし。
第30図 第44号住居跡竈
実測図

第3節 土坑・ピット

1. 調査の概要

46基の土坑、29基のピットを確認した。SX-61周辺に位置するピット32基については、SX-61周辺ピットとして別記した。

耕作による筋状の擾乱が著しいことや出土遺物を伴わない遺構が多いことから、概して不明な点が多い。しかし、SK-26については、形状から繩文時代の陥穴状土坑と判断した。これ以外の土坑・ピットは、住居跡の分布に相応して位置することから、住居跡に即した時期の所産である可能性が高い。

土坑は深さ10cm前後の浅い土坑が多い。遺構底面にピット状の掘り込みを持つSK-17・22、これらの直線上に並ぶSK-23・24については掘立柱建物跡或いは構列跡である可能性を否定できない。また、SK-27・35・37・38・P36は方形ライン上に位置し、SK-35-SK-37-SK-27-SK-48の間隔は約3.85m、SK-35-SK-38-SK-37・SK-38-SK-48の間隔は約2.1mと、ほぼ同一の間隔で位置する。このため、掘立柱建物跡や構列等の可能性を指摘できるが、覆土の堆積状況、南・東辺上に遺構を確認し得なかつたことから本節で扱った。

ピットのうち、形状や覆土から柱穴と推測されるのはP39・40・54・98（SK-34内）である。

調査区南西端部の遺構分布域に位置するSK-58・62などについては、近接するSX-61との関連を念頭に置く

必要があろう。

2. 脊穴状土坑

第26号土坑・SK-26 (第31図・図版五)

位置 I-11グリッドに位置する。

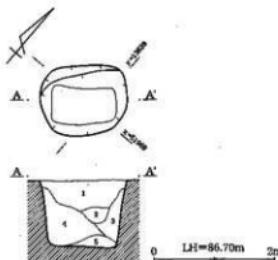
重複 重複する遺構はない。

規模 北東・南西に主軸を持つ長円形で、長軸約1.44m・短軸約1.15m・深さ約1.12m・主軸N46°E。

形状 底面は概ね平坦である。壁は若干の角度をもって直線的に立ち上がるが、一部、確認面下約0.4mからラッパ状に大きく開く。

覆土 硬くしまった5層を確認し、自然堆積と判断される。底面にKP粒子が散見された。

出土遺物 確認されなかった。



- | | |
|--------|-----------------------------|
| 1 黒褐色土 | ローム粒子、白色粒子多。しまりあり。 |
| 2 白色土 | ローム粒子や多。しまりあり。 |
| 3 明褐色土 | ローム粒子や多。IP粒子微。 |
| 4 暗褐色土 | しまりやあり。 |
| 5 明褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多。IP粒子少。しまりあり。 |

第31図 第26号土坑実測図

3. 土坑

第10号土坑・SK-10 (第32, 34図)

位置 M-15グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 円形で、径約1.0m・深さ0.34m。

形状 底面は若干掘り鉢状を呈し、壁は角度をもって立ち上がる。

出土遺物 №1の他、土師器壺10片弱・甕20片弱・須恵器壺3片・被熱した破碎河原石が1点出土するが何れも覆土への混入遺物である。土師器壺は内面ミガキ：外面クロコで、3片は黒色処理。土師器甕に関しては8~9個体分で、このうち胎土に金雲母片を含むものが4片1個体分ある。

第11号土坑・SK-11 (第32, 34図・図版九)

位置 M-14グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 円形で、径約0.75m・深さ0.47m。

形状 底面は概ね平坦で、壁は直立気味に立ち上がる。

覆土 人為埋土と判断される。

出土遺物 1層中から焼土とともに№1・土師器壺1片・甕10片弱が出土した。甕のうち1片は胎土中に金雲母片を含む。

第16号土坑・SK-16 (第32図)

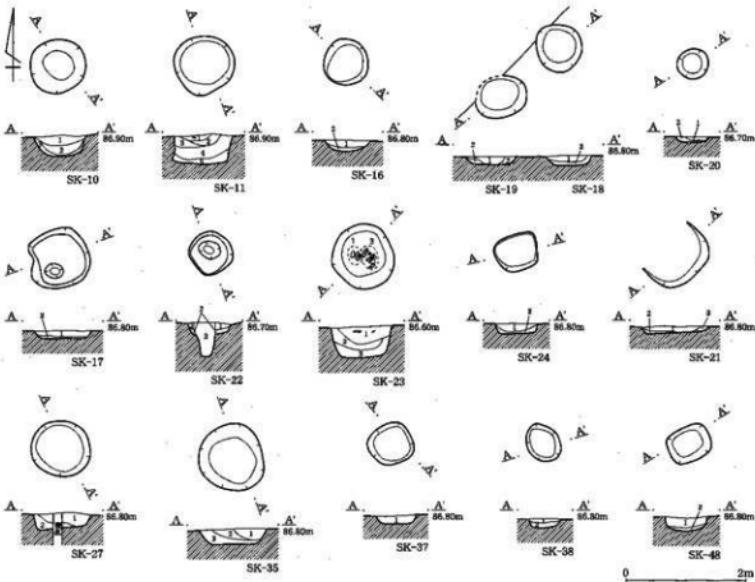
位置 J-12グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 円形で、径約0.93m・深さ0.13m。

形状 北半部に最深部があり、緩やかに立ち上がる。

出土遺物 確認されなかった。



0 2m

SK-10

- 1 明褐色土 ローム粒子 (~0.2m)、無土粒子若干。しまり・粘性やあり。
2 黄褐色土 ローム粒子 (~0.2m) 署干。しまり・粘性やあり。
3 棕褐色土 ロームブロック。しまりやかなし。粘性やあり。

SK-11

- 1 黄褐色土 ローム粒子 (~0.2m) 少。ロームブロック (~1.0m) 少。無土粒子若干。しまり・粘性やあり。
2 黄褐色土 ローム粒子 (~0.2m) 少。ロームブロック (~2.0m) 少。炭化物若干。しまり・粘性ややあり。
3 明褐色土 ローム粒子 (~0.2m) 多。ローム粒子 (~1.0m) 少。しまり・粘性ややあり。

SK-12

- 1 黄褐色土 ローム粒子 (~0.2m) 少。しまりやかなし。粘性ややあり。
2 黒褐色土 ロームブロック (~3.0m) 多。しまりやかなし。粘性ややあり。

SK-16

- 1 黒褐色土 ローム粒子 (~0.2m)、ロームブロック (~2.5m) 少。しまり・粘性ややあり。
2 増褐色土 ローム粒子 (~0.2m)、ロームブロック (~2.0m) 少。しまり・粘性ややあり。

SK-17

- 1 増褐色土 ローム粒子 (~0.1m) 少。しまりやあり・粘性ややあり。
2 増褐色土 ローム粒子 (~0.1m)、ロームブロック (~2.0m) 少。しまり・粘性ややあり。

SK-18

- 1 増褐色土 ローム粒子 (~0.2m) やや多。無土粒子 (~0.2m)、洗土ブロック (~1.0m) 少。しまり・粘性ややあり。
2 増褐色土 ローム粒子 (~0.2m)、ロームブロック (~1.0m) やや多。しまりややあり。粘性あり。

SK-19

- 1 増褐色土 ローム粒子 (~0.1m)、しまりややあり。粘性あり。
2 棕褐色土 ローム粒子 (~0.1m) やや多。ロームブロック (~1.0m) 少。しまり・粘性あり。

SK-20

- 1 増褐色土 ローム粒子 (~0.1m)、しまり・粘性あり。
2 黄褐色土 ローム粒子 (~0.1m) やや多。ロームブロック (~1.0m) 少。しまりややあり。粘性あり。

SK-21

- 1 黒褐色土 黄褐色土少。しまりなし。
2 増褐色土 ロームブロックや多。しまりなし。
3 棕褐色土 しまりなし。

SK-22

- 1 黒褐色土 ローム粒子若干。しまりややなし。
2 増褐色土 ローム粒子少。しまりややなし。
3 黑褐色土 ローム粒子少。しまりなし。

SK-23

- 1 増褐色土 ローム粒子 (~0.2m) やや多。炭化物粒子若干。しまり強。
2 増褐色土 ローム粒子 (~0.1m) 少。ロームブロック (~1.0m) 番干。しまりややあり。粘性あり。
3 増褐色土 ローム粒子 (~0.1m) やや多。ロームブロック (~2.0m)、しまり・粘性あり。

SK-24

- 1 增褐色土 ローム粒子 (~0.1m)、しまりややあり。粘性あり。
2 黄褐色土 ローム粒子 (~0.1m)、ロームブロック (~1.0m) 少。しまりややあり。粘性あり。

SK-27

- 1 黑褐色土 増褐色土少。しまりややあり。
2 黑褐色土 ローム粒子少。しまりなし。

SK-35

- 1 増褐色土 ローム粒子強。しまりあり。
2 明褐色土 ローム粒子少。しまりあり。
3 棕褐色土 ロームブロック・沢褐色土主。しまりあり。

SK-37

- 1 棕褐色土 白色粒子微。しまりあり。

SK-38

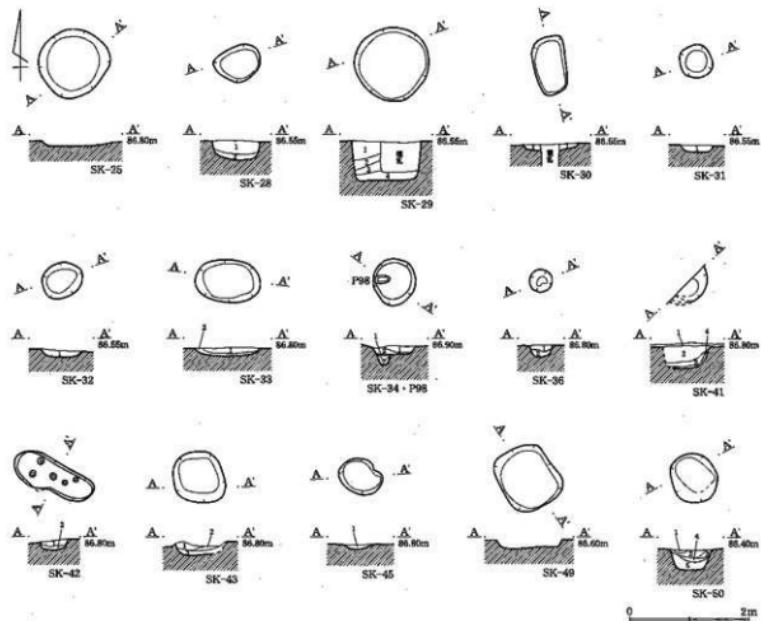
- 1 棕褐色土 ローム粒子強。しまりなし。
2 明褐色土 ローム粒子多。しまりなし。

SK-48

- 1 増褐色土 ローム粒子 (~0.2m) 少。ロームブロック (~1.0m) 署干。しまり・粘性あり。

- 2 増褐色土 ローム粒子 (~0.2m) 少。ロームブロック (~1.5m) やや少。しまり・粘性あり。

第32図 土坑実測図 (1)

SK-25
1 黒褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$)、鐵土粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 少、炭化物粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 若干、硬くしまる。2 嫌褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$)、ロームブロック ($\sim 1.0\text{cm}$) や多、しまりややあり、粘性あり。SK-29
1 黒褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$)、ロームブロック ($\sim 1.0\text{cm}$) 少、しまりややあり、粘性あり。2 黒褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) や多、ロームブロック ($\sim 1.0\text{cm}$)、硬くしまる。粘性あり。3 黒褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$)、しまり・粘性ややあり。4 黑褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$)、ロームブロック ($\sim 2.0\text{cm}$) や多、しまり、粘性ややあり。SK-30
1 嫌褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 少、硬くしまる。SK-31
1 嫌褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 少、硬くしまる。SK-32
1 黒褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 少、硬くしまる。SK-33
1 黑褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 少、硬くしまる。しまりややあり、粘性あり。SK-34 + P98
1 黑褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 少、硬くしまる。しまりややあり、粘性あり。SK-35
1 黑褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 少、硬くしまる。しまりややあり、粘性あり。SK-36
1 黑褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 少、硬くしまる。しまりややあり、粘性あり。SK-37
1 黑褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 少、硬くしまる。しまりややあり、粘性あり。SK-38
1 黑褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 少、硬くしまる。しまりややあり、粘性あり。SK-39
1 黑褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 少、硬くしまる。しまりややあり、粘性あり。SK-40
1 黑褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 少、硬くしまる。しまりややあり、粘性あり。SK-41
1 黑褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 少、硬くしまる。しまりややあり、粘性あり。SK-42
1 黑褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 少、硬くしまる。しまりややあり、粘性あり。SK-43
1 黑褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 少、硬くしまる。しまりややあり、粘性あり。SK-44
1 黑褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 少、硬くしまる。しまりややあり、粘性あり。SK-45
1 黑褐色土 ローム粒子少、鐵土粒子少。硬くしまる。SK-46
1 黑褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.2\text{cm}$) 少、しまりややあり、粘性あり。2 嫌褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.2\text{cm}$) 多、鐵土粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 若干、硬くしまる。鐵土粒子ブロック ($\sim 1.0\text{cm}$) 少、しまりややあり、粘性あり。3 嫌褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.2\text{cm}$)、しまりややあり、粘性あり。4 黑褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.2\text{cm}$) 多、鐵土粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 少、ロームブロック ($\sim 2.0\text{cm}$) 多、しまりややあり、粘性あり。5 嫌褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.2\text{cm}$) 主体、ロームブロック ($\sim 1.5\text{cm}$) 少、しまりややあり、粘性あり。

第33図 土坑実測図 (2)

第17号土坑・SK-17（第32図・図版五）

位置 G-9グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 撥乱のため平面形は不明である。径約0.93m・深さ0.15m。

形状 底面は概ね平坦である。壁寄りに底面からの深さ約0.20mのピットが穿たれる。

出土遺物 確認されなかった。

第18号土坑・SK-18（第32図）

位置 I-11グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 円形で、径約0.80m・深さ0.17m。

形状 底面は概ね平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

出土遺物 覆土中から土師器壺1片が出土する。図示し得ない小片である。

第19号土坑・SK-19（第32図）

位置 I-11グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 やや東西に長い円形で、長軸約0.90m・短軸約0.70m・深さ0.16m。

形状 床面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

出土遺物 確認されなかった。

第20号土坑・SK-20（第32図）

位置 I-11グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 円形で、径約0.52m・深さ0.15m。

形状 床面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

出土遺物 確認されなかった。

第21号土坑・SK-21（第32図）

位置 H-11グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はないが、南西半部は調査区外に位置する。

規模 隅丸方形で、確認できる長軸約1.1m・深さ0.25m。

形状 床面はほぼ平坦で、壁は角度をもって立ち上がる。

出土遺物 確認されなかった。

第22号土坑・SK-22（第32図・図版五）

位置 G-9グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 不整な円形で径約0.68m・深さ約0.17m。

形状 底面は概ね平坦で、壁は直立気味に立ち上がる。中央部に底面からの深さ約0.40mのピットがある。

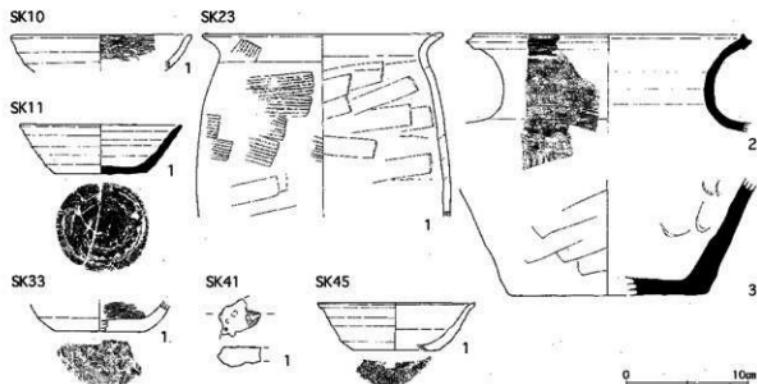
覆土 堆積状況から柱穴の可能性を指摘できる。

出土遺物 覆土中より、土師器壺1片、須恵器壺・壺各1片が出土する。何れも時期等の判別が困難な小片であるが、須恵器壺は外面に平行叩きが施される。須恵器は南那須窯と見られる。

第23号土坑・SK-23 (第32, 34図・図版五, 九)

位置 G-9 グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。



第34図 土坑出土遺物実測図

表12 土坑出土遺物観察表

| 番号 圖 種 | 寸法 | 特徴 | 色調 | 胎土 焼成 | 出土状況 (注記) 残存状況 |
|----------------------------|--|---|--|-----------------------------------|--------------------------|
| SK-10 1 土器 底: 厚: | 口:[15.0] 底: 高:(3.9) | 内: 黒色處理→ヘラミガキ 外: ロクロナデ | 内: N2/0 黒 外: 5YR8/6 明赤褐 | やや緻密 金雲母 白微砂粒 | 覆土 口~体1/6 |
| SK-11 1 須恵器 底: 厚: | 口:[13.2] 底: 高: 4.0 | 内外: 摩擦 ロクロナデ 底: ヘラ切り | 内外: 10YR7/3 純い黄橙 | 粗 白砂粒 白粗砂粒 黒褐 焼成や不直 底存 | 覆土 口4/5 体4/5 底存 |
| SK-23 1 土器 底: 高: | 口:[19.6] 底: 高:(15.0) | 内: ヘラナデ→ヨコナデ 口汚れ 体摩滅 外: 体上ノ目 体下ヘラケズリ→ヨコナデ 口汚れ 体状剥離顯著 赤色変化 煙付着 | 内: 10YR7/4 純い黄橙 外: 10YR6/3 純い黄橙 | やや緻密 透明ガラス質粒子 白微細粒 | No.1 覆土上層 口~体上半1/5 |
| SK-23 2 須恵器 底: 高: | 口:[23.4] 底: 高:(8.0) | 内: ロクロナデ 平行タキ→ロクロナデ | 内: N5/0 灰 外: N7/0 灰白 | やや緻密 透明ガラス質砂粒 白微細粒 | 覆土 口一部 |
| SK-23 3 須恵器 底: 高: | 口: 一 底: 16.5 高: (9.5) | 内: 当て具痕 下端ナデ 外: ハケズリ 底内面焼成時の自然堆疊 外・底部外面自然堆積 | 内: N6/ 0 外: 10BG4/1 暗青灰 | 緻密 微砂粒 白鐵 白色粒 | 覆土 体下端一部 底1/2 |
| SK-33 1 土器 底: 高: | 口: 一 底: [7.4] 高: (2.6) | 内: 黒色處理→ヘラミガキ(底一方向→体ヨコ) 外: ロクロナデ 底: 回転糸切り | 内: 5Y2/1 黒 外: 7.5YR7/4 純い橙 | やや緻密 赤色スコリア 角閃石 透明ガラス質砂粒 | 覆土 底1/4 |
| SK-41 1 輪型 鏡油津 | 長: 3.9 幅: 3.4 厚: 1.6 重: 18.4g | 上面: 木炭痕 粗粒状突起 下面: 伊東粘土 木炭痕 津は緻密で重感あり 破面は側面に二面 | | | 覆土 |
| SK-45 1 土器 底: 高: | 口:[12.8] 底: 高: 3.9 | 内: ロクロナデ 外: ロクロナデ 底: ヘラ切り | 内: 7.5YR6/4 純い橙 | やや緻密 黒粗砂粒 透明ガラス質砂粒 | 覆土 口1/8 底1/3 |

規模 円形で、長軸約1.05m・深さ約0.5m。

形状 底面は概ね平坦で、壁は直立気味に立ち上がる。

出土遺物 図示した以外に、土師器壺4片、須恵器壺2片が出土する。No.1~3を含め1層中に纏まって出土した。No.2の外面は平行叩き。産地は不明。No.3は青味の強い色調。産地・作成技法とも不明である。

第24号土坑・SK-24(第32図)

位置 G-9グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 搾乱のため平面形は不明である。径約0.66m・深さ0.14m。

形状 底面は概ね平坦で、壁は直立気味に立ち上がる。

出土遺物 確認されなかった。

第25号土坑・SK-25(第33図)

位置 I-10グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 円形で、径約1.2m・深さ0.08m。

形状 底面は概ね平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

覆土 3層を確認した。人為埋土と判断される。

出土遺物 確認されなかった。

第27号土坑・SK-27(第32図)

位置 H-9グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 円形で、径約0.96m・深さ0.30m。

形状 底面は概ね平坦で、壁は角度をもって緩やかに立ち上がる。

出土遺物 確認されなかった。

第28号土坑・SK-28(第33図)

位置 E-6グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 東西に長い不整な円形で、長軸約0.77m・短軸約0.58m・深さ0.11m。

形状 底面は概ね平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

出土遺物 土師器壺・壺各1片、須恵器壺底部2片が出土した。土師器壺は内面黒色処理・外面：ロクロ、須恵器壺の底部はヘラケズリされる。1片は三和窯産。何れも覆土中への混入遺物である。

第29号土坑・SK-29(第33図)

位置 F-7グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 円形で、径約1.24m・深さ0.52m。

形状 底面は概ね平坦で、壁は直線的に立ち上がる。

覆土 ロームブロックを含む4層を確認した。人為埋土の可能性を指摘できる。

出土遺物 確認されなかった。

第30号土坑・SK-30（第33図）

位置 E-7グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 南北に長い不整な扇形で、東西約0.55m・南北約0.9m・深さ0.08m。主軸N-15°-W。

形状 底面は概ね平坦であるが、擾乱のため不詳な点が多い。

出土遺物 確認されなかった。

第31号土坑・SK-31（第33図）

位置 E-7グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 円形で、径約0.53m・深さ0.11m。

形状 摻乱のため不詳な点が多いが、底面は概ね平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

出土遺物 確認されなかった。

第32号土坑・SK-32（第33図）

位置 E-7グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 東西に長い円形で、東西約0.70m・南北約0.55m・深さ0.12m。

形状 摻乱のため不詳な点が多いが、緩やかな掘り鉢状であったと判断される。

出土遺物 確認されなかった。

第33号土坑・SK-33（第33～34図・図版九）

位置 I-11グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 東西に長い円形で、長軸約1.08m・短軸約0.9m・深さ0.14m。

形状 底面は中央部が径0.10m・深さ0.06m程のピット状に陥るが概ね平坦である。壁は角度をもって緩やかに立ち上がる。

出土遺物 No.1以外に、土師器壺・高台付壺各1片、焼成粘土塊1片が出土する。土師器壺は内面黒色処理・外面：ロクロ・底部：糸切り、高台付壺は内外ロクロで仕上げられる。何れも覆土中への混入遺物であり、本遺構の詳細には不明な点が多い。

第34号土坑・SK-34（第33図）

位置 K-10グリッドに位置する。

重複 P98と重複し、本遺構が後出する。

規模 円形で、径約0.78m・深さ0.14m。

形状 底面は概ね平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

出土遺物 確認面付近から、須恵器壺1片が出土した。南那須窯産。

第35号土坑・SK-35（第32図）

位置 H-10グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 不整な円形で、径約1.1m・深さ0.23m。

形状 底面南から北へ傾斜する。壁は浅い南側は緩やかに、深い北側は直立して立ち上がる。

覆土 人為埋土と判断される。

出土遺物 須恵器甕1片・灰釉陶器1片が出土した。外面にはカキ目を施し自然釉が掛かる。覆土中への混入遺物である。

第36号土坑・SK-36（第33図）

位置 H-10グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 円形で、径約0.4m・深さ0.28m。

形状 底面は三日月形で概ね平坦、壁は直立気味でピット状である。

出土遺物 確認されなかった。

第37号土坑・SK-37（第32図）

位置 H-10グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 四角形で、径約0.68m・深さ0.16m。主軸N-40°-W。

形状 底面は平坦、壁は緩やかに立ち上がる。

出土遺物 確認されなかった。

第38号土坑・SK-38（第32図）

位置 H-10グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 不整な円形で、長軸約0.67m・短軸0.54m・深さ0.24m。

形状 底面は東から西へ傾斜し、壁は角度をもって立ち上がる。

出土遺物 確認されなかった。

第41号土坑・SK-41（第33～34図・図版九）

位置 I-11グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はないが、南西部を搅乱により失うことや北西半部は調査区外に位置することから不明な点が多い。

規模 円形と判断される。径約0.84m・深さ約0.35m。

形状 底面は概ね平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

出土遺物 覆土中からNo.1椀型鉄冶滓が出土した。

第42号土坑・SK-42（第33図）

位置 J-11グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 東西に長い円形で、長軸約1.4m・深さ0.48m。

形状 底面からの深さ0.10m程のピット状の落ち込みが数基あるが、底面は概ね平坦である。壁は直立気味に立ち上がるが南西部の膨らみ部でオーバーハングする。

出土遺物 確認されなかった。

第43号土坑・SK-43（第33図）

位置 I-11グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 隅丸方形で、東西約0.84m・南北約0.87m・深さ約0.23m。

形状 底面は概ね平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

出土遺物 覆土中から、土師器壺1片・甕6片・灰釉陶器甕1片・被熱粘土塊1片・被熱河原石1片が出士した。土師器壺は内面ミガキ：外面ロクロ。口縁部形態の判別可能な甕は1片で、胎土に金雲母片を含む「下野型」。灰釉陶器は外面に緑色釉が施される。狼投産。

第45号土坑・SK-45（第33～34図・図版九）

位置 I-10グリッドに位置する。北東にP47、南東にP46が近接する。

重複 重複する遺構はない。

規模 不整な円形で、長軸約0.74m・短軸0.58m・深さ0.10m。

形状 凹凸の見られる底面から緩やかに壁が立ち上がる。

出土遺物 №1以外に須恵器甕1片が出土した。益子窯産か。何れも覆土中への混入遺物である。

第46号土坑・SK-46（第32図・図版五）

位置 H-9グリッドに位置する。南西にSI-05が近接する。

重複 重複する遺構はない。

規模 東西に長い方形で、東西約0.7m・南北約0.6m・深さ約0.2m。主軸N-27°-W。

形状 底面は概ね平坦で、壁は角度をもって立ち上がる。

出土遺物 確認されなかった。

第49号土坑・SK-49（第33図）

位置 G-8グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 隅丸方形で、長軸約1.06m・短軸約0.93m・深さ0.13m。主軸N-29°-W。

形状 底面は概ね平坦で、壁は角度をもって立ち上がる。

出土遺物 確認されなかった。

第50号土坑・SK-50（第33図）

位置 D-6グリッドに位置する。

重複 SI-07と重複する。本遺構が後出する。

規模 やや南北に長い円形で、長軸約0.84m・短軸約0.74m・深さ0.34m。

形状 底面は概ね平坦で、壁は角度をもって立ち上がる。

覆土等 2層に混入する灰色粘土ブロックは、SI-07の窓の混入と判断される。また、SI-07床面の硬化面を本遺構が分断することから、新旧関係を判断した。

出土遺物 確認されなかった。

第51号土坑・SK-51（第35図）

位置 H-6グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 円形で、径約1.4m・深さ約0.21m。

形状 底面には大きな凹凸が見られる。壁は角度をもって内溝気味に立ち上がる。

出土遺物 確認されなかった。

第52号土坑・SK-52 (第35図)

位置 H-6 グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 円形で、径約0.85m・深さ約0.15m。

形状 底面は概ね平坦で、壁は角度を緩やかに立ち上がる。

出土遺物 確認されなかった。

第53号土坑・SK-53 (第35図)

位置 H-6 グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 東西に長い円形で、東西約0.7m・南北約0.5m・深さ約0.2m。

形状 底面は概ね平坦で、壁は角度をもって立ち上がる。

出土遺物 確認されなかった。

第55号土坑・SK-55 (第35図)

位置 H-6 グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 東西に長い円形で、長軸約0.74m・短軸約0.32m・深さ約0.16m。

形状 底面には大きな凹凸が見られる。壁は角度をもって立ち上がる。

出土遺物 確認されなかった。

第56号土坑・SK-56 (第35図)

位置 I-7 グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 円形で径約0.85m・深さ約0.17m。

形状 底面は概ね平坦で、壁は角度をもって立ち上がる。

出土遺物 確認されなかった。

第57号土坑・SK-57 (第35図)

位置 I-7 グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 概ね円形で径0.6m・深さ0.12m。

形状 底面は平坦で、壁は角度をもって立ち上がる。

出土遺物 確認されなかった。

第58号土坑・SK-58 (第35図・図版六)

位置 H-3・4 グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 南北に長い円形で、長軸約1.4m・短軸約0.93m・深さ0.49m。

形状 底面は概ね平坦で、壁は船底気味に立ち上がる。

出土遺物 確認されなかった。

第59号土坑・SK-59 (第35図)

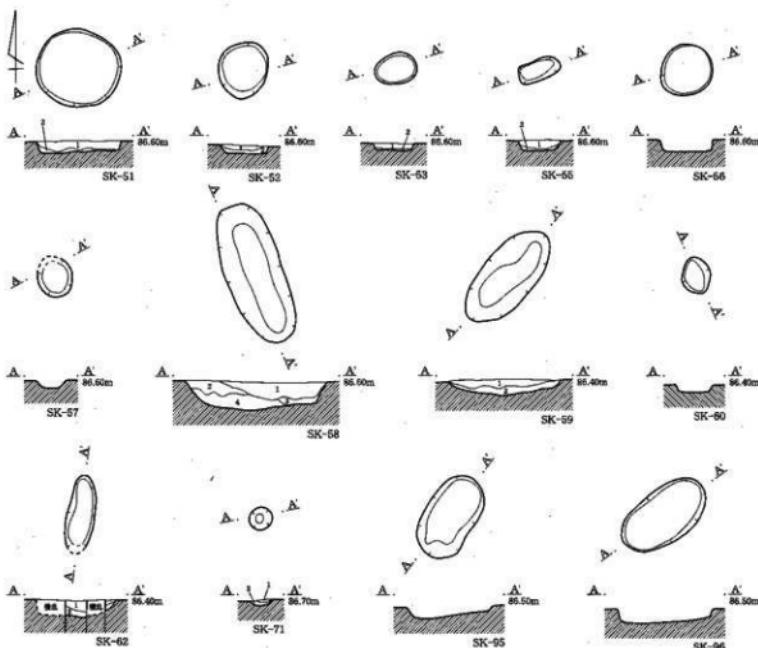
位置 F-3 グリッドに位置する。近接するSK-96・96とは主軸をほぼ同じにする。

重複 重複する遺構はない。

規模 北東・南西に長い円形で、長軸約0.96m・短軸0.48m・深さ0.22m。

形状 底面は不整な円形で凹凸が見られ、壁は船底気味に立ち上がる。

出土遺物 確認されなかった。



SK-51
1 黒褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 少。しまりややあり。粘性あり。
2 嫡褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.2\text{cm}$) 多。しまりややあり。粘性あり。

SK-52
1 黒褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 少。しまりややあり。粘性あり。
2 嫡褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.2\text{cm}$) 多。しまりややあり。粘性あり。

SK-53
1 黒褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 若干。しまりややあり。粘性あり。
2 嫡褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 若干。しまり・粘性あり。

SK-55
1 嫡褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) ロームブロック ($\sim 1.0\text{cm}$)、黒色土ブロック ($\sim 1.0\text{cm}$) 少。しまりやや強。粘性あり。
2 嫡褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$)、ロームブロック ($\sim 1.5\text{cm}$) や少。しまり・粘性あり。

SK-68
1 嫡褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 若。しまり・粘性あり。
2 黒褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 若。しまり・粘性あり。
3 嫡褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 少。しまり・粘性あり。
4 黄褐色土 ローム主体。黒色土少。しまり・粘性あり。

SK-59
1 黒褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 少。しまりややあり。粘性あり。
2 嫡褐色土 ローム粒子・ロームブロック多。しまりややあり。粘性あり。

SK-62
1 黒褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 多。しまり・粘性あり。
2 嫡褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.2\text{cm}$) 多。ロームブロック ($\sim 1.0\text{cm}$)。しまり強。粘性あり。

SK-71
1 嫡褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 少。焼土粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 若干。しまりややあり。粘性あり。
2 嫡褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$)、ロームブロック ($\sim 1.0\text{cm}$) 少。しまり・粘性あり。

0 2m

第35図 土坑実測図 (3)

第60号土坑・SK-60（第35図）

位置 F-4 グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 不整な円形で、長軸約0.6m・短軸0.5m・深さ0.13m。

形状 底面はほぼ平坦で、壁は角度をもって立ち上がる。

出土遺物 確認されなかった。

第62号土坑・SK-62（第35図）

位置 F-3 グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はないが、擾乱ため不明な点が多い。

規模 南北に長い不整な円形で、長軸約1.3m・短軸0.45m・深さ0.33m。

形状 摆乱のため判然としないが、底面は概ね平坦と判断される。壁は角度をもって立ち上がる。

出土遺物 確認されなかった。

第71号土坑・SK-71（第35図）

位置 I-11 グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 円形で、径約0.8m・深さ0.10m。

形状 丸い底面から緩やかに壁が立ち上がる。

出土遺物 確認されなかった。

第72号土坑・SK-72（第12図）

位置 I-10 グリッドに位置する。

重複 SI-03と重複するが、新旧関係は不明である。

規模 東西に長い円形で、東西約0.8m・南北約0.62m・深さ約0.2m。

形状 底面は概ね平坦で、壁は角度をもって立ち上がる。

出土遺物 出土遺物は確認されなかった。しかし、SI-03及びSI-03・08覆土中の遺物と混同した可能性は否定できない。

第94号土坑・SK-94（第12図）

位置 I-10 グリッドに位置する。

重複 SI-08と重複するが、新旧関係は不明である。

規模 円形と推測される。径約1.0m程か・深さ約0.4m。

形状 SI-08との重複により不明である。

出土遺物 出土遺物は確認されなかった。しかし、SI-08及びSI-03・08覆土中の遺物と混同した可能性は否定できない。

第95号土坑・SK-95（第35図）

位置 F-3 グリッドに位置する。近接するSK-59・96とは主軸をほぼ同じにする。

重複 重複する遺構はない。

規模 北東-南西に長い円形で、長軸約1.45m・短軸0.84m・深さ0.16m。

形状 底面は不整な円形で凹凸が見られ、壁は船底気味に立ち上がる。

出土遺物 確認されなかった。

第96号土坑・SK-96（第35図）

位置 F-3 グリッドに位置する。近接するSK-59・95とは主軸をほぼ同じにする。

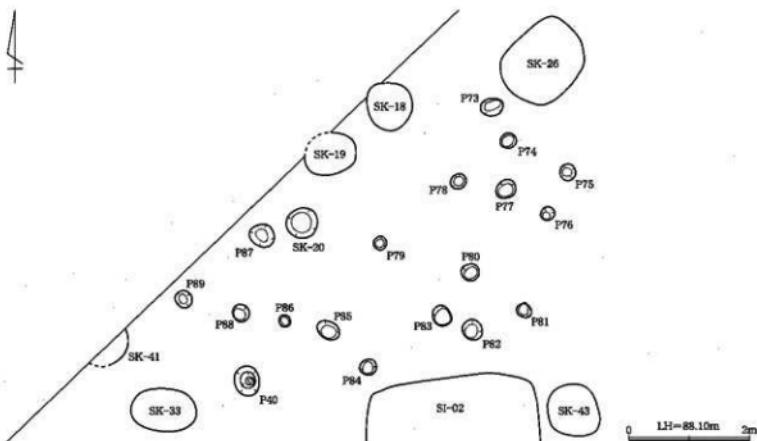
重複 重複する遺構はない。

規模 北東・南西に長い円形で、長軸約1.55m・短軸0.8m・深さ0.20m。

形状 底面は凸凹が見られ、壁は船底気味に立ち上がる。

出土遺物 確認されなかった。

4. ピット（第36～37図・図版五）

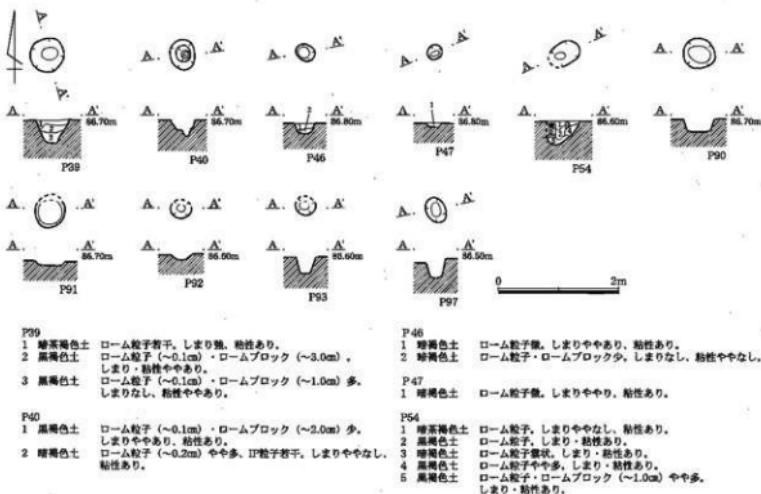


第36図 ピット位置図

表13 ピット計測表

| 遺構 | 位置 | 形状 | 規模 | 深さ | 特記事項 | 遺構 | 位置 | 形状 | 規模 | 深さ | 特記事項 |
|-----|------|------|-----------|------|------------|-----|-------|------|-----------|------|--------|
| P89 | L-13 | 円形 | 0.56 | 0.49 | | P82 | I-12 | 不整円形 | 0.35×0.31 | 0.21 | |
| P40 | I-11 | 梢円形 | 0.5×0.4 | 0.29 | 2層確認第37図参照 | P83 | I-12 | 不整円形 | 0.34×0.29 | 0.14 | |
| P46 | I-10 | 不整円形 | 0.32×0.28 | 0.19 | | P84 | I-12 | 円形 | 0.28 | 0.11 | |
| P47 | I-10 | 円形 | 0.26 | 0.07 | | P85 | I-12 | 梢円形 | 0.4×0.29 | 0.22 | |
| P54 | G-5 | 梢円形 | 0.55×0.37 | 0.4 | | P86 | I-12 | 円形 | 0.19 | 0.08 | |
| P73 | I-12 | 梢円形 | 0.38×0.29 | 0.22 | | P87 | I-12 | 円形 | 0.38 | 0.16 | |
| P74 | I-12 | 円形 | 0.26 | 0.14 | | P88 | I-12 | 円形 | 0.29 | 0.19 | |
| P75 | I-12 | 円形 | 0.27 | 0.23 | | P89 | I-12 | 円形 | 0.29 | 0.15 | |
| P76 | I-12 | 円形 | 0.23 | 0.3 | | P90 | L-13 | 円形 | 0.51 | 0.21 | |
| P77 | I-12 | 円形 | 0.32 | 0.15 | | P91 | H-6 | 円形 | 0.52 | 0.07 | |
| P78 | I-12 | 円形 | 0.27 | 0.2 | | P92 | H-1-6 | 不整円形 | 0.35×0.3 | 0.09 | |
| P79 | I-12 | 円形 | 0.22 | 0.18 | | P93 | I-6 | 不整円形 | 0.33 | 0.27 | |
| P80 | I-12 | 円形 | 0.3 | 0.13 | | P97 | F-3 | 梢円形 | 0.43×0.31 | 0.28 | |
| P81 | I-12 | 円形 | 0.24 | 0.25 | | P98 | K-10 | 梢円形 | 0.26×0.19 | 0.29 | SK-34内 |

29基のピットの詳細は表13に記した。P-40は2層を確認した。1層：黒褐色土ローム粒子（～0.1cm）・ロームブロック（～2.0cm）少。しまりややあり、粘性あり、2層：暗褐色土ローム粒子（～0.2cm）やや多、IP粒子若干。しまりややなし、粘性あり。



第37図 ピット実測図

第4節 性格不明遺構

1. 調査の概要

円形周溝遺構2基、「コ」字状周溝遺構1基を確認した。円形周溝遺構については、古墳時代の円形周溝墓であるか、住居跡に付随した建物施設であるのかを明確にし得ず、性格不明遺構とした。「コ」字状周溝遺構については、周辺に位置するピットと併せて記載した。「コ」字状周溝遺構周辺が、調査区内の遺構単独分布域であることを重ねて付記する。

2. 円形周溝遺構

第12号円形周溝遺構・SX-12（第38図・図版六）

位置 L-14グリッドに位置する。

重複 SX-13と重複し、本遺構が後出する。

規模 推定直径4.9m・幅0.5～0.6m・確認面からの深さ約0.12m。

形状 東半部欠く半円状の周溝遺構であるが、遺構確認面がローム漸移層下層であり、覆土が浅いことから、本来は円形であったと推定される。底面には小さな凹凸は見られるが概ね平坦である。

覆土 2層を確認し、自然堆積と判断される。覆土は均一に堆積したものと判断できる。

出土遺物 確認されなかった。

第13号円形周溝遺構・SX-13（第38図・図版六）

位置 L-13・14グリッドに位置する。

重複 SX-12と重複し、本遺構が先行する。

規模 推定直径4.9m・幅0.5~0.73m・確認面からの深さ約0.08m。

形状 南西半部欠く不整な半円状であるが、欠失部へ向けて覆土の堆積が薄くなることから、本来は円形であったと推定される。底面には小さな凹凸は見られるが概ね平坦である。南西部に径0.3m弱・底面からの深さ0.04m程度のピット状の掘り込みを確認した。

覆土 1層のみの確認であるが、覆土は均一に堆積したと推測できる。

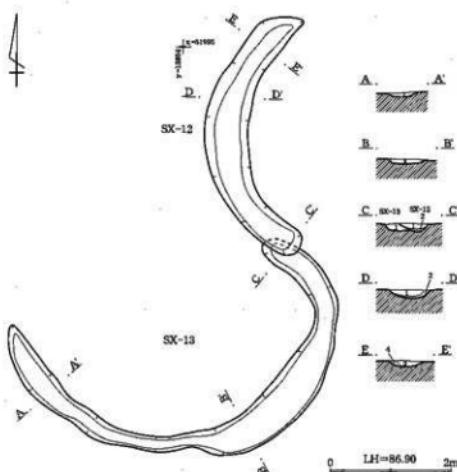
出土遺物 確認されなかった。

第14号円形周溝遺構・SX-14（第39図・図版六）

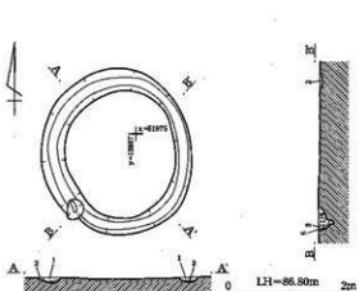
位置 L-12グリッドに位置する。南約7.0mにSX-15が接する。

重複 重複する遺構はない。

規模 直径2.6~2.7m・幅0.26~0.42m・確認面からの深さ約0.08m。

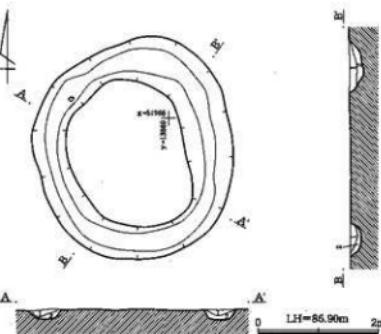


第38図 第12号・第13号円形周溝遺構実測図

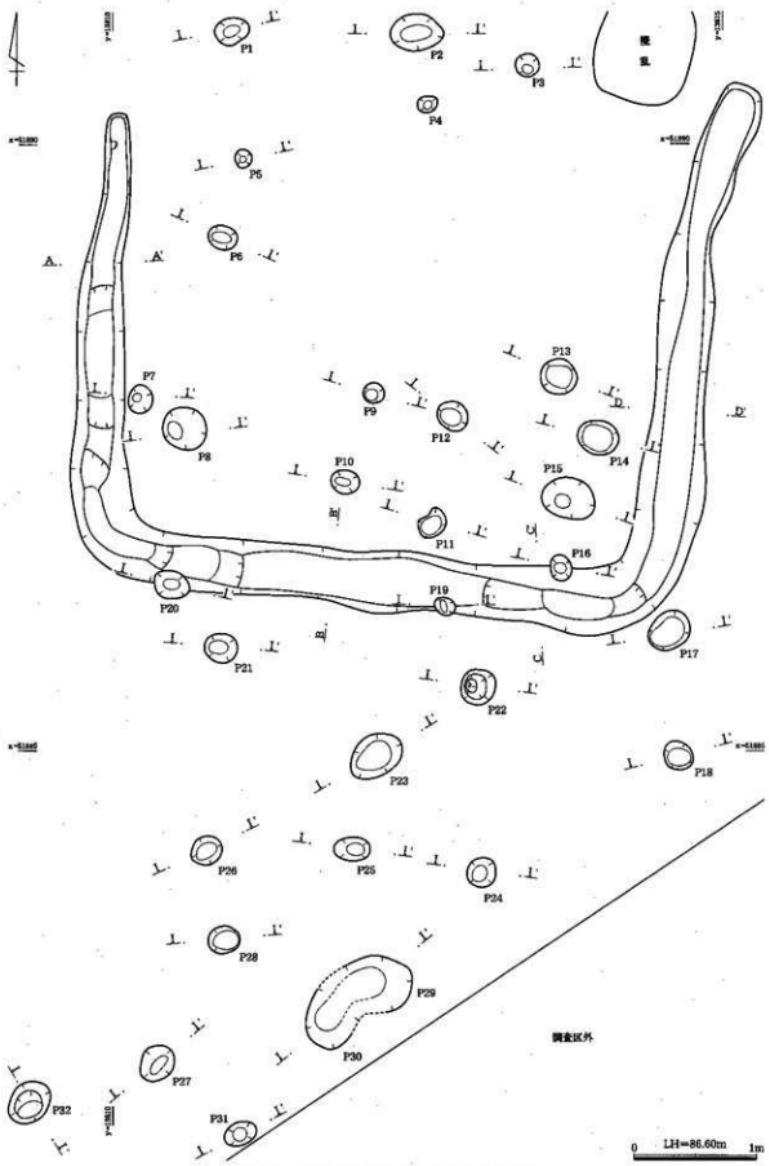


- 1 黒褐色土 ローム粒子（～0.1cm）若干。しまりややあり。粘性あり。
- 2 黒褐色土 ローム粒子（～0.1cm）やや多。ロームブロック（～0.5cm）少。
- 3 鹿鳴色土 ローム粒子（～0.1cm）しまりややあり。粘性あり。
- 4 鹿鳴色土 ローム粒子（～0.1cm）しまりややあり。粘性あり。
- 5 高色土 ローム粒子、ロームブロック主体。しまり・粘性あり。

第39図 第14号円形周溝遺構実測図



第40図 第15号円形周溝遺構実測図



第41図 第61号「コ」字状周溝造構実測図

形状 ドーナツ状で、底面は概ね平坦である。南西部に径約0.3m・底面からの深さ約0.20mのピット状の掘り込みを確認した。

覆土 自然堆積で、覆土は均一に堆積したものと推測できる。南西部のピットは柱穴か。

出土遺物 確認されなかった。

第15号円形周溝遺構・SX-15（第40図・図版六）

位置 L-11グリッドに位置する。北約7.0mにSX-14が近接する。

遺構 重複する遺構はない。

規模 直径3.3~3.7m・幅0.5~0.9m・確認面からの深さ約0.20m。

形状 不整なドーナツ状で、底面は概ね平坦である。

覆土 自然堆積で、覆土は均一に堆積したものと推測できる。

出土遺物 北西部の覆土上層から破碎した安山岩片が出土した。

第61号「コ」字状周溝遺構・SX-61（第41~42図・図版六）

位置 F-3, G-3・4グリッドに位置する。周辺には確認得ただけで32基のピットが存在する。

重複 周辺ピットP16・19・20と重複する。P16とは本遺構が先行する。

規模 南約4.7m・東辺約4.5・西辺約3.6m。溝幅は、東辺北端部0.34m、西辺北端部0.18mである以外は0.35m前後である。確認面からの深さは、東・西辺北半で約0.05m前後、南辺中央で約0.1mである。N-8° - E。

形状 北側を欠する。擾乱が著しく明確ではないが、東西片の北端部に立ち上がりは緩めで、周溝は方形状であった可能性は否定できない。南東隅部・南西隅部・西辺の3箇所は方形状に深く掘り込まれる。南西隅部の掘り込みは南東隅で2段となる。浅い掘り込みの底面レベルは南東隅部の掘り込みの底面レベルと一致する。西辺の掘り込みに向かい合う東辺の底面は、東辺北半の底面より10cmほど窪んでおり、掘り込みとしての視覚的な認識は薄いが、同一意識下での所産である可能性を指摘できる。即ち、東・西辺とも、隅部の掘り込みが間断なく東西辺の中央付近に延びる、同様の形状となる。

覆土 1~2層を確認した。自然堆積と判断される。

出土遺物 確認されなかった。

第61号「コ」字状周溝遺構周辺ピット・SX-61周辺ピット（第41, 43図・図版六）

位置 G-3・4グリッドに位置する。確認得ただけで32基のピットが存在する。しかし、遺構北半（P13から北部分）は耕作による帶状の擾乱が著しく、遺構が失われた可能性は高い。

重複 P16・19・20がSX-61と重複する。P16とSX-61とではP4が先行する。

規模 径・深さは表14に記した。

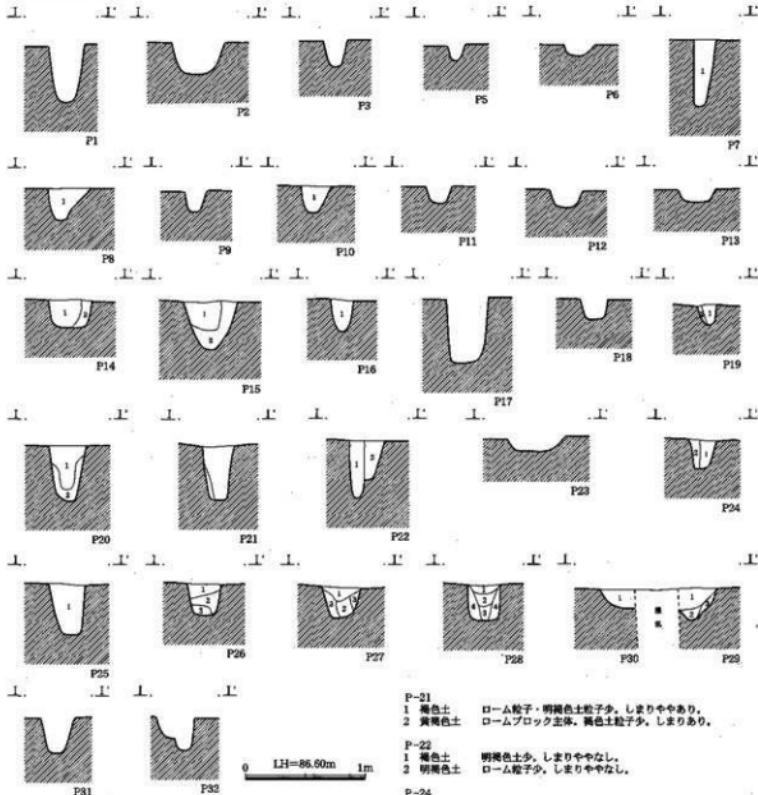
形状 土層の堆積状況からP14・19・20・22・24・27・28は柱穴と判断した。



- | | | | |
|--------|-------------------------|--------|-------------------|
| 1 棕色土 | ローム粒子少、時褐色土ブロック。しまりややり。 | 4 棕色土 | 暗褐色土ブロック少、しまりややり。 |
| 2 棕色土 | 暗褐色土質。しまりなし。 | 5 棕褐色土 | ローム粒子や多。しまりややなし。 |
| 3 明褐色土 | ローム粒子や多。しまりややり。 | 6 棕色土 | ローム粒子や多。しまりややなし。 |

第42図 第61号「コ」字状周溝遺構土層堆積図

第3章 赤曾川遺跡



P-7
1 黄褐色土 ローム粒子多、ロームブロック少。しまりややなし。

P-8
1 明褐色土 ローム粒子少、黒褐色土粒子多。しまりややあり。

P-10
1 明褐色土 ローム粒子少。しまりあり。

P-14
1 明褐色土 ローム粒子・明褐色土粒子多。しまりあり。

2 黄褐色土 ローム粒子多。しまり・粘性あり。

P-15
1 明褐色土 ローム粒子多。しまりややあり。
2 黄褐色土 ロームブロック主体。

P-16
1 黄褐色土 ローム粒子少、明褐色土。しまりあり。

P-19
1 黄褐色土 ローム粒子少。しまりなし。

2 黄褐色土 ローム粒子多。しまりややなし。

P-20
1 黄褐色土 ローム粒子若干、明褐色土粒子多。しまりあり。

2 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック多。しまりあり。

P-21
1 黄褐色土 ローム粒子・明褐色土粒子少。しまりややあり。
2 黄褐色土 ロームブロック主体。黄褐色土粒子少。しまりあり。

P-22
1 黄褐色土 明褐色土少。しまりややなし。
2 黄褐色土 ローム粒子少。しまりややなし。

P-24
1 黄褐色土 明褐色土少。しまりややなし。(柱状)
2 黄褐色土 ローム粒子少。しまりややなし。

P-25
1 黄褐色土 ローム粒子多。しまりなし。

P-26
1 黄褐色土 ローム粒子。しまり強。粘性あり。

2 明褐色土 ローム粒子多。しまりやや多。しまり強。粘性あり。

3 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロックや多。しまり強。粘性あり。

P-27
1 明褐色土 ローム粒子・ロームブロック。しまり・粘性あり。

2 明褐色土 ローム粒子や多。しまりややなし。粘性あり。

3 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロックや多。しまり・粘性あり。

P-28
1 黄褐色土 ローム粒子。しまり強。粘性あり。

2 明褐色土 ローム粒子・ロームブロック。しまり・粘性あり。

3 明褐色土 ローム粒子・ロームブロック主体。しまりやや弱。粘性あり。

P-29
1 明褐色土 ローム粒子多。しまり・粘性あり。

2 明褐色土 ローム粒子・ロームブロック。しまり・粘性あり。

3 明褐色土 ローム粒子・ロームブロック主体。しまりやや弱。粘性あり。

P-30
1 明褐色土 ローム粒子・ロームブロック少。しまり強。粘性あり。

第43図 第61号「コ」字状周溝遺構周辺ピット土層堆積図

配置 32基のピットは、「コ」字状周溝遺構の東辺・西辺を各々に伸ばしたラインの間に位置する。また、配置によって、SX-61周溝内（P 1～P 15）・南辺付近（P 16～23）・SX-61南側（P 24～32）に3大別できる。SX-61周溝内のピットについては擾乱域を含むことになるが、P 1・8・15・擾乱を結ぶライン、SX-61南側のP 24～27を結ぶラインを方形状に繋ぐことが可能である。南辺付近のピットについては、P 19～20・P 21～22が周溝内の掘り込みの立ち上がり部分に対応することを指摘できる。

出土遺物 確認されなかった。

表14 第61号「コ」字状周溝遺構周辺ピット計測表

| No | 規模 | 深さ | 特記事項 | No | 規模 | 深さ | 特記事項 | No | 規模 | 深さ | 特記事項 |
|------|-----------|------|------|------|-----------|------|------|------|-----------|------|------|
| p 1 | 0.30×0.24 | 0.54 | | p 12 | 0.27×0.24 | 0.14 | | p 23 | 0.48×0.32 | 0.12 | |
| p 2 | 0.43×0.31 | 0.24 | | p 13 | 0.30 | 0.10 | | p 24 | 0.24 | 0.28 | 柱穴 |
| p 3 | 0.18 | 0.23 | | p 14 | 0.34×0.28 | 0.20 | 柱穴 | p 25 | 0.30×0.18 | 0.41 | |
| p 4 | 0.16 | — | | p 15 | 0.45×0.35 | 0.51 | | p 26 | 0.25 | 0.25 | 柱穴 |
| p 5 | 0.12 | 0.13 | | p 16 | 0.19 | 0.23 | | p 27 | 0.30×0.26 | 0.26 | 柱穴 |
| p 6 | 0.25×0.19 | 0.09 | | p 17 | 0.38×0.3 | 0.57 | | p 28 | 0.25 | — | |
| p 7 | 0.23×0.20 | 0.60 | | p 18 | 0.22 | 0.16 | | p 29 | 0.45 | 0.17 | |
| p 8 | 0.35 | 0.25 | | p 19 | 0.16×0.13 | 0.19 | 柱穴 | p 30 | 0.40 | 0.17 | |
| p 9 | 0.17 | 0.17 | | p 20 | 0.30×0.23 | 0.41 | 柱穴 | p 31 | 0.26×0.18 | 0.30 | |
| p 10 | 0.23×0.19 | 0.23 | | p 21 | 0.25 | 0.45 | | p 32 | 0.38×0.30 | 0.27 | |
| p 11 | 0.26×0.18 | 0.14 | | p 22 | 0.30 | 0.48 | 柱穴 | | | | |

第5節 その他の遺物

遺構外出土及び出土遺構と大きく時期を違える遺物は、旧石器時代～近世まで約70点ある。以下、時期ごとに概略を記す。

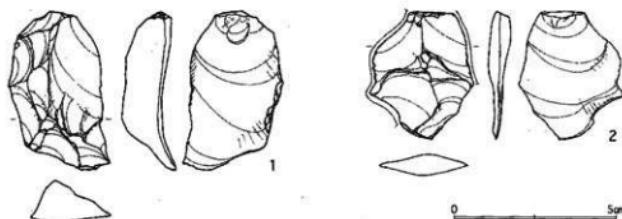
1. 旧石器時代（第44図・図版九）

台地端部に近い調査区南西端部のローム面から剥片3片が出土した。

No 1は縦長剥片で、両側線の一部に調整剥離が認められる。

No 2は縦長剥片で、両側線に使用痕が見られる。

図示し得なかつた剥片は石英系の小片である。



第44図 その他の出土遺物実測図（旧石器時代）

2. 繩文時代 (第45図・図版九)

土器・石器など10点が出土した。図示した以外は、土器4片・石鏃1点である。土器片のうち2片は、LRの地縄文に細い半截竹管で文様を施す。1片はLRの地縄文に隆起を貼り付け、両脇を半截竹管状の工具でナデる。何れも胎土に金雲母を含み、阿玉台Ⅲ～Ⅳ式と考えられる。1片はNo.1同様の小片である。

No.1は阿玉台I b式以降の所産か。

No.2は加曾利E I式か。

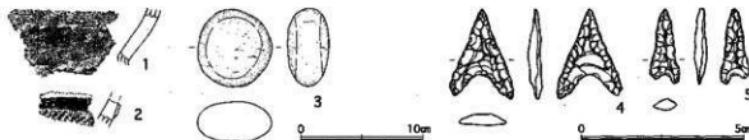
No.3は平面は円形で、縦断面・横断面とも梢円形。摩滅・敲打痕。

No.4は縛身は二等辺三角形で、基部平面は深く抉られる。周縁は連続剥離によって調整される。

No.5は縛身が棒状で、基部平面は深く抉られる。周縁は連続剥離によって調整される。石質はチャート。

表15 その他の出土遺物（旧石器時代）観察表

| 番号 | 器種 | 石質 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重量 | 単位: cm.g |
|----|----|------|------|------|------|-------|------------|
| | | | | | | | 特記 |
| 1 | 剥片 | 珪質頁岩 | 4.90 | 3.00 | 1.30 | 17.08 | 連続確認面積査中出土 |
| 2 | 剥片 | 珪質頁岩 | 3.90 | 3.25 | 0.70 | 5.02 | 連続確認面積査中出土 |



第45図 その他の出土遺物実測図（縄文時代）

表16 その他の出土遺物（縄文時代土器）観察表

| 番号 | 寸法 | 特徴 | 色調 | 胎土 焼成 | 出土状況 (注記) 残存状況 | |
|------------------|----|------------------------|--|---------------------------------|----------------------|---------------------------------|
| | | | | | 内: 10YR6/4 純い黄橙 | 粗 金雲母 白微砂粒 白粗砂粒 白雲母 |
| 1 厚: 1.1 縄文土器 | | 無文 | 外: 10YR6/3 純い黄橙 | | 白微砂粒 白粗砂粒 白雲母 | 破片 |
| 2 厚: 1.2 縄文土器 | | 地縄文を施した後沈幕を浴わせた巻帯を貼付する | 内: 10YR4/1 純灰 外: 10YR6/2 灰黃褐色 | 粗 金雲母 白微砂粒 白粗砂粒 白雲母 | 白微砂粒 白粗砂粒 白雲母 | 破片 |

表17 その他出土遺物（縄文時代石器）観察表

| 番号 | 種別 | 寸法 | | | | 残存度 | 石質 | 特記 | 単位: cm.g |
|------|----|-----|-----|------|--------|-----|-------|-------------------------|----------|
| | | 最大長 | 最大幅 | 最大厚 | 重量 | | | | |
| 3 砕石 | | 6.4 | 6.1 | 3.3 | 179.61 | 完形 | 輝石安山岩 | 平面は円形で縦・横断面とも梢円形。摩滅・敲打痕 | |
| 4 石鏃 | | 2.7 | 2.0 | 0.4 | 1.21 | 一部欠 | 形質頁岩 | 基部の両端を欠損 | |
| 5 石鏃 | | 2.3 | 0.9 | 0.35 | 0.55 | 一部欠 | チャート | 縛身先端及び基部片側端部欠損 | |



第46図 その他の出土遺物実測図（平安時代）

3. 古墳時代

1片のみが出土した。土師器台付壺の小片で、体部はハケ目で仕上げられる。前期か。

4. 平安時代（第46図・図版九）

土師器・須恵器など70片弱が出土した。詳細不明な微細片が多い。

No 1は底部内外面にトチノ痕が見える。猿投産。

5. 近世（図版九）

陶器3片が出土した。1片は鉄釉の型打皿。1片は緑褐色の鉄釉の碗。1片は灰釉の型打皿（菊皿）で、見込みに文様が施されない。何れも18世紀後半～19世紀の瀬戸美濃系の陶器である。

6. 時期不明（第47図）

この他、詳細不明な遺物が数点出土する。

No 1は土鍤か。

No 2は瓦塔（堂）か。表面の半截竹管状工具によるナデ調整や、焼成・色調が瓦塔の屋蓋部表現に近似しており、瓦塔の破片の可能性が考えられる。この他、図示し得なかったが砥石が出土する。



第47図 その他の出土遺物実測図

表18 その他の出土遺物（平安時代）観察表

| 番号 器種 | 寸法 | 特徴 | 色調 | 胎土 焼成 | 出土状況 (注記) 残存状況 |
|----------------|----------------------------|--|--------------------------------|-------------------------------------|----------------------|
| 1 灰釉陶器 碗 | 口：一 底：[7.8] 高：(2.6) | 内：ロクロナデ 灰釉ハケ塗り（厚い） 外：ロクロナデ 底：回転ヘラ切りか→高台貼り付け 内外面にトチノ痕 | 内：2.5YR7/1 灰白 外：2.5YR7/1 灰白 | 緻密 黒微砂粒 白砂粒 黒粗砂粒 | 体・底一部 高台/4 |
| 2 土師器 甕 | 口：一 底：一 高：(4.2) | 内：ロヨコナデ 外：ロヨコナデ 粘土積上痕明瞭 摩滅・汚れ | 内：7.5YR5/4 外：7.5YR5/6 明赤 | やや粗 黒白微砂粒 透明ガラス質砂粒 | 口一部 |
| 3 土師器 甕 | 口：(21.4) 底：一 高：(8.8) | 内：ヘラナデ→ロヨコナデ 痕状剥離・劣化 外：ヘラナデ→ロヨコナデ 粘土付着 | 内：2.5YR5/6 外：2.5YR5/8 明赤 | やや粗 透明ガラス質砂粒 白砂粒 白粗砂粒 白・黒穢 | 口～体1/5 |

表19 その他の出土遺物観察表

| 番号 器種 | 寸法 | 特徴 | 色調 | 胎土 焼成 | 出土状況 (注記) 残存状況 |
|-----------------|------------------------------|--|--------------|--------------------------|----------------------|
| 1 土製品 | 長：9.7 最大径：2.0 重：13.72g | やや膨らんだ管状 長軸に貫通孔 表面はナデにより研磨 端部に剥離痕 繋ぎ目か | 2.5YR5/8 明赤褐 | やや緻密 白微砂粒 白砂粒 角閃石か | 完形 |
| 2 瓦塔 (堂)か | | 表：幅0.7cm・深さ0.3cmの半熟竹管状工具によるナデ 調整 裏：剥離 | 赤褐色 | 酸化焰焼成 やや硬質 | 破片 |

第4章 亀山北遺跡

第1節 遺構・遺物の概要

本調査区からは住居跡7軒・掘立柱建物跡1棟・方形竪穴1基・土坑・ピット13基を確認した。

1～5区の様相を概略すると、1区は江川を臨む台地西端部の傾斜地にあたり、江川側北東部と台地平坦面側の南西部とは約6度の角度がある。住居跡5軒・掘立柱建物跡1棟・土坑5基を確認した。2区は開田時の削平がローム上面にまで至り、遺構は失われていた。3区は台地の平坦面にあたり、住居跡2軒・陥穴状土坑1基・方形竪穴1基・土坑・ピット7基を確認したが、表土直下に遺構底面を確認するという状況から、開田時の削平により遺跡が大きく損なわれた可能性がある。4区・5区からの遺構・遺物の確認はない。

遺構の配置を見ると、1区に集中する傾向にあるが、1区SI-14、3区SI-01・02の状況から開田時の削平によって失われた遺構が存在する可能性は大きく、詳細を明確にし得ない。しかし、標高82.5mを超えての遺構の確認がないこと、4・5区に遺構・遺物の確認がないことから、1区を集落自体の北東端部、3区を集落の南西端部と理解し得る。

調査区内において確認された遺物は、収納ケース約20箱を数える。本報告書掲載の遺物总数は、土器（土器器等）・石器（剥片等）など約130点で、旧石器時代の石器を除き、概ね遺構の時期に相当する。

各時期の様相からは、旧石器時代より古墳時代までの連続とした流れを追尾できる。

旧石器時代は、ユニットなどの確認はないが、石器及び剥片が出土した。

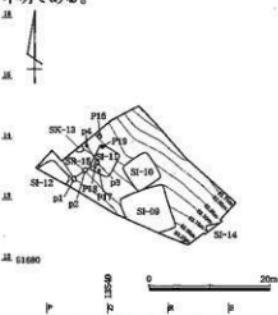
縄文時代は、該期の所産と判断される陥穴状土坑1基、若干の土器片を確認した。

弥生時代は遺構の確認はないが、若干

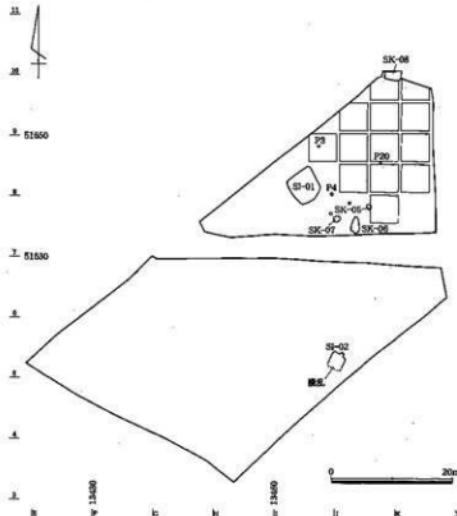
の土器片が出土した。

古墳時代は本調査区の主体をなす時期で、住居跡5軒・掘立柱建物跡1棟を確認した。調査区内から出土した土器片の大多数はこの時期にある。

この他、中世と判断される方形竪穴1基以外の住居跡・土坑については詳細は不明である。



第48図 遺構配置図（1区）



第49図 遺構配置図（3区）

第2節 旧石器時代

1. 調査の概要

3区からの表土除去・遺構精査に伴い数片の剥片の出土を確認したことと、前年に実施された真岡市教育委員会調査区域より多数の剥片の出土があったことから、3区の遺構調査終了後、ローム層の深掘りを行った。調査は3区北東部を中心に4m四方のグリッドを市松模様に設定し、遺物の出土状況を見て掘り下げグリッドを追加した。この結果、グリッド内から1~4・11の5点が出土した。このうち1・2は漸移層から3・4・11はハードローム下層～ブラックバンド上層において出土した。

2. 遺構と遺物（第51~52図・図版十、十四）

No 1は珪質頁岩製の縦長剥片で、打面部は意図的な折り取りが見られる。背面には上下三方向からの剥離が見られることから、上下両端に打面あると思われる。

No 2は珪質頁岩製の削器。上下両端は側縁の調整後に意図的に折り取ったか、欠損したと考えられる。

No 3は打面を得るための調整剥片と思われ、大半に標面が残る。周辺には部分的に調整が入る。珪質頁岩製。

No 4は珪質頁岩製の縦長剥片である。裏面は打痕が明瞭に認められる。下端部は切断される。

No 5は珪質頁岩製の横長薄片を利用したナイフ形石器である。二側縁には表裏面からプランディングを施す。

No 6は流紋岩製の縦長剥片で、左側側縁には微かに使用痕が認められる。

No 7は珪質頁岩製の縦長剥片で、下端部は欠損、或いは切断される。

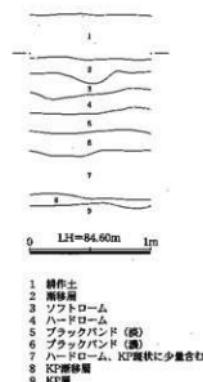
No 8は流紋岩製の剥片で、背面の一部に自然面を残す。

No 9はガラス質輝石安山岩製の大形の縦長剥片で、下端の一部に自然面を残す。

No 10はグリーンタフ製の剥片で、縫に二分割した痕跡がある。

No 11は流紋岩製の微細な縦長剥片である。背面・裏面は一方から大きな整形剥離が見られ、側縁部は自然面を残す。

これ以外に認示し得なかった剥片が5点ある。何れも縦長剥片で、石材は珪質頁岩1点、流紋岩2点、砂岩1点、ディサイト1点である。このうち断面が三角形状であるものは珪質頁岩の1点のみである。

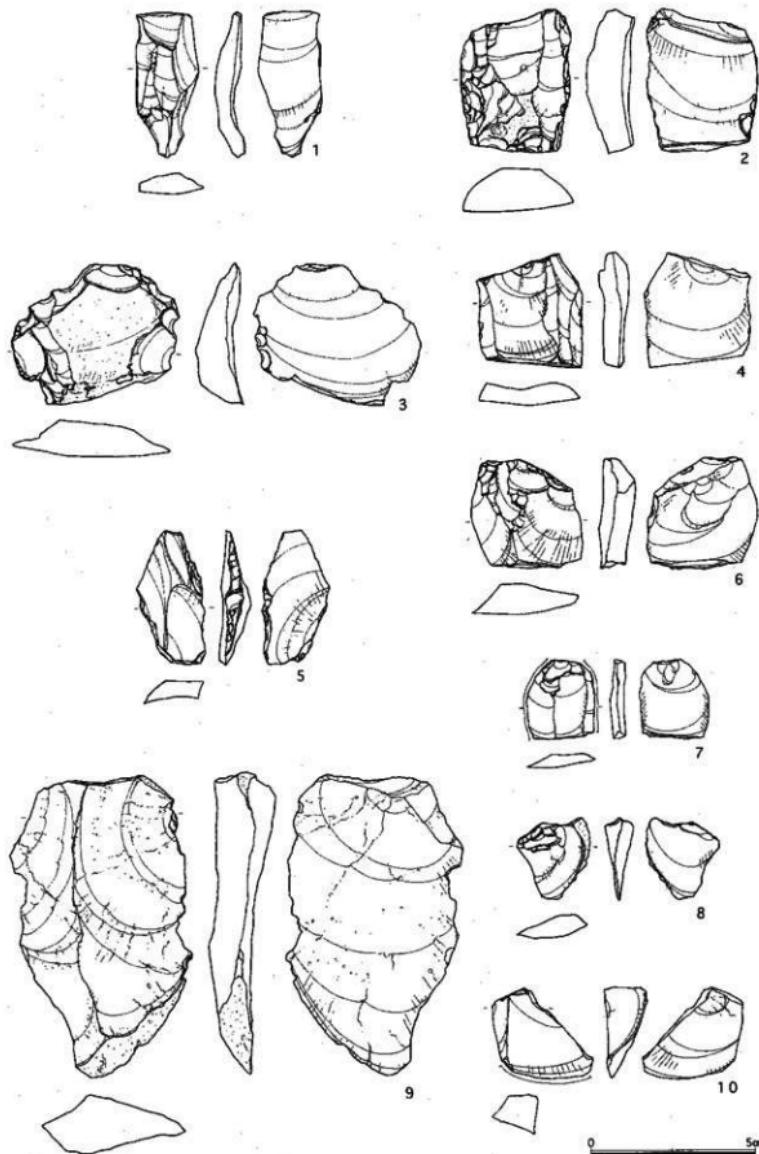


第50図 基本土層図

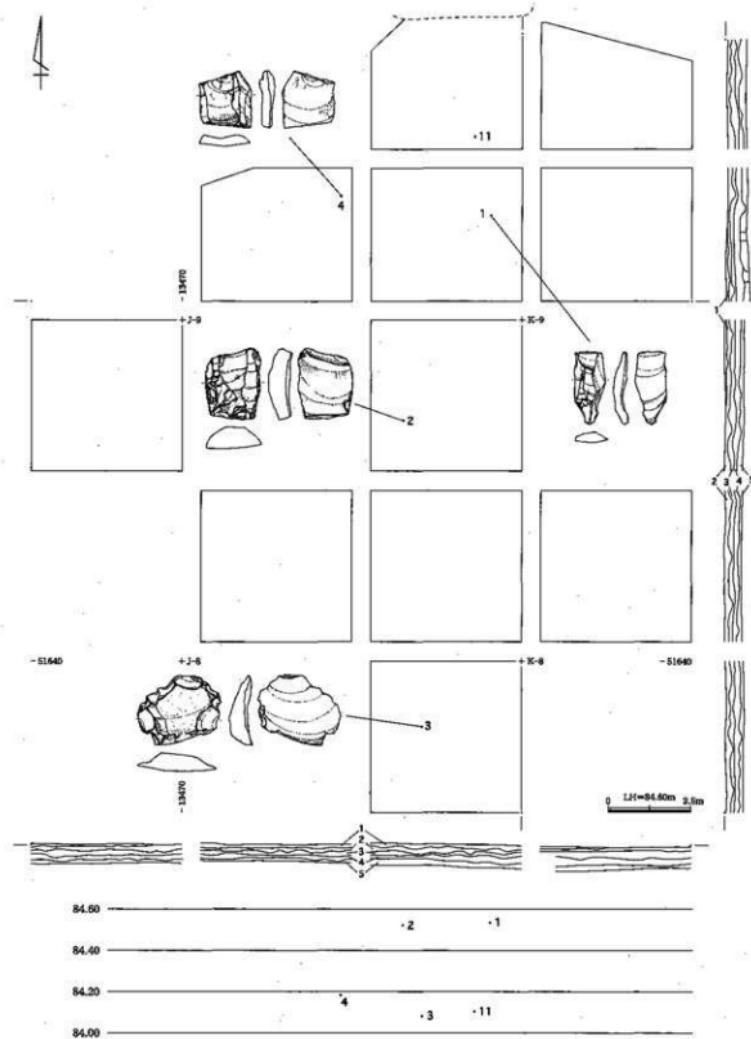
表20 旧石器時代石器観察表

単位: cm.g

| No. | 器種 | 出土位置 | 石質 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重量 |
|-----|--------|-------------|-----------|------|------|------|-------|
| 1 | 剥片 | 3区J-9南東グリッド | 珪質頁岩 | 4.40 | 1.90 | 0.70 | 5.55 |
| 2 | 剥片 | 3区J-8北東グリッド | 珪質頁岩 | 4.30 | 3.40 | 1.30 | 23.75 |
| 3 | 剥片 | 3区J-7北東グリッド | 珪質頁岩 | 4.30 | 5.00 | 1.05 | 22.11 |
| 4 | 剥片 | 3区J-9南西グリッド | 珪質頁岩 | 3.40 | 3.20 | 0.70 | 9.04 |
| 5 | ナイフ形石器 | 3区表土 | 珪質頁岩 | 4.10 | 3.40 | 0.80 | 5.48 |
| 6 | 剥片 | 1区SI-9覆土 | 流紋岩 | 3.30 | 2.00 | 0.90 | 12.30 |
| 7 | 剥片 | 1区SI-12覆土 | 珪質頁岩 | 2.40 | 2.10 | 0.40 | 2.26 |
| 8 | 剥片 | 1区SI-10覆土 | 流紋岩 | 2.50 | 2.20 | 0.85 | 2.84 |
| 9 | 剥片 | 3区表土 | ガラス質輝石安山岩 | 9.20 | 5.35 | 1.80 | 69.10 |
| 10 | 剥片 | 3区表土 | 変質流紋岩 | 2.70 | 2.80 | 1.30 | 6.62 |
| 11 | 剥片 | 3区J-8北東グリッド | 流紋岩 | 2.80 | 1.60 | 0.85 | 2.10 |



第51図 旧石器時代石器及び剥片実測図

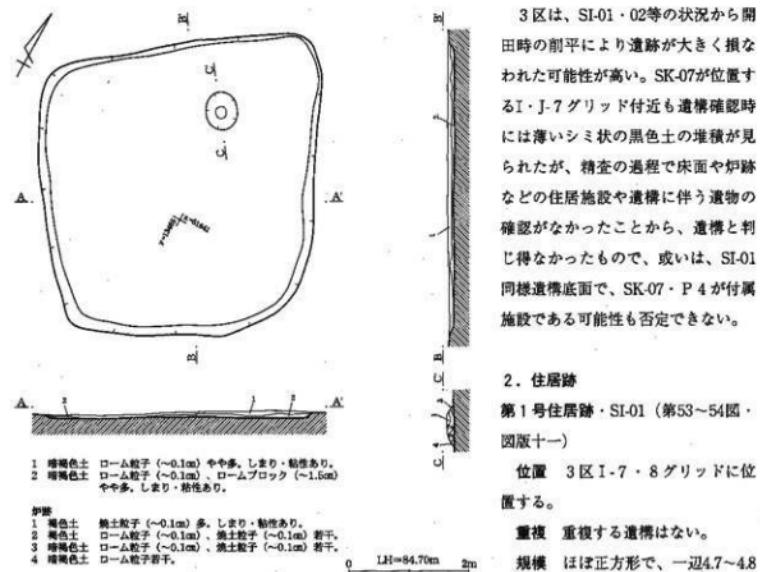


第52図 旧石器時代グリッド図

第3節 住居跡

1. 調査の概要

本調査区からは7軒の住居跡を確認した。このうちの5軒は1区に位置し、何れも古墳時代前期と判断される。床面からの遺物の出土は少なく、覆土中へ一括して混入したと判断できる出土状況を示す。



第53図 第1号住居跡実測図

3区は、SI-01・02等の状況から開田時の削平により遺跡が大きく損なわれた可能性が高い。SK-07が位置するI・J-7グリッド付近も遺構確認時には薄いシミ状の黒色土の堆積が見られたが、精査の過程で床面や炉跡などの住居施設や遺構に伴う遺物の確認がなかったことから、遺構と判じ得なかったもので、或いは、SI-01同様遺構底面で、SK-07・P4が付属施設である可能性も否定できない。

2. 住居跡

第1号住居跡 SI-01 (第53～54図・図版十一)

位置 3区 I-7・8グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 ほぼ正方形で、一边4.7～4.8m。遺構底面までの深さ約0.08m。



第54図 第1号住居跡出土遺物実測図

表21 第1号住居跡出土遺物観察表

| 番号 西暦 | 寸法 | 特徴 | 色調 | 胎土 焼成 | 出土状況 (性記) 残存状況 |
|----------------|--------------------------|---|---|---------------------------------|----------------------|
| 1 土師器 壺 | 口：— 高：— 高：— | 内：ナデ 外：横縞文の下に横文原体を山形か連弧状に押圧か 縦文及び壺内を赤彩 | 内：10YR7/3 黄い黄褐 外：10YR7/3 黄い黄褐 | 微密 微細粒・繊 粗破片 | 覆土 粗破片 |
| 2 土師器 器台 | 口：— 高：— 高：— | 内外面とも著しく摩滅 内：ヘラナデ→ヘラミガキ 外：ハケ→ヘラナデ→ヘラミガキ(下面は放射状) | 内：10YR6/6 黄い黄褐 外：10YR7/6 明黄褐 ～GYR6/6 混 | やや粗 微細粒～砂粒 石英 | 覆土 粗破片 |
| 3 土師器 高杯 | 口：— 高：18.4 高：(3.4) | 内：ヘラナデ→署ヨコナデ 外：ハケ→ヘラナデ→ヘラミガキ(タテ→ナナメ) 根暗ヨコナデ 透孔数不明 外面赤彩 | 内：2.5YR5/6 明赤褐 黒斑有り 外：2.5YR5/6 明赤褐 | やや緻密 微細粒～砂粒 石英・角閃石 赤色粒 | 覆土 脚1/5 |

主軸方向N-32°-W。開田時の削平により辛うじて住居床面を確認できる程度の残存状況である。北東辺・南東辺も失われている可能性が高い。

壁 床面より角度をもって立ち上がる。

周溝 確認されなかった。

仕切溝 確認されなかった。

柱穴 確認されなかった。

床面 概ね平坦と見られるが、硬化面等は認められない。

覆土 2層を確認した。1層下面を床面とし、2層は掘方の埋土の可能性がある。

貯蔵穴 確認されなかった。

その他の施設 確認されなかった。

火炉 炉を火炉とする。遺構の中央部と北隅の間に位置する。遺構の削平のため不明な点が多い。覆土は4層を確認した。炉床と断定できるような被熱面や焼土の堆積は認められないが、住居覆土の状況から判断して、1層下面を炉床とし、2~4層は掘方埋土である可能性も否定できない。

出土遺物 遺物は土師器40片弱が出土した。

No.1は縄の押圧によって連弧文風の文様を表出し、文様内に赤採を施す。No.2は雑な胎土・仕上げ。

図示した以外は、小型壺或いは壺と見られる破片1片、壺体部20片強、極めて器壁の薄い壺体破片10片である。器壁の薄い体部破片は何れも外面はハケ仕上げされるが、ヨコハケ・羽状となるものが各1片ある。本遺構の時期については、遺構確認時に既に床面付近が露出した状態であり、床面付近或いは貼床に位置した可能性が高く、No.2やヨコハケ・羽状の壺破片から1~2期と判断される。

第2号住居跡・SI-02 (第55図・図版十一)

位置 3区I・J-5グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 削平により南北部を欠する。北東辺約12m、床面までの深さ約0.07m。主軸方向はN-31°-E。

壁 若干の角度をもって立ち上がる。

周溝 確認されなかった。

仕切溝 確認されなかった。

柱穴 遺構内には確認されなかった。

床面 硬化面等は認められない。

覆土 自然堆積と判断される。

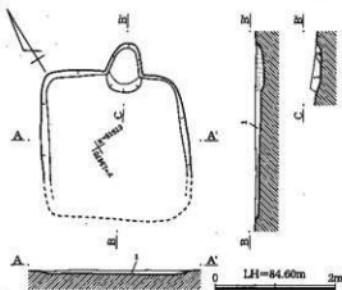
貯蔵穴 確認されなかった。

火炉 窯を火炉とする。北壁中央部に位置する。残存状況は極めて悪い。掘り込みは浅く、被熱面等は認められない。袖は欠しているが、壁面への付着土から山砂を少量含む構築土であったと推察される。

出土遺物 遺物の出土はない。

第9号住居跡・SI-09 (第56~58図・図版十一, 十四, 十五)

位置 1区Q-12・13グリッドに位置する。南隅部は調査区外にある。



1 黄色土 ローム粒子 (~0.1mm)、褐色粒子 (~0.1mm) 少し
しまりやあり。
2 黄色土 山砂・ローム粒子・黒土粒子少し。しまりやあり。

第55図 第2号住居跡実測図

重複 SI-10と重複し、本遺構が先行する。

規模 ほぼ正方形で、一辺約7.6~7.8m。確認面からの深さ約0.3~0.75m。主軸方向N-20°-E。

壁 床面より直立気味に立ち上がる。

周溝 調査区外で確認できない南隅部を除き全周する。幅14.0~23.0cm、床面からの深さ10.0cm程である。

仕切溝 南東辺の中央付近にある。長さ約1.1m・幅約0.25m。床面からの深さ約0.30m。覆土の状況から、2層：掘方覆土、1層：間仕切と判断される。第56図のトーン部分は1層の範囲を示したものである。

柱穴 壁柱穴を含め8基を確認した。各々の径・床面からの深さ（単位：m）はP1：0.26・0.73、P2：0.20前後・0.53、P3：0.35・0.62、P4：0.30・0.56、P5：0.30・0.09、P6：0.25・0.07、P7・P8：0.16・確認面からの深さ0.88である。P1~3は主柱穴と考えられる。調査区外に4本目の主柱穴が存在する可能性が高い。P1はロームの掘方面をもって柱穴とするが、P2・3は掘方面へ粘土が貼付される。エレベーション図に示した断面形の差異は粘土貼付の有無に起因するものとも考えられる。P3は粘土面に接して河原石の埋置が認められた。P4は形状・深さから本遺構に伴うものと判断される。また、P5・6についても、硬くしまった堆積土であることから本遺構に伴うビットである可能性が高い。P7・8は北東辺中央部の床面硬化面と対峙する位置に穿たれており、住居の主軸をなす柱穴と見られる。

床面 概ね平坦である。北東辺中央部から主柱穴を囲う範囲に硬化面が認められる。北東辺にのみ硬化面が続くことから、入口施設を想定して大過ないものと考えられる。

覆土 18層を確認した。3~18層が自然堆積した後2層が投棄された可能性が高い。

貯蔵穴 東隅に位置する。南東辺に添った長方形で、長軸約1.0m・短軸約0.7m・深さ0.05m前後の浅い掘り込みの中に、長軸約0.05m・短軸約0.04m・浅い掘り込み面からの深さ約0.5mの貯蔵穴がある。覆土は5層を確認した。5層は貯蔵穴に伴う矢板等の痕跡を想定できる。浅い掘り込みの覆土である2層の堆積時期については定かではないが、P3を意識した掘方であり、住居使用時には開口していた可能性が高い。

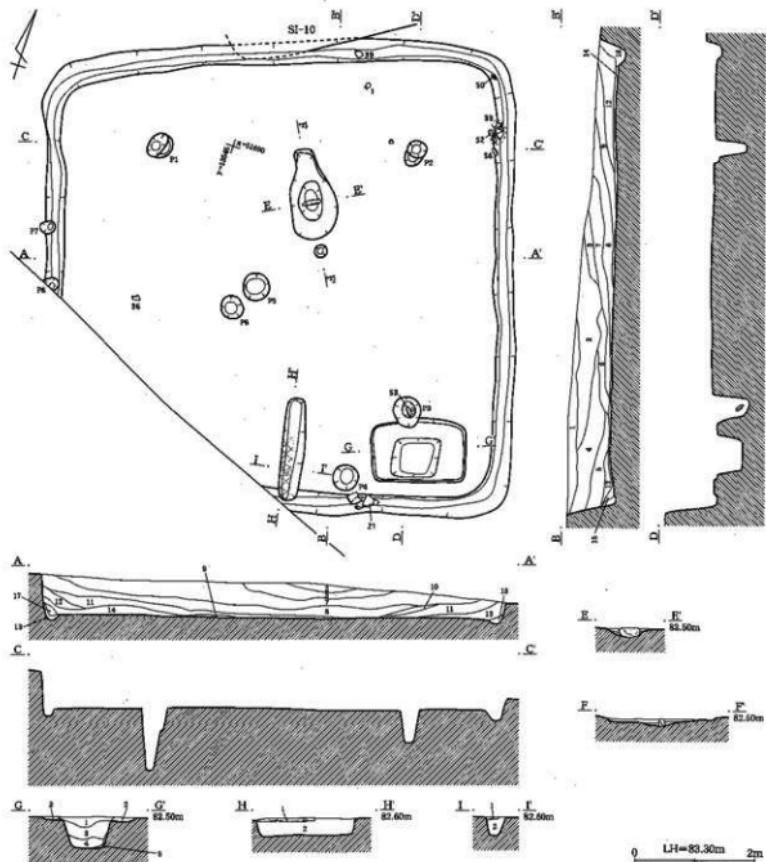
その他の施設 確認されなかった。

火坑 炉を火坑とする。住居中央部のP1・2寄りに位置する。長軸約1.5mのラケット形状の浅い掘り込みであるが、柄にあたる部分と炉石を伴う部分の2穴と見え、炉の据え替え等を考え得る。最終使用面は炉石側で、炉穴は被熱によりブロック状に硬化し、炉床付近には焼土（2層）が堆積する。炉床の中央部寄りに河原石が設置される。河原石は長さ35.0cm・幅約10.50cm・高さ約13.5cm・重さ約9.95kgの断面縦長の長方形の安山岩である。水平面を上に、2.0cm程の高さを残して埋置された状態で出土し、露出部分のみ色調が若干変化する。水平面と炉壁側の被熱は薄いが、北西半部に向いた側面部分は色調変化が大きく、炉床の形状に沿って煤状の付着物が認められる。このため、炉穴の北西半部が主な火床であったと考えられる。炉石下の底面は河原石の形状そのままに落ち込むが、被熱の痕跡は全く認められず、予め炉石を置いた状態で使用が開始されたものと考えられ、炉石には五徳の様な役割を推測できる。炉自体からは然程の使用頻度は窺えない。炉跡の北東側には焼土を充填した浅い落ち込みを確認した。炉跡からの遺物の出土はない。

出土遺物 図示した以外に土師器1800片弱が出土した。遺構に伴出する遺物は極めて少なく、第57、58図中の遺物についても、柱穴の根固石と見られるNo53以外は覆土下層からの出土である。多くは埋没過程における混入遺物であり、人為埋土と見られる2層に伴った出土が大多数を占める。

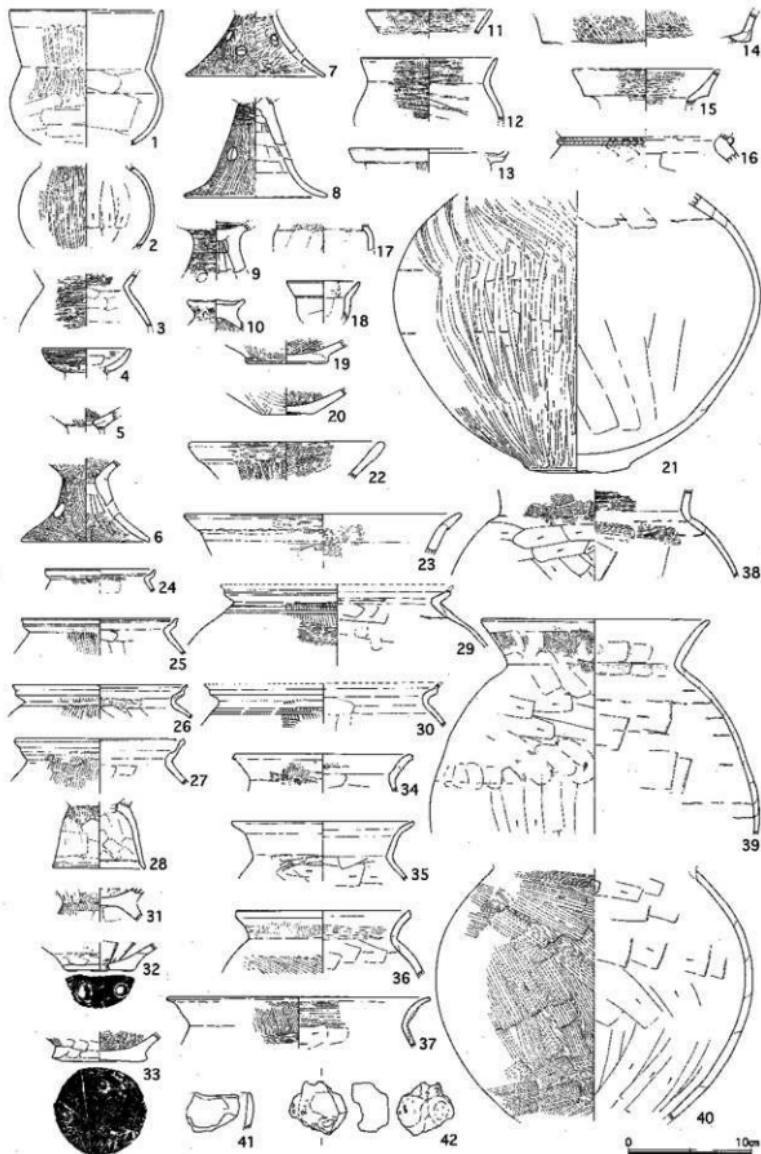
No1・21・36・39は覆土下層から出土した。No52付近からはNo39以外に小型壺2片・甕3片が出土し、甕のうち2片はハケが見える。No10は端部がつまみ上げられる。外面の細かいハケ状の痕跡は詳細不明である。

貯蔵穴 からはNo15・38の他に、壺10片・高杯3片・甕45片が出土した。壺は体部破片で4片は胎土が精製

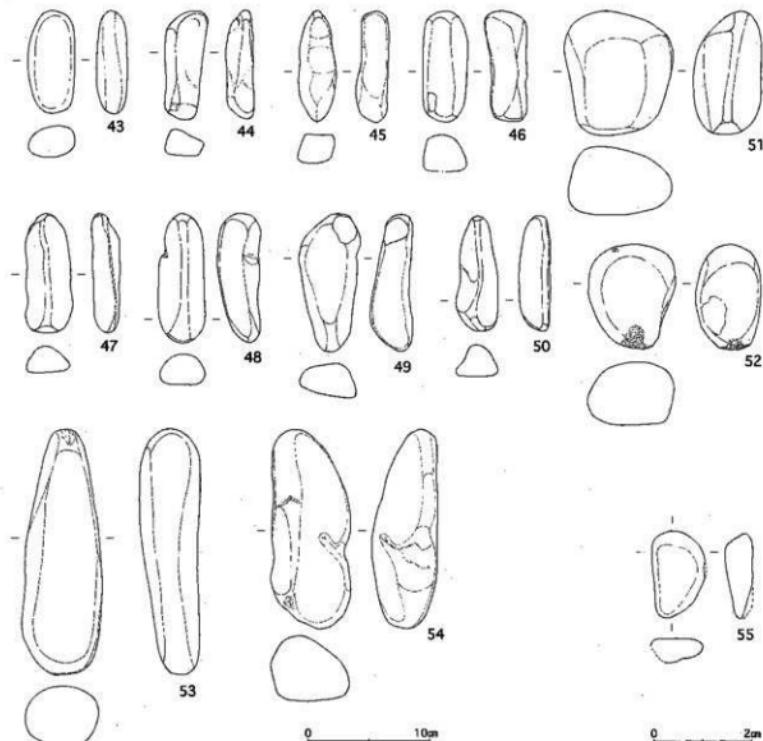


- 1 黒褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 稲。しまりあり。
2 増粘土土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 少、白色粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$)。
3 明褐色土 しまりやかな。
4 黄褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 多、ロームブロック少。しまりあり。
5 黄色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 少、SP粒子・炭化物粒子混。
6 明褐色土 しまりあり。
7 増粘土土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 多、KP粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 稲。
8 黑褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.2\text{cm}$) 少、白色粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$)。
9 黄褐色土 しまりあり。
10 増粘土土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 少、しまりあり。
11 黄色土 しまりあり。
12 増粘土土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 多、しまりあり。
13 黄色土 ローム粒子 ($\sim 0.2\text{cm}$) 少、炭化物粒子 ($\sim 0.2\text{cm}$) 若干、しまりあり。
- 14 黄色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$)、ロームブロック少。しまりあり。
15 増粘土土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 少、KP粒子・炭化物粒子混。
16 明褐色土 ロームブロック ($\sim 3.0\text{cm}$) 粒子。しまりあり。
17 黄色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 少、KPブロック少。しまりあり。
18 黄色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$)、しまりあり。
- 貯藏穴
1 黄色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 少、白色粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 稲。
2 増粘土土 しまりやかな。
3 黄褐色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$) 少、しまりあり。
4 增粘土土 ローム粒子 ($\sim 0.2\text{cm}$) 少、しまりやかな。
5 黄色土 ローム粒子 ($\sim 0.1\text{cm}$)、KP粒子 ($\sim 0.2\text{cm}$) 少、しまりあり。
KPブロック ($\sim 1.0\text{cm}$) 少、しまりやかなし。
- 開仕切り
1 増粘土土 ローム粒子帶。しまりなし。
2 增粘土土 ローム粒子、KP粒子多。しまりあり。
- 歩道
1 増粘土土 ローム粒子少、鐵土粒子やや多、炭化物粒子微。しまりなし。
2 增粘土土 鐵土主体。しまりあり。
3 増粘土土 ローム粒子少、炭化物粒子微。しまりなし。

第56図 第9号住居跡実測図



第57図 第9号住居跡出土遺物実測図(1)



第58図 第9号住居跡出土遺物実測図（2）

表22 第9号住居跡出土遺物観察表

| 番号 器種 | 寸法 | 特徴 | 色調 | 胎土 焼成 | 出土状況 (注記) 残存状況 |
|---------------|---------------------------|--|--|-------------------------------------|----------------------------|
| 1 土師器 壇 | 口:[12.6] 高:(11.0) | 内:ヘラナデ→ロヨコナデ 外:ヘラケズリ(ヨコ)→体上粗いヘラミガキ(タテ) 頭・ロヨコナデ・頭粗いヘラミガキ(タテ) 焦付着 | 内:2.5Y3/2 黒褐色 外:2.5Y2/1 黒 | やや致密 砂粒・粗砂粒 透明ガラス質粒 角閃石・長石 | No7 覆土下層 1/5 口1/8 |
| 2 土師器 壇 | 口:— 底:— 高:— | 内:ヘラケズリ(タテ)→ナデ(体下ヨコ・体上ヨコ) 外:ハケ(ヨコ)→ヘラミガキ(タテ) | 内:7.5YR6/4 純い黄橙 内:7.5YR6/4 純い黄橙 | 緻密 角閃石・赤色鉄 | 覆土 破片 |
| 3 土師器 壇 | 口:— 底:— 高:— | 内:頭～口ヘラナデ→ヘラミガキ(ヨコ) 体ヘラミガキ(ヨコ) 外:ヘラナデ→ヘラミガキ(ヨコ) | 内:5YR6/6 明赤褐 外:7.5YR6/6 棕 | 緻密 | 覆土 頭1/3 |
| 4 土師器 壇 | 口:[7.2] 底:— 高:(2.2) | 内:ロヨコナデ 坪ヘラナデ(ヨコ) 外:棒状工具で模様、一部波状 | 内:7.5YR6/6 棕 外:7.5YR7/6 棕 | 緻密 石英・角閃石 | 覆土 口1/4 |

| 番号 器種 | 寸法 | 特徴 | 色調 | 胎土 焼成 | 出土状況 (発見) 我存状況 |
|----------------|----------------------------|--|---|--------------------------------------|----------------------|
| 5 土師器 器台 | 口：一 底： 高：一 | 内：頸ナデ 器部ヘラミガキ 外：ヘラミガキ | 内：5YR5/8明赤褐 外：2.5YR5/8 明赤褐 | 緻密 粗砂粒 チャート 石英白色粒 | 覆土 破片 |
| 6 土師器 器台 | 口：一 底：[10.6] 高：(6.7) | 内：脚ハケ→上半ナデ(ヨコ) 器部ヘラミガキ(タテ) 外：ヘラミガキ(器部タチ 脚タチ 脚削斜め) 透孔3方向 | 内：10YR6/3 純い黄橙 外：10YR6/3純い黄橙 | 緻密 微細砂粒 透明ガラス質微砂粒 | 覆土 2/3 脚4/5 |
| 7 土師器 器台 | 底：[11.4] 高：(5.1) | 内：ナデ→粗ヘラミガキ(斜) 脚ハケ(ヨコ)→ヘラミガキ(ヨコ) 外：ハケ(タテ)→ヘラミガキ(タテ 脚斜め) 透孔上下2段3方向 | 内：5YR5/6明赤褐 外：5YR5/6明赤褐 | 緻密 透明ガラス質微砂粒 | 覆土貯蔵穴 1/4 腹1/2 |
| 8 土師器 高环 | 口：一 底：[11.7] 高：(7.8) | 内：脚上部ヘラケズリ(ヨコ)→下部ヘラナデ(ヨコ) 外：脚端ヨコナデ→ヘラミガキ(タテ) 頸ヨコ) | 内：10YR6/4 純い黄橙 外：10YR6/6 純い黄橙 | やや緻密 微砂粒 | 覆土 脚1/2 |
| 9 土師器 高环 | 口：一 底： 高：一 | 内：环ハケ→ケズリ→ヘラミガキ 脚ヘラケズリ 外：环ハケ→ヨコナデ→ヘラミガキ(ヨコ) 脚ハケ→ヨコナデ→ヘラミガキ(ヨコ) | 内：5YR5/6 明赤褐 外：5YR5/8明赤褐 | 緻密 白色粒 透明ガラス質粒子 | 覆土 体1/6 |
| 10 土師器 蓋 | つまみ：4.7 底： 高：一 | 内：つまみナデ 盖ヘラミガキ 外：つまみハケ(タテ) 盖ヘラナデ(タテ) | 内：7.5YR4/3 白 外：7.5YR2/2 稲穂 | 緻密 透明ガラス質粒子 角閃石 | 覆土 つまみ部全存 |
| 11 土師器 蓋 | 口：(10.2) 底： 高：(2.0) | 内：ハケ→ヘラミガキ(ヨコ) 外：ハケ(タテ)→ヘラミガキ(ヨコ) 頸ヨコ) | 内：5YR6/6 白 外：7.5YR6/6 棕 | 緻密 微細砂粒 | 覆土 口1/4 |
| 12 土師器 蓋 | 口：[11.0] 底： 高：(5.2) | 内：体ヘラナデ(ヨコ) 口ヘラミガキ(ヨコ) 外：ハケ(タテ)→ヘラミガキ(ヨコ) 体ヨコ) | 内：5YR5/6明赤褐 外：5YR5/6明赤褐 | 緻密 粗砂粒 チャート 長石 石英 透明ガラス質白色粒 | 覆土 口1/5 |
| 13 土師器 蓋 | 口：[13.0] 底： 高：(1.3) | 内：ハケ→ヨコナデ 口唇ヨコナデ 外：ヨコナデ 脊曲部ハケ(タテ) | 内：7.5YR6/6 棕 外：5YR6/8 白 | 緻密 白色粒子 | 唯一括 1/6 口1/4 |
| 14 土師器 蓋 | 口：一 底： 高：一 | 内：ナデ→ヘラミガキ(タテ→ヨコ) 外：ヘラミガキ(斜め) 二重口縁 | 内：2.5YR5/6明赤褐 外：2.5YR4/4 純い赤褐 | 緻密 微細砂粒 口縁部1/8 | 破片 |
| 15 土師器 蓋 | 口：[12.0] 底： 高：一 | 内：ヘラミガキ(ヨコ) 外：ヘラミガキ(ヨコ) | 内：10YR6/4 純い黄橙 外：2.5YR6/6 棕 | 緻密 ガラス質粒子 白色粒 | 貯蔵穴 口1/10 |
| 16 土師器 蓋 | 口：一 底： 高：一 | 内：ナデ(ヨコ) 外：ナデ | 内：7.5YR4/3 白 外：5YR5/6 明赤褐 | 緻密 透明ガラス質粒子 白色粒 | 覆土上層 口1/6 |
| 17 土師器 壺 | 口： 底： 高：一 | 内：体ヘラナデ→頸ヨコナデ 外：ハケ(タテ)→体ナデ 頭部突起に横巻伏工具(4本)で羽状に削突 | 内：10YR6/4 純い黄橙 外：7.5YR7/4 純い黄橙 | 緻密 微細粒 赤色粒 | 覆土 破片 口1/4 |
| 18 土師器 壺 | 口：[6.0] 底： 高：(3.2) | 内：ロハケ→ヨコナデ 体ナデ(ヨコ) 外：ハケ(タテ)→体ナデ | 内：10YR6/4 純い黄橙 外：7.5YR5/4 純い黃 | 緻密 石英 角閃石 透明ガラス質粒子 | 覆土一括 破片 口1/6 |
| 19 土師器 壺 | 底：[6.6] 高：(1.9) | 内：ヘラナデ→ヘラミガキ 外：ハケ(タテ) 底：接合時底部に粘土を巻き込む | 内：7.5YR3/3 暗褐 外：7.5YR5/4 純い褐 | 緻密 白色粒子 | 貯蔵穴 覆土 底1/3 |
| 20 土師器 壺 | 口：一 底：[3.9] 高：(2.1) | 内：ハケ 外：ナデ→ヘラミガキ 底：ナデ→ヘラミガキ | 内：7.5YR6/6 棕 外：7.5YR5/6 明褐 | やや緻密 微砂粒～纏 | 覆土 底3/4 |
| 21 土師器 壺 | 口：一 底： 高：(22.8) | 内：ヘラナデ(タテ) 刺織が著しい 外：体下半ヘラケズリ→ヘラミガキ(タテ) 肩部ヘラミガキ(斜め) 底ヘラミガキ 外面磨滅・剥離 | 内：10YR5/6 黄褐 外：10YR5/4 純い黄褐 | やや緻密 微砂粒～纏 透明ガラス質粒子 長石 白色粒 | No1覆土下層 体1/2 |
| 22 土師器 壺 | 口：[15.6] 底： 高：(3.0) | 内：ハケ(ヨコ)→ヘラミガキ 外：ロハケズリ→ヘラミガキ 頸ハケ(タテ)→ヘラミガキ(タテ) | 内：5YR5/6明赤褐 外：7.5YR5/6明赤褐 | 緻密 透明白ガラス質粒子 白色粒 赤色粒 | 覆土 破片 口1/7 |
| 23 土師器 壺 | 口：[22.6] 底： 高：(3.4) | 内：ハケ→ヨコナデ 外：ハケ→ロヨコナデ 頸ハケ 被熱 煙付着 摩滅 | 内：5YR6/6 棕 外：2.5YR6/6 棕 | 緻密 透明白ガラス質粒子 長石 白色粒 | 覆土 口1/10 |

| 番号 記録 | 寸法 | 特徴 | 色調 | 粘土 構成 | 出土状況 (往) 残存状況 |
|----------------|--------------------------------|---|---|--------------------------------|---------------------------|
| 24 土師器 甕 | 口: [9.0] 底: 一 高: (1.9) | 内: ロヨコナデ 顎ハケ (ヨコ) 体ナデ (ヨコ) 外: ロヨコナデ 体~頸ハケ (ヨコ→斜め) 「S」字状口縁 | 内: 7.5YR4/3 黄 外: 7.5YR4/3 黄 | やや緻密 白色粒 透明ガラス質粒子 | 覆土一括 口1/6 |
| 25 土師器 甕 | 口: [12.8] 底: 一 高: (3.0) | 内: 口・口唇ヨコナデ 顎・体ナデ 外: 口・口唇ヨコナデ 体ハケ (タテ) 「S」字状口縁 | 内: 7.5YR5/4 外: 7.5YR5/4 黄い場 | やや緻密 白色粒 透明ガラス質粒子 | 覆土 口1/8 |
| 26 土師器 甕 | 口: [14.2] 底: 一 高: (2.8) | 内: 頸ハケ→ロヨコナデ 体ヘラナデ 外: ハケ (タテ) →ロヨコナデ 「S」字状口縁 | 内: 5YR4/4 外: 5YR5/4 黄い赤褐色 | やや緻密 金雲母 白色粒 | 覆土 口1/8 |
| 27 土師器 甕 | 口: [13.8] 底: 一 高: (3.7) | 内: 体ヘラナデ→頸ヘラナデ→ロヨコナデ 外: 頸ハケ (タテ) →ロヨコナデ 体ハケ (タテ) 「S」字状口縁 | 内: 10YR6/4 外: 10YR7/3 黄い黄橙 外: 10YR7/3 黄い黄橙 | やや緻密 長石 白色粒 | 覆土 口1/8 |
| 28 土師器 甕 | 口: 一 底: [7.4] 高: (5.5) | 内: 頸部折り返し 繋かいナデ (斜め) 外: ハケ (タテ) →ナデ (ヨコ) 中央部ナデ (ヨコ) | 内: 5YR5/6 明赤褐 外: 10YR5/3 黄い黄褐 | やや粗 微細粒~纖 白色粒 | 覆土 台部1/5 |
| 29 土師器 甕 | 口: [19.0] 底: 一 高: 一 | 内: 頸ハケ→ロヨコナデ 体ナデ 指痕痕 外: ロヨコナデ、頸以下ハケ (タテ) →頸1条の沈線 →周ハケ (ヨコ) 「S」字状口縁 | 内: 10YR6/4 外: 10YR6/3 黄い黄橙 外: 10YR6/3 黄い黄橙 | やや緻密 微細粒~纖 石英 白色粒 金雲母 | 覆土 頭1/12 |
| 30 土師器 甕 | 口: [19.4] 底: 一 高: 一 | 内: ロヨコナデ 体ヘラナデ (タテ) →頸ナデ 外: 頸ハケ (タテ) →ロヨコナデ 頸体ハケ (タテ) →周ハケ (ヨコ) 「S」字状口縁 | 内: 10YR6/3 外: 10YR6/4 黄い黄橙 外: 10YR6/4 黄い黄橙 | やや緻密 石英 白色粒 | 覆土 頭1/12 |
| 31 土師器 甕 | 口: 一 底: 一 高: 一 | 内: 頸部ヘラナデ (放射状) 台部ヘラナデ 外: ハケ (タテ) 台部一部ナデ (ヨコ) | 内: 5YR6/4 外: 2.5Y5/3 黄い黄 角閃石 | やや緻密 白色粒 | 覆土 頭底部 |
| 32 土師器 甕 | 口: [5.6] 底: (2.3) 高: 一 | 内: ハケ→ヘラケズリ (ヨコ) 外: ハケ→ナデ 底周ナデ (ヨコ) 底: 外面ナデ→縫い軸土板貼り付け (推定4ヶ所) | 内: 10YR3/1 黒褐 外: 10YR3/1 黒褐 | やや緻密 ガラス質粒子 | 覆土一括 底1/2 |
| 33 土師器 甕 | 口: 一 底: 7.7 高: (3.4) | 内: ハケ (ヨコ) →底周ハケ (タテ) 外: 底周ナデ (ヨコ) 体ナデ (ヨコ) 半周ハケ (タテ) 底: 木乗底 (正面二底) | 内: 5YR5/6 明赤褐 外: 5YR4/4 黄い赤褐 | やや緻密 角閃石 白色粒 | 覆土一括 底全存 |
| 34 土師器 甕 | 口: [14.4] 底: 一 高: (3.15) | 内: ロヨコナデ 体ナデ (ヨコ) 外: ロヨコナデ→ハケ (タテ→斜) 口唇端面取り仕様へラケズリ→ナデ | 内: 5Y2/1 黑 外: 7.5YR4/3 黄 | やや緻密 透明ガラス質粒子 | 覆土 口1/6 |
| 35 土師器 甕 | 口: [14.8] 底: 一 高: (4.8) | 内: 頸部ヘラケズリ (ヨコ) →ロヨコナデ 外: ロヨコナデ→体ヘラナデ (タテ→ヨコ、斜) | 内: 10YR5/3 外: 2.5Y2/1 黑 | 緻密 角閃石 | 覆土一括 口1/6 |
| 36 土師器 甕 | 口: (14.2) 底: 一 高: (5.1) | 内: 頸ハケ (ヨコ) →頸ヨコナデ 体ナデ (ヨコ) 外: 口唇端ヨコナデ 口ハケ (タテ) →ヨコナデ 体ナデ (ヨコ) →ハケ (斜め) →頸ヨコナデ | 内: 10YR7/4 外: 10YR6/3 黄い黄褐 外: 10YR6/3 黄い黄褐 | やや緻密 角閃石 長石 赤色粒 | 覆土中層 No 4 口1/4 |
| 37 土師器 甕 | 口: [21.4] 底: 一 高: (4.1) | 内: ハケ (ヨコ) →頸ヨコナデ 体ナデ (ヨコ) 外: ハケ (口唇斜め→口頸 (タテ) →肩 (ヨコ)) | 内: 10YR3/2 黑褐 外: 2.5Y3/1 黑褐 | 緻密 透明ガラス質粒子 | 覆土 頭1/10 |
| 38 土師器 甕 | 口: 一 底: 一 高: 一 | 内: ロヨコナデ 体ナデ (ヨコ) →頸一部ハケ (ヨコ) 外: 頸ハケ、ナデ→口ハケ (タテ) 体ヘラケズリ (ヨコ 斜め) 二次焼成 | 内: 7.5YR5/3 外: 10YR6/4 黄い黄褐 内: 2.5Y5/4 外: 10YR6/4 黄褐 | 緻密 透明ガラス質粒子 白色粒 | 覆土 頭1/4 |
| 39 土師器 甕 | 口: [18.6] 底: 一 高: (17.4) | 内: 口下半ハケ (ヨコ) →ヘラナデ 口上ヨコナデ ・体ヘラナデ (ヨコ) 瓢上底明顯 外: 口・頸ハケ→口唇ヨコナデ、口一部ナデ (ヨコ) 頸ナデ→体ヘラケズリ (上ヨコ下タテ) →中ナデ 体ハケ 被熱による劣化が著しい | 内: 7.5Y5/4 外: 10YR6/4 黄褐 内: 2.5Y5/4 外: 10YR6/4 黄褐 | 緻密 微細砂粒~纖 角閃石 白色粒 | 覆土下層 No 6, No 9 1/3 |
| 40 土師器 甕 | 口: (14.2) 底: 一 高: (5.1) | 内: ヘラケズリ→体ヘラナデ (ヨコ) 中位疣状剥離 外: ハケ (斜下位→上位) → (斜→上・下ヨコ) 内外媒付着 | 内: 7.5YR3/3 明赤褐 外: 10YR6/3 外: 10YR2/2 黑褐 | 緻密 長石 白色粒 透明ガラス質粒子 | 覆土 |

される。高坏は後のある坏部2片・据1片で、胎土は精製される。壺内ハケ1片・外ハケ16片で、外ハケの2片の胎土は精製される。

覆土からは、図示した以外に堆140片弱・小型壺4片・高坏30片強・高坏或いは器台の脚部40片弱・「S」字壺30片弱・「S」字壺と見られる頸部20片弱・折り返し口縁13片(9個体分)・「く」字壺70片強・「く」字壺と見られる頸部40片弱・同肩部30片弱・壺体部510片強・器壁の薄い壺体部320片強・壺底部40片強・壺台部15片強が出土する。No 2・14・24・29・30・42などと共に2層に伴い出土したものが生体である。堆のうち、胎土の精製されたものは20片弱・赤彩されたものは8片ある。高坏のうち2片は後を持つ。高坏・器台の脚部の多くは透孔をもつ。坏部・脚部の接合部は3片あり何れも差し込み式である。14片ある脚部のうち端部がラッパ状に開くものは2個体分ある。「S」字壺と判断できる破片は、I-13片・I ab-1片・I a-4片・I b-1片・II-1片・II ab-1片・II a-1片・II b-3片・II c-1片である。折り返し口縁の粘土帯は~1.6cm 5片(3個体分)・~1.9cm 6片(5個体分)・~2.1cm 2片に細別できる。「く」字壺と判断できる破片のうち、80片弱は口縁端部・頸部形態の判別が可能で、1 i-0片・1 ii-4片・2 i-1片・2 ii-3片・3 i-2片・3 ii-2片・A-6片・B-2片・C-4片・i-16片・ii-37片である。内ハケは15片(13個体分)あり、1-1片・2-2片・3-3片・i-1片・ii-13片(11個体分)に細別できる。壺体部のうち外ハケは300片強を数える。器壁の薄い壺体部のうち、外ハケ210片強・内外ハケ3片で、a-1片・b-8片・c-9片に細別できる。底部は①-18片・②-12片・③-1片で、①のうち周縁へのドーナツ状の粘土貼り付けは2片ある。径5.0cm以下の底部は①-1

| 番号 器種 | 寸法 | 特徴 | 色調 | | 出土状況 (往記) 残存状況 |
|------------------|---------------------------------|---|-------------------------------|-------------|----------------------|
| 41 土師壺 壺 | 口: 一 底: 一 高: 一 | 内: ナデ 外: ハケ→ロナデ 手づくねか 口盤は水平でない | 内: 7.5YR4/3 黄 外: 2.5Y2/1 黒 | やや緻密 角閃石 | 覆土 破片 |
| 42 焼成形 鍛治跡 | タテ: 4.2 ヨコ: 4.4 重: 63.22g | 高: 2.5 小型の岸で破面は2面 沈は緻密で重量感がある 表面颗粒状突起有り | | | 覆土 |
| 43 石 | 長: 8.4 幅: 3.8 | 厚: 2.5 自然の河原石を利用 全面摩擦 | N6/ 灰 | 安山岩 | 覆土 |
| 44 石 | 長: 9.0 幅: 3.2 | 厚: 2.3 自然の河原石を利用 | 7.5Y7/1 灰白 | 石英斑岩 | 覆土 |
| 45 石 | 長: 9.1 幅: 3.0 | 厚: 2.4 自然の河原石を利用 | 10Y7/1 灰白 | 石英斑岩 | 覆土 |
| 46 石 | 長: 9.2 幅: 3.6 | 厚: 3.3 自然の河原石を利用 石材のためか磨滅目立つ 深面平坦 | 2.5GY6/1 オリーブ灰 | 石英斑岩 | 覆土 |
| 47 石 | 長: 9.8 幅: 3.9 | 厚: 2.6 自然の河原石を利用 | 5Y6/2 灰オリーブ | 石英斑岩 | 覆土 |
| 48 石 | 長: 10.7 幅: 3.9 | 厚: 3.7 自然の河原石を利用 重: 175.6g | 2.5Y7/4 浅黄 | 角閃石安山岩 | 覆土 |
| 49 石 | 長: 11.2 幅: 4.7 | 厚: 2.5 自然の河原石を利用 重: 219.3g | 10Y7/1 灰白 | 石英斑岩 | 覆土 |
| 50 石 | 長: 9.5 幅: 3.5 | 厚: 2.5 自然の河原石を利用 | 2.5GY6/1 オリーブ灰 | 砂岩 | NO8 |
| 51 石 | 長: 10.1 幅: 8.9 | 厚: 5.5 自然の河原石を利用 重: 726.0g | 2.5Y7/2 灰黄 | 輝石岩 | 覆土 |
| 52 石 | 長: 8.6 幅: 7.3 | 厚: 5.2 自然の河原石を利用 重: 405.7g | 7.5Y7/1 灰白 | 輝石安山岩 | NO6 |
| 53 石 | 長: 20.0 幅: 6.6 | 厚: 5.2 自然の河原石を利用 重: 946.3g | 10Y6/1 灰 | 輝石安山岩 | NO3 |
| 54 石 | 長: 15.7 幅: 6.4 | 厚: 5.2 自然の河原石を利用 重: 753.5g | 5Y7/2 灰白 | 石英斑岩 | 覆土 |
| 55 石 | 長: 1.7 幅: 1.1 | 厚: 0.5 自然の河原石を利用 重: 1.41g | 5Y7/1 灰白 | 泥狀岩 | 覆土 |

片・②-4片・③-5片ある。

甕については、出土位置・形状の如何に問わらず煮炊き用と判断できる。胎土に金雲母片を含む破片は何れも覆土中の出土で、堆-6片、脚部4片、「S」字甕I a b-1片・I b-2片・II a b-1片・I b-1片・微細片5片、「く」字甕体部ナデ6片・外ハケ5片、器壁の薄い甕体部外ハケ1片がある。

本遺構の時期を推定することは難しいが、遺構の形状・付属施設・覆土遺物から、2層堆積時期を3期として大過あるまい。

第10号住居跡 SI-10 (第59~60図・図版十二, 十五, 十六)

位置 1区Q-13グリッドに位置する。攪乱により南西辺の状況は明確ではない。

重複 SI-09と重複し、本遺構が後出する。

規模 ほぼ正方形で、一辺約5.1m・確認面からの深さ約0.2~0.54m。主軸方向N-31°W。

壁 直立気味に立ち上がる。

周溝 確認されなかった。

仕切溝 確認されなかった。

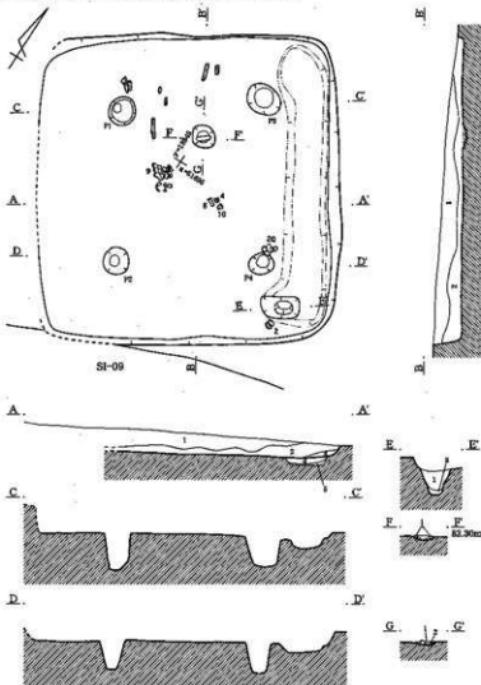
柱穴 主柱穴と見られる4本を確認した。各々の径・深さ(m)は、P 1: 0.45前後、P 2: 約0.43、P 3: 0.49~0.6、P 4: 0.38~0.42、P 1の底部は柱痕状に落ち込む。

床面 概ね平坦で、硬化面等は認められない。

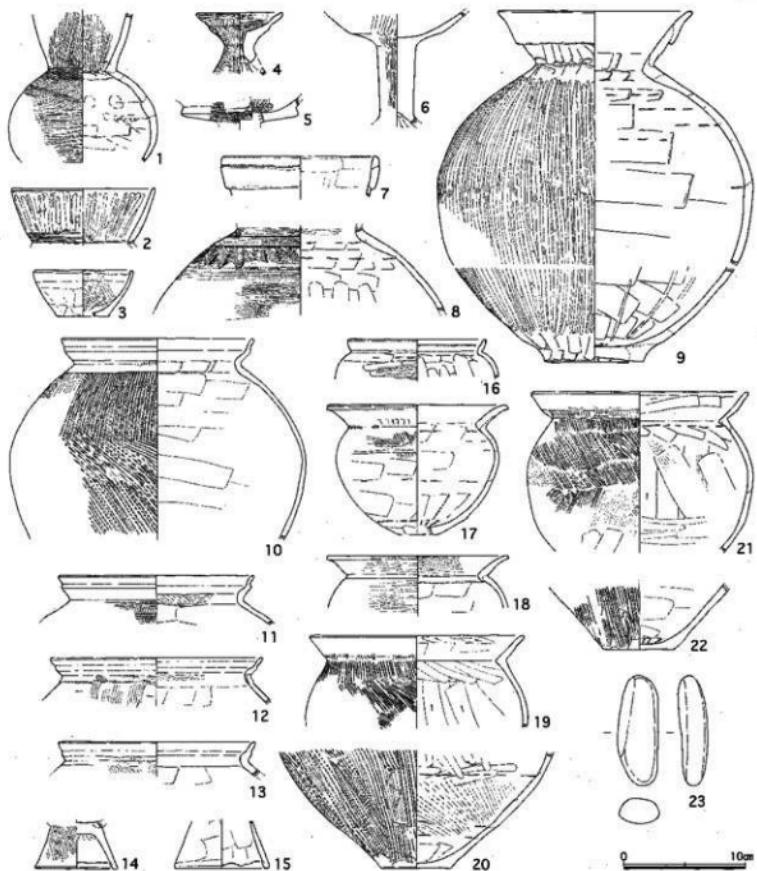
覆土 5層を確認した。1~3層は住居跡埋没土で自然堆積と判断される。4・5層は北東辺際の掘り込みに伴う埋土である。

貯蔵穴 南隅に位置する。南東辺に添った長方形で長軸約0.34m・短軸約0.25m、床面からの深さ約0.4m。覆土は2層で自然堆積と判断される。遺物の出土はない。

その他の施設 床面下に、北東辺に添う「[]」型状の掘り込みを確認した。幅0.40m前後・深さ約0.17m。貯蔵穴は掘り込みを埋め戻した後の開口と判断でき、居住時には床面として使用されたと考えられる。壁や



第59図 第10号住居跡実測図



第60図 第10号住居跡出土遺物実測図

表23 第10号住居跡出土遺物実測図

| 番号 器種 | 寸法 | 特徴 | 色調 | 胎土 構成 | 出土状況 (注記) 残存状況 |
|---------------|----------------------|--|--------------------------------|------------------------|----------------------|
| 1 土師器 壺 | 口：— 底：— 高：— | 内：体ヘラナデ 指痕底 頸ヘラナデ(ヨコ) 口ヨコナデ→ヘラミガキ(タテ) 横上底明瞭 外：ヘラミガキ(体ヨコタテ→頸ヨコ) | 内：2.5YR5/6 明赤褐 外：5YR5/6 明赤褐 | 緻密 微細砂粒～礫 角閃石 | 壤土 体1/4 |
| 2 土師器 壺 | 口：11.8 底：— 高：— | 内：ハケ(ヨコ)→ヨコナデ→ヘラミガキ(タテ) 外：ハケ(タテ)→ヨコナデ→ヘラミガキ(ヨコ→タテ) | 内：7.5Y5/6 明褐 外：7.5y5/6 明褐 | 中や緻密 微細砂粒～礫 白色砂粒 | No.6 塗土 口部全存 |

| 番号 器種 | 寸法 | 特徴 | 色調 | 胎土 焼成 | 出土状況 (記述) 残存状況 |
|----------------|----------------------------------|---|---|--------------------------------|-------------------------|
| 3 土師器 壺 | 口: [8.0] 底: [4.3] 高: 3.8 | 内: ハケ 口唇端内側に折り返し→ヨコナデ 外: 指で引き上げて整形→ナデ(ヨコ) ロヨコナデ | 内: 7.5YR8/6 棕 外: 10YR6/4 鈍い黄褐色 | やや緻密 微細砂粒~砂粒 石英 金雲母 | 裸土下層 全体1/5 |
| 4 土師器 壺 | 口: [7.0] 底: 一 高: (5.2) | 内: 縦部ヘラミガキ 脚へラケズリ 赤影 外: ヘラミガキ(タテ脚→器) 口唇段差部(ヨコ) 透3孔 赤影 | 内: 5YR4/4 鈍い赤褐 外: 5YR4/4 鈍い赤褐 | 緻密 赤色粒 | No.3 裸土 全体3/5 口全存 |
| 5 土師器 壺 | 口: 一 底: 一 高: 一 | 内: ハケヘラミガキ(ヨコ→タテ) 外: ハケ(タテ)→ヘラミガキ(ヨコ) | 内: 5YR4/6 明赤褐 外: 5YR5/6 明赤褐 | 緻密 白色粒 | 裸土 坪地部1/5 |
| 6 土師器 壺 | 口: 一 底: 一 高: 一 | 内: 外面部も摩滅、剝離が大きい 外: ヘラミガキ(放射状) 脚へラナデ(回転方向) ヘラミガキ(タテ脚→杯) | 内: 7.5YR6/4 鈍い褐 外: 10YR7/3 鈍い黄褐色 | やや緻密 微細砂粒~濃 白色粒 長石 | NO2 裸土 全体1/4 |
| 7 土師器 壺 | 口: [13.0] 底: 一 高: (3.3) | 粘土體を複数枚上げて折り返し口縫合に形成 内: ヨコナデ→ヘラナデ(ヨコ) 縫上痕明瞭 外: 粘土貼り合わせ→ヨコナデ | 内: 7.5YR5/4 鈍い褐 外: 7.5YR5/4 鈍い褐 | 緻密 透明ガラス質粒子 角閃石 | 裸土 口1/8 |
| 8 須恵器 壺 | 口: 一 底: 一 高: 一 | 内: 解上ヘラナデ(ヨコ) 体へラナデ(タテ)→ 頭へラミガキ(ヨコ) 縫上痕明瞭 外: 肩縫合 上→下(横→波次→横) 体へラミガキ(ヨコ) | 内: 10YR6/4 頭へラミガキ(ヨコ) 鈍い黄褐色 外: 10YR6/4 鈍い黄褐色 | 緻密 微細砂粒~粗砂粒 角閃石 | 裸土 肩破片 |
| 9 土師器 壺 | 口: 16.0 底: 8.3 高: [28.8] | 複合口縫 縫に縫合村(内外面で位置一致) 内: ハラマニロヨコナデ 底底へラミガキ、裏剥離 外: 体へラケズリ(タテ)→ヘラミガキ(タテ) 頭ナデ(タテ) ロヨコナデ 底: ハラケズリ | 内: 7.5YR6/6 棕 外: 7.5YR6/6 棕 | 緻密 金雲母 石英 白色粒 | 裸土下層 床面付近 直接合点無 |
| 10 土師器 壺 | 口: [15.6] 底: 一 高: (16.5) | 内: ヘラナデ(ヨコ) (体→脚) →ロヨコナデ 外: 体へラケズリ→ハケ(体下斜め→体上タテ) →頭: ロヨコナデ 「S」字状口縫 | 内: 5YR5/8 明赤褐 外: 5YR6/6 棕 | やや緻密 微細砂粒~濃 角閃石 | NO4 裸土 1月8日 口1/4 |
| 11 土師器 壺 | 口: [16.0] 底: 一 高: (4.2) | 内: ヘラケ→ロヨコナデ 体へラナデ(ヨコ) 外: 頭縫へケタ(タテ)→ロヨコナデ 「S」字状口縫 | 内: 10YR6/4 鈍い黄褐色 外: 7.5YR5/4 鈍い褐 | やや緻密 微細砂粒~濃 透明ガラス質粒子 | 裸土 口1/8 |
| 12 土師器 壺 | 口: [17.4] 底: 一 高: (3.5) | 内: ヘラ→ロヨコナデ 体へラナデ(ヨコ) 外: 頭縫へケタ(タテ)→ロヨコナデ 肩へラケズリ(ヨコ) →ハケ(タテ) 「S」字状口縫 | 内: 10YR6/4 鈍い黄褐色 外: 2.5Y6/4 鈍い黄 | 緻密 砂粒 棕 | 裸土 口1/8 |
| 13 土師器 壺 | 口: [16.2] 底: 一 高: (3.9) | 内: 体ナデ(ヨコ)→ロヨコナデ 外: 頭縫へケタ(タテ)→ロヨコナデ 「S」字状口縫 | 内: 10YR6/4 鈍い黄褐色 外: 10YR6/3 鈍い黄褐色 | やや緻密 透明ガラス質粒子 角閃石 | 裸土 口1/10 |
| 14 土師器 壺 | 口: 一 底: [6.8] 高: (3.9) | 内: 台部上面ナデ 基部内側の折り返し部→ヨコナデ 窓内面ナデ 外: ヨコ→ハケ(タテ) | 内: 10YR6/4 鈍い黄褐色 外: 10YR6/4 鈍い黄褐色 | やや緻密 金雲母 白色粒 透明ガラス質粒子 | 裸土 台1/2 |
| 15 土師器 壺 | 口: 一 底: [7.8] 高: (3.9) | 内: 窓部内側に折り返し→ナデ(タテ) 外: ハケヨコナデ→ナデ(ヨコ) | 内: 10YR5/3 鈍い黄褐色 外: 7.5YR5/4 鈍い褐 | やや緻密 透明ガラス質粒子 角閃石 | 裸土 台1/4 |
| 16 土師器 壺 | 口: [13.4] 底: 一 高: (3.3) | 内: ヘラナデ(頭下ヨコ→体タテ) ロヨコナデ →ロヨコナデ(沈線状の痕跡) 外: 体へラケズリ→ヘラマニロヨコナデ(全ヨコ) →ロヨコナデ 窓下縫合部 外表面底部から2cmの所縫合(?)の圧度 | 内: 10YR5/4 鈍い黄褐色 外: 5YR6/6 棕 | 緻密 角閃石 | 裸土 口3/5 |
| 17 土師器 壺 | 口: [14.8] 底: [3.5] 高: 10.6 | 内: ヘラナデ ロヨコナデ→ナデ 外: 体へラナデ 窓口縫の貼付痕 ロヨコナデ→ヘラミガキ(ヨコ) ロヨコナデ ロヨコナデ(ヨコ) 窓下縫合部中央に沈痕 外表面底部から2cmの所縫合(?)の圧度 | 内: 7.5YR6/6 棕 外: 7.5YR6/6 棕 | 緻密 角閃石 白色粒 透明ガラス質粒子 | 裸土 全1/6 |
| 18 土師器 壺 | 口: [14.8] 底: 一 高: (4.5) | 内: ヘラ 体へラナデ 窓口縫の貼付痕 ロヨコナデ→ヘラミガキ(ヨコ) 外: 体ナデ ロヨコナデ→ヘラミガキ(ヨコ) ロヨコナデ(ヨコ) 窓下縫合部取り状背面にハケ | 内: 10YR5/4 鈍い黄褐色 外: 7.5YR4/6 鈍 | 緻密 微細砂粒~濃 金雲母 白色粒 角閃石 | 裸土 口1/4 |
| 19 土師器 壺 | 口: [17.6] 底: 一 高: (7.6) | 内: ヘラ(体下タテ→体上斜め) ロヨコナデ→ヘラケズリ→ヘラナデ(ヨコ) 外: ハケズリ→ハケ(体斜め→窓下縫合)→ロヨコナデ | 内: 2.5Y3/1 黒褐 外: 2.5Y2/1 黑褐 | やや緻密 微細砂粒~濃 白色粒 | 裸土 口1/5 |
| 20 土師器 壺 | 口: 一 底: [5.8] 高: (9.75) | 内: 窓ヘラマニロヨコナデ(窓上部) 体中ヘラナデ(ヨコ) 外: ハケズリ→ハケ(タテ) 底周ナデ 底面に接合時に粘土巻き込み 底内面オコゲ | 内: 2.5Y 黑褐 外: 7.5YR 棕 | やや緻密 角閃石 白色粒 透明ガラス質粒子 | No.5 裸土 全1/4 |

| 番号 器種 | 寸法 | 特徴 | 色調 | 胎土 焼成 | 出土状況 (住跡) 残存状況 |
|----------------|--------------------------------|---|--------------------------------------|-----------------------------|----------------------|
| 21 土師器 甕 | 口： [17.9] 底： 一 高： (13.1) | 内：ハケ(脚)→ヘラケズリ→ヘナデ(タデ→体下ヨコ) ロヨコナデ→ヘラケズリ(→ナデ)頸口縁の貼り付け痕 外：体下ハケ(上→下)→体上(下→上) ロハケ(タデ)→ヨコナデ 被熱 燐付着 | 内：7.5YR5/4 鈍い褐 外：SYR5/6 明赤褐 | やや緻密 石英 赤色粒 | 覆土 全1/3 |
| 22 土師器 甕 | 口： 一 底： 5.3 高： (5.46) | 内：ヘラケ(ヨコ) 外：ヘラケズリ→ハケ(タデ) 底外面焼付着 | 内：2.5Y3/1 黒褐 外：7.5YR4/4 褐 | やや緻密 角閃石 白色粒 透明ガラス質粒子 | 覆土 底3/4 |
| 23 石 壁 | 長： 9.0 幅： 3.3 | 厚： 2.1 重： 97.27 | 2.6Y5/2 雪灰青 | 砂岩ホルンフェルス | 覆土 |

柱穴の状況からは住居の拡張等の可能性は低く、炉跡の配置から入り口施設である可能性も低い。また、埋設物等の設置の痕跡も認められず、現状では性格を明確にし得ない。

火坑 炉を火坑とする。住居中央部のP 1・3寄りに位置する。径0.15m程の円形で、被熱によりブロック状に硬化し、炉床付近には焼土（2層）が堆積する。炉穴の北半部には河原石が設置される。河原石は長さ約25.0cm・高さ約7.0cm・重さ約2.05kgの断面三角形の安山岩で、水平面を上に向けて出土した。三面とも被熱し、赤色変化及び若干の劣化が認められるが、炉穴の壁側の面の被熱は薄い。炉跡2層の堆積状況から、空いた北西半部が火床と考えられるため、河原石の設置は炉の使用に伴うもので、五徳の様な役割を推測できる。炉穴への焼土の堆積状況や炉石の被熱状況から炉の使用頻度は高かったものと判断できる。また、炉石下面の炉床も被熱による硬化が認められ、炉石の設置のない時期があったか、炉石の位置の移動があった可能性が考えられる。炉跡からの遺物の出土は確認されなかった。

出土遺物 図示した以外に土師器400片弱が出土した。遺構に伴出する遺物は極めて少なく、床面付近からNo 6・10g、炉跡から壺微細片が出土した以外は、埋没過程における覆土への混入遺物と判断される。

貯蔵穴からは、「S」字甕 a-1片、「く」字甕体部2片が出土した。覆土下層からは、No 2・3・6・9・20が出土した他、壙10片・壺1片・器壁の薄い甕体部90片強が出土した。これら以外は覆土中からの出土で、壙30片弱、脚部5片、壺25片、「S」字甕及び「S」字甕と判断される破片50片、「く」字甕及び「く」字甕と判断される破片100片弱、底部20片、台部4片ある。壙のうち1片は被熱痕が見られ、8片の胎土は精製される。脚部のうち1片は透孔が認められる。壺部の形状が判別できる4片は、内湾1片・外反1片・ラッパ状2片である。内湾・ラッパ状の2片は赤色で胎土は精製される。「S」字甕はII-2片・a-2片・c-3片である。体部は2片が内外ハケ、5片が内ハケ、90片弱が外ハケで仕上げられる。「く」字甕はB ii-2片・C ii-2片・C・2片・i-4片・ii-7片であり、体部外ハケ60片強・ナデ33片を数える。iの内1片は口縁端部に赤彩が施される。底部は①-2片（うち木葉痕1）・②-4片である。

No 9は覆土下層から出土した。甕については、出土位置・形状の如何に問わらず煮炊き用と判断できる。胎土に金雲母片を含む5片は何れも覆土中の出土で、壙-2片、「S」1片、「く」字甕1片である。金雲母片を含む壙の胎土は比較的粗い。

本遺構の時期を推定することは難しいが、SI-11との接合遺物があることから、「S」字甕 aなどをSI-11混入遺物と捉え埋没時期を4期としたい。

第11号住居跡・SI-11（第61~62図・図版十二、十六）

位置 1区P・Q-13グリッドに位置する。攪乱により東隅部を欠失する。

重複 SB-15 p 3、P17・18・19と重複する。

規模 北東・南西に長い方形で、長軸約4.4m・短軸約3.5m・確認面からの深さ約0.06~0.33m。主軸方向

N-31° -W。

壁 床面より角度をもって立ち上がる。

周溝 確認されなかった。

仕切溝 確認されなかった。

柱穴 確認されなかった。

床面 概ね平坦。硬化面等はみられない。

覆土 4層を確認した。人為埋土と判断した2層を挟んで自然埋没する。

貯蔵穴 確認されなかった。

その他の施設 確認されなかった。

火炉 炉を火炉とする。住居中央部の北隅部寄りに位置する。径0.6~0.7mの円形で、被熱によりブロック状に硬化し、炉床付近には焼土（1層）が堆積する。1・2層の堆積状況からは炉跡の据え替え等が推察できる。炉跡からの遺物の出土は確認されなかった。しかし、覆土中から出土した河原石の形状がSL09-10の炉石と酷似する。

出土遺物 図示した以外に土師器120片弱が出土した。前半により遺構に伴出する遺物なく、何れも埋没過程における覆土への混入遺物と判断される。

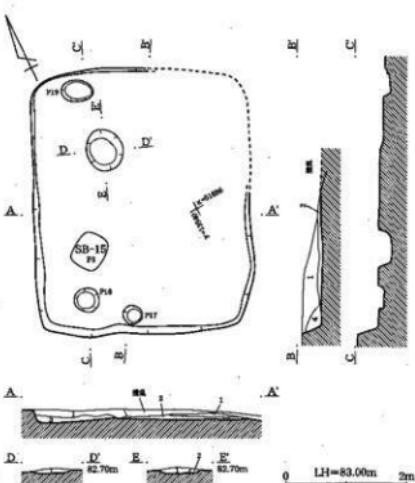
壺或いは高杯15片・高杯片・脚部2片・鉢か1片・「S」字甕30片・折り返し口縁1片・「く」字甕70片強・底部1片・台部10片を数える。壺或いは高杯破片の中に内外面に赤彩を施す破片・外面に赤彩を施す破片が各2片ある他、赤色を意識した焼成のものが1片ある。「S」字甕はa・b-各3片・I-1片で、体部は何れもハケで仕上げられる。「く」字甕はc ii-1片・ii-7片で、体部は内外ハケ3片・内ハケ10片（うち胎土に金雲母片混入1）・外ハケ25片弱を数える。

No 2も覆土からの出土で、目立った被熱痕はないが、その形状から炉石の可能性が指摘できる。甕については、何れも煮炊用と判断できる。胎土に金雲母片を含むものはNo 1と「く」字甕1片のみである。

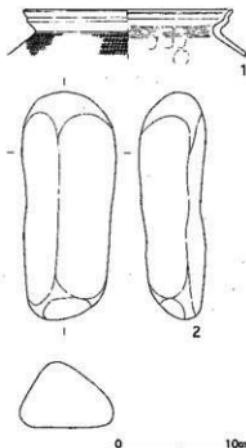
本遺構の時期を推定することは難しいが、埋没時期を3期として大過あるまい。

第12号住居跡・SI-12（第63~64図・図版十二、十六）

位置 1区O・P-13グリッドに位置する。南西半部分は調査区外



第61図 第11号住居跡実測図



第62図 第11号住居跡出土遺物実測図

表24 第11号住居跡出土遺物観察表

| 番号 器種 | 寸法 | 特徴 | 色調 | 胎土 焼成 | 出土状況 (注記) 現存状況 |
|------------------------|----------------------------------|---|-----------------------------------|------------------------|----------------------|
| 1 土陶器 甕 高: (4.0) | 口: [17.1] 長: 18.6 石 横: 7.6 | 内: 頸ハケ→ヨコナダヘ 頸下ヘラナダ(ヨコ)体指模調 外: ハケ(タテ→ヨコ)→ヨコナダ 「SJ」字状口縁 厚: 5.6 重: 968.94g 僅かに黒色の錆状の汚れ | 内: 7.5YR5/4 鉛い萬 SY7/1 灰白 | やや粗 金雲母 角閃石 石英斑岩 | 焼成 口1/4 種土 |
| 2 石 | | | | | |

にある。

重複 重複する造構はない。

規模 方形で、北東辺約4.2m・確認面から
の深さ約0.54m。主軸方向N40°E。

壁 床面より角度をもって立ち上がる。

周溝 確認されなかった。

仕切溝 確認されなかった。

柱穴 5基のピットを確認した。各々の径・
深さ(単位:m)はP1:0.36・0.2、P2:0.30
前後・0.25、P3:0.24・0.1、P4:0.40前後・
0.64、P5:0.18・0.19である。最も深いP4を
主柱穴とすれば、配置上、P2がこれに相対す
る。P1・4も相応する位置にあり住居に間連
するピットと考えられる。また、P5について
も、SI-09 P5・6の配置から本造構関連ピット
とした。

床面 概ね平坦で、炉跡周辺が硬化する。

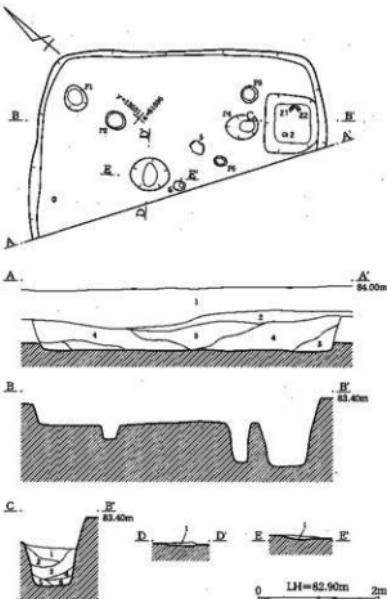
覆土 表土を含め7層を確認した。全体に自
然堆積と判断できる。

貯蔵穴 南東辺の東隅部寄りに位置する。長
軸約0.96m・短軸約0.88m・床面からの深さ約
0.65mである。中位以下はローム層を掘り抜き、
KP層を底面とする。

その他の施設 施設と判断し得る明確な根掛
を見い出しえなかつたが、7層は北西壁側に沿
ってベッド状に堆積する。

火坑 炉を火坑とする。住居中央部の北西寄
りに位置する。径0.54~0.64mの円形で、被熱に
よりブロック状に硬化する。火床は1層と判断
できる。炉跡からの遺物の出土は確認されなか
つた。

出土遺物 図示した以外に土師器150片程が出

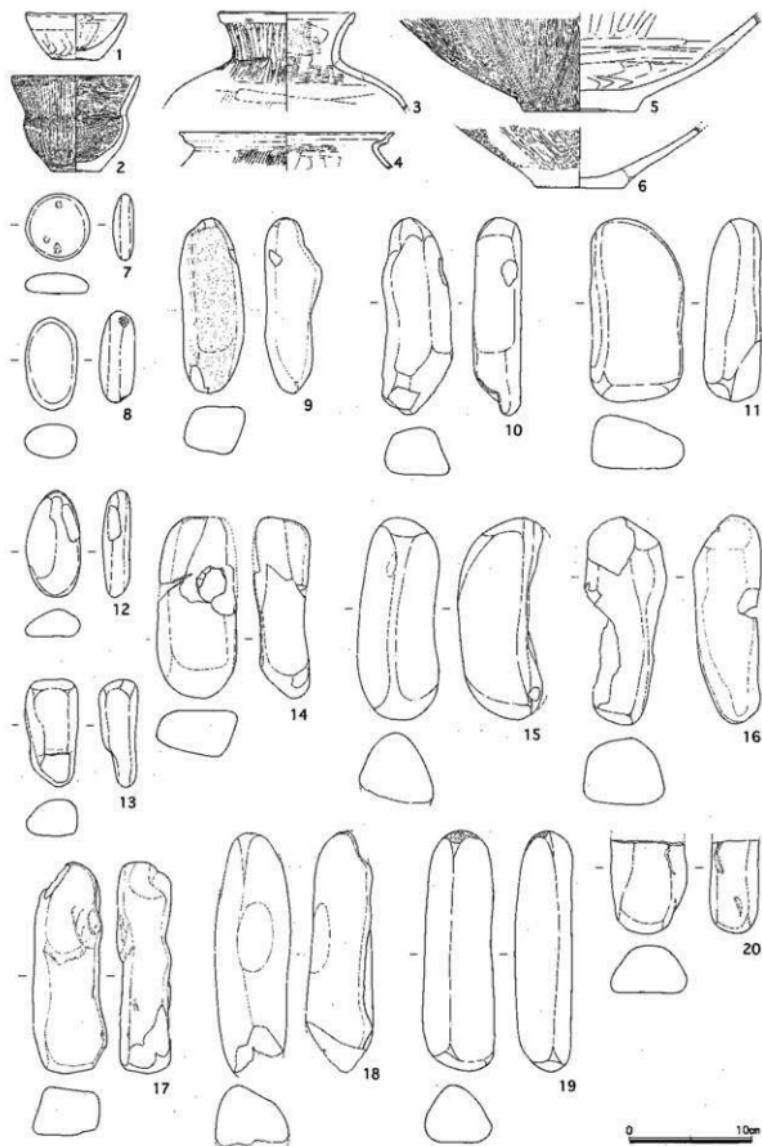


- 1 表土
2 黒褐色土 ローム粒子少、白色粒子多。しまりなし。
3 黒褐色土 ローム粒子多や少、白色粒子少。しまりなし。
4 黑褐色土 ローム粒子多、ロームブロック少、白色粒子少。しまりややあり。
5 黑褐色土 ローム粒子、ロームブロック少、白色粒子少。しまりややあり。
6 墓壙褐色土 ローム粒子、ロームブロック多。しまりややあり。
7 墓壙褐色土 ロームブロック多。しまりあり。

- 貯蔵穴
1 墓壙褐色土 ローム粒子(～0.2mm)多、ロームブロック(～1.0cm)少。
2 黒褐色土 ローム粒子(～0.2mm)多、ロームブロック(～1.0cm)。しまり。
3 黑褐色土 ローム粒子(～0.1mm)、ロームブロック(～1.0cm)若干。
4 墓壙褐色土 ローム粒子(～0.2mm)少、ロームブロック(～1.0cm)多。
5 黑褐色土 ローム粒子(～0.1mm)少。しまり、粘性あり。
6 黑褐色土 ローム粒子(～0.2mm)多、ロームブロック(～1.0cm)、
KP粒子少。しまりやや弱。粘性あり。

- 炉跡
1 墓壙褐色土 焼土粒子多、被熱により硬化したロームブロック(～2.0cm)多。
被熱による硬度の強化。

第63図 第12号住居跡実測図



第64図 第12号住居跡出土遺物実測図

土した。遺構に伴出する遺物なく、何れも埋没過程における覆土への混入遺物と判断され、小型壺或いは埴10片弱（1コ体部分）、高坏3片・脚部5片・壺以外の器種不明破片10片弱、「S」字壺3片・折り返し口縁2片・「く」字壺20片弱・壺体部90片弱・壺底部5片強・台部1片を数える。

小型壺或いは埴は内外面に被熱痕状の損傷が認められる。胎土は赤茶色で赤彩を意識したものか。高坏は何れも摩滅が激しいが、1片には内外に赤彩が残る。脚部は透孔の確認できるものが2片あり、1片には赤彩が施され、1片には破碎前と判断される被熱痕を持つ。据部は2片ある。器種不明とした破片に被熱痕は

表25 第12号住居跡出土遺物観察表

| 番号 器種 | 寸法 | 特徴 | 色調 | 胎土 焼成 | 出土状況 (注記) 現存状況 |
|---|--|----|---|---------------------------------|-----------------------|
| 1 口： [8.0] 土師器 底： [4.0] 高： 3.8 | 内： ヘラナデ→ヨコナデ 外： ヘラナデ 指痕底→ロヨコナデ | | 内外： 10YR6/4 無い黄褐 | やや堅密 透明ガラス質粒子 角閃石 | 覆土 口1/5 |
| 2 口： [10.2] 土師器 底： 4.0 高： 7.8 | 内： ヘラミガキ(ヨコ) 外： ヘラミガキ(タテ)口唇ヨコ) →底周ヘラケズリ→ヘラミガキ(ヨコ) | | 内： 7.5YR7/6 稲 外： 7.5YR6/6 稲 | やや堅密 赤色粒 白色粒 | No.1 貯藏穴覆土 全1/2 |
| 3 口： [11.0] 土師器 底： 高： (8.0) | 内： ハラミガキ(ヨコ)→ヘラナデ(ヨコ) ロナデ→ヨコナデ 外： ハラミガキ(タテ)→ヘラミガキ→肩ヘラナデ ロヨコナデ→腰ハケ(タテ)腰曲部ヘラナデ(ヨコ) →ヘラミガキ(タテ) | | 内： 10YR5/4 ない黄褐 外： 2.5YR6/6 明赤褐色 | やや堅密 微細砂粒→稲 赤色スコリア 角閃石 | 覆土 口全存 |
| 4 口： [17.6] 土師器 底： 高： (3.0) | 内： ハケ(ヨコ)→ヨコナデ 体ナデ(ヨコ) 外： ハケ(タテ)→ロヨコナデ 「S」字状口縁 | | 内： 2.5YR3/1 黒褐 外： 10YR4/2 灰黄褐 | やや緻密 透明ガラス質粒子 赤色スコリア | 覆土下層 口1/8 |
| 5 口： 一 土師器 底： 高： (8.2) | 内： ヘナナデ底・体接合部ヘラナデ(ヨコ) 外： ハケ→ヘラナデ底周ヘラミガキ(ヨコ)ヘラミガキ(タテ) 底： ヘナナデ→ヘラミガキ（一方向） | | 内： 10YR6/4 無い黄褐 外： 5YR6/6 明赤褐 | 堅密 チャート 石英 角閃石 白色粒 | No.2 覆土 底全存 |
| 6 口： 一 土師器 底： 7.4 高： (5.1) | 内： 全周剥離（ナデカ） 外： ヘラミガキ(タテ)、斜め底周剥離 底： ヘラミガキ（概ね一方向） | | 内外： 10YR6/4 無い黄褐 | やや堅密 透明ガラス質粒子 赤色スコリア | No.3 覆土 底全存 |
| 7 長： 5.4 石 幅： 5.2 厚： 1.7 重： 68.77g | 自然の河原石を利用 | | 2.5Y6/1 黄灰 | 輝石安山岩 | 覆土 |
| 8 長： 7.6 石 幅： 4.2 厚： 2.8 重： 129.45g | 自然の河原石を利用 側面の一部に敲打痕 | | 5Y6/1 灰 | 輝石安山岩 | 覆土 |
| 9 長： 14.3 石 幅： 4.9 厚： 3.9 重： 476.73g | 自然の河原石を利用 平坦面に塵が水平に付着 | | 2.5GY6/1 オリーブ灰 | 輝綠岩 | 覆土 |
| 10 長： 16.2 石 幅： 5.2 厚： 3.9 重： 516.12g | 自然の河原石を利用 | | 10Y8/1 灰白 | 輝石安山岩 | 覆土 |
| 11 長： 15.0 石 幅： 7.6 厚： 4.6 重： 828.50g | 自然の河原石を利用 | | 2.5Y7/2 灰黄 | 石英斑岩 | 貯藏穴 |
| 12 長： 8.7 石 幅： 4.5 厚： 2.2 重： 121.13g | 自然の河原石を利用 | | 10Y4/1 灰 | ホルンフェルス | 覆土 |
| 13 長： 8.7 石 幅： 4.3 厚： 2.9 重： 151.03g | 自然の河原石を利用 | | 5Y7/2 灰白 | 石英斑岩 | 覆土 |
| 14 長： 14.8 石 幅： 6.1 厚： 4.0 重： 632.27g | 自然の河原石を利用 | | 7.5Y7/1 灰白 | 石英斑岩 | 覆土 |
| 15 長： 16.5 石 幅： 6.0 厚： (5.8) 重： 849.24g | 自然の河原石を利用 一部破断 破断後摩擦 欠失した結果断面が三角形状 | | 5Y6/1 灰 | 輝石安山岩 | 覆土 |
| 16 長： 17.0 石 幅： 6.6 厚： 5.5 重： 661.20g | 自然の河原石を利用 | | 2.5Y6/3 無い淡 | 石英斑岩 | 覆土 |
| 17 長： 17.2 石 幅： 5.5 厚： 4.3 重： 676.67g | 自然の河原石を利用 | | 5Y6/2 灰オーリーブ | 溶結凝灰岩 | 電 |
| 18 長： 19.7 石 幅： 6.3 厚： 5.7 重： 803.25g | 自然の河原石を利用 裏面は被削後摩滅 | | 10Y7/1 灰白 | 輝石安山岩 | 貯藏穴 |
| 19 長： 19.6 石 幅： 5.5 厚： 4.6 重： 731.41g | 自然の河原石を利用 | | 5Y6/3 オリーブ灰 | 石英斑岩 | 覆土 |
| 20 長： (7.6) 石 幅： 6.2 厚： 3.8 重： 301.08g | 一部破断 一部破断 1/2程度欠失か | | 5Y6/2 灰オーリーブ | 溶結凝灰岩 | 覆土 |

確認できない。「S」字型はI・a・b・I・a各2片、「く」字型はi・ii各2片である。窓体部は内外ハケ5片・内ハケ10片強・外ハケ40片強、底部は①4片・②1片である。

甕は何れも煮炊き用と判断できる。胎土に金雲母片を含むものは窓体部の1片のみである。

本遺構の時期を推定することは難しいが、埋没時期を2期として大過あるまい。

第14号住居跡・SI-14（第65～66図）

位置 1区R-12グリッドに位置する。南西隅部以外は調査区外にある。

重複 重複する遺構はない。

規模 方形状で、0.20m程の深さを確認した。遺構確認面である3

層上面は床面にあたる。主軸方向N-7°-W。

壁 床面より角度をもって立ち上がる。

周溝 確認されなかった。

仕切溝 確認されなかった。

柱穴 確認されなかった。

床面 硬化面等は認められない。

覆土 4層を確認した。4～6層は覆土、7層は貼床埋土で、自然堆積と判断できる。

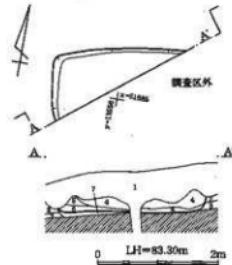
貯蔵穴 確認されなかった。

その他の施設 確認されなかった。

火坑 確認されなかった。

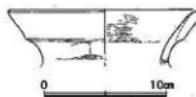
出土遺物 図示した以外に40片弱が出土した。遺構に伴うものはなく、何れも覆土中への混入遺物と判断され、堆或いは高壙3片・脚部1片・「S」字型1片・「く」字型4片・窓体部10片弱・器盤の薄い窓体部20片弱底部1片を数える。堆或いは高壙片は微細片であるが胎土は緻密、脚部はラッパ状に開く。「く」字型は2 ii-1片・ii-2片である。窓体部は外ハケ4片・ミガキ4片・器盤の薄い窓体部は内外ハケ7片・外ハケ3片で、底部は①である。

本遺構の時期の推測は難しい。



第65図 第14号住居跡実測図
1. 表土及び覆土
2. 埋陶色土
3. ローム隔離層
4. 埋陶色土
5. 茶褐色土
ローム層 (-0.1m) 少
ローム層 (-1.0m) 少
白色粘土層 少
6. 黄褐色土
ローム粘土・ロームブロック
主体。しまり強。貼灰か。

第65図 第14号住居跡実測図



第66図 第14号住居跡出土遺物実測図

表26 第14号住居跡出土遺物観察表

| 番号 標識 | 寸法 | 特徴 | 色調 | 胎土 焼成 | 出土状況 (注記) 残存状況 |
|---------------|---------------------------|---|--|---------------------------------|----------------------|
| 1 土師器 蓋 | 口:[16.0] 底: 高:(4.4) | 内:ハケ→ロヨコナデ 類ナデ 外:ロヨコナデ 類ハケ(タテ)→ナデ(ヨコ) 有底盤 | 内:10YR7/4 鈍い黄橙 外:7.5YR7/4 鈍い橙 | 緻密 微細帶粒 緩 石英 長石 赤色スコリア | 覆土 口1/15 |

第4節 挖立柱建物跡

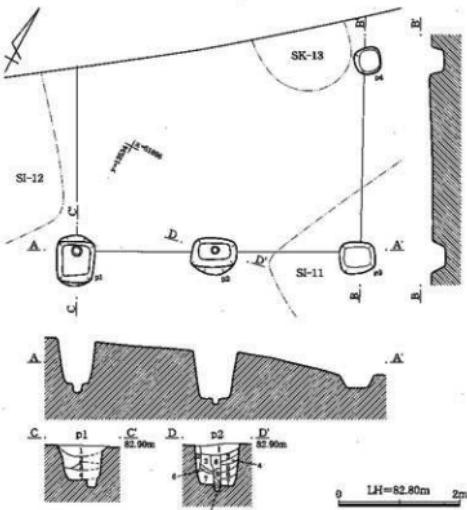
1. 調査の状況

1棟を確認した。伴出遺物はなく時期等は不明である。しかし、覆土への混入遺物及び周辺に位置する住居跡が古墳時代前期に限られ、本遺構にこれ以外の時期を推量する根拠はない。

2. 挖立柱建物跡

第15号掘立柱建物跡・SB-15（第67図・図版十三）

位置 1区P-13グリッドに位置する。遺構の北半部は調査区外に位置する。



- P1
- 1 砂質色土 ローム粒子（~0.1cm）、ロームブロック（~1.5cm）、白色粒子や多。
かたくしまる。
 - 2 砂質色土 ローム粒子（~0.1cm）、ロームブロック（~1.0cm）少、白色粒子。
かたくしまる。
 - 3 砂質色土 ローム粒子（~0.1cm）、ロームブロック（~1.0cm）やや多、白色粒子若干。
しまり強。
 - 4 砂質色土 ローム粒子（~0.1cm）少、ロームブロック（~1.0cm）若干。しまり強。
- P2
- 1 砂質色土 ローム粒子（~0.1cm）やや多、ロームブロック（~1.0cm）若干、白色粒子。
かたくしまる。
 - 2 砂質色土 ローム粒子、ロームブロック、しまり、粘性あり。（壁の崩落土）
 - 3 砂質色土 ローム粒子（~0.1cm）少、ロームブロック（~1.0cm）。かたくしまる。
 - 4 砂質色土 ローム粒子（~0.1cm）少、ロームブロック（~1.0cm）。かたくしまる。
 - 5 砂質色土 ローム粒子（~0.1cm）少、ロームブロック（~1.0cm）。かたくしまる。
 - 6 砂質色土 ローム粒子（~0.1cm）、ロームブロック（~1.5cm）。しまり、粘性あり。
 - 7 砂質色土 ローム粒子（~0.1cm）、ロームブロック（~1.0cm）。しまりや中弱。
粘性あり。
 - 8 砂質色土 ローム粒子（~0.2cm）、ロームブロック（~1.0cm）少、白色粒子少。
しまり強。
 - 9 砂質色土 ローム粒子（~0.2cm）。しまりや中弱、粘性あり。
 - 10 砂質色土 ローム粒子（~0.3cm）。しまりや中弱、粘性あり。
 - 11 砂質色土 ローム粒子（~0.2cm）、ロームブロック（~1.0cm）。しまり、粘性あり。

第67図 第15号掘立柱建物跡実測図

重複 p 3とSI-11が重複する。新旧関係は不明である。

規模 詳細は不明である。南北は2間を確認した。間尺はp 1-2:約2.25m・p 2-3:約2.35m・p 3-4:約3.2m。主軸N29°W。

形状 p 1~4は四隅が鋭角な方形で壁は垂直に立ち上がる。底面は、何れも概ね平坦で、標高82.4m前後に位置する。p 1・2には底面に柱痕が認められた。

覆土 覆土が明確であるのはp 2のみで、柱痕と埋土を確認した。p 1の底面の柱痕は覆土除去後に確認したものである。p 1~4とも抜き取り跡の痕跡はない。

出土遺物 p 2から3片、p 3から6片、p 4から1片が出土した。何れも土器小片である。

p 2は「く」字甕i-1片、甕体部2片である。p 3は「S」字甕I-1片・b-1片、器壁の薄い外ハケ1片の他、SI-11と接合した「S」字甕I bである。p 4は「く」字甕ii-1片である。

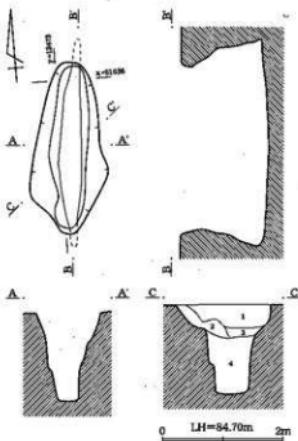
冒頭で述べたとおり、本遺構の時期を推定することは難しい。

第5節 土坑・ピット

1. 調査の概要

5基の土坑、8基のピットを確認した。出土遺物を伴わない遺構が多いことから、概して不明な点が多いが、形状からSK-06は縄文時代の陥穴状土坑、SK-08は中世の方形窓穴と判断できる。

土坑は、SK-13が1区である以外は3区に位置する。ピットは△覆土・形状から柱穴と推察できるものが多いが、明確な遺構復元は困難である。このことは、前平による遺構の欠失に起因すると考えられ、特に、SK-07・P4の位置するI・J-7グリッド付近には失われた遺構が存在する可能性が高い。



2. 陥穴状土坑

第6号土坑・SK-06 (第68図・図版十三)

位置 3区 J-7グリッドに位置する。遺構の南端部は現道下にあたり調査し得なかった。

重複 重複する遺構はない。

規模 南北に長い不整な柳葉形で、開口部長軸約2.8m、短軸約1.34m・深さ約1.47m。底面長軸約3.3m・短軸約0.34m。主軸N-23°-W。

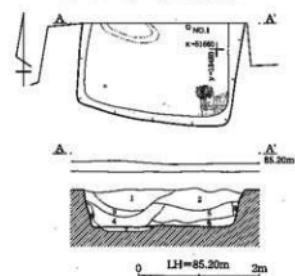
形状 長軸の断面は開口部付近から底面に向けて開く巾着状で、底面はオーバーハングとなる。底面の長軸の断面はロート状で、概ね平坦な底面から壁が直立して立ち上がり、底面から約0.50m付近から開口部にむけてラッパ状に開く。

覆土 硬くしまった4層を確認し、人為埋土と判断される。1層の硬化が著しい。3層はKP粒子を含む。

出土遺物 遺物の出土は確認されなかつたが、形状・覆土から縄文時代早期の陥穴状土坑の可能性がある。

- 1 緑褐色土 ローム粒子少。白色粒子・IP粒子微。
- 2 培養褐色土 黒色土少。しまりあり。
- 3 黄色土 ローム粒子少。IP粒子・KP粒子や多。しまりあり。
- 4 黄褐色土 ロームブロック主体。しまりあり。

第68図 第6号土坑実測図



3. 方形窓穴

第8号土坑・SK-08 (第69図・図版十三)

位置 3区 J-9グリッド。北半部は調査区外にある。

重複 重複する遺構はない。

規模 方形。南北約1.51m・深さ約0.59m・主軸N-7°-E。

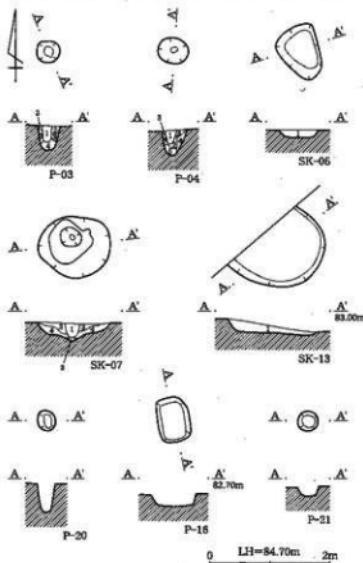
形状 床面は概ね平坦。壁は若干の角度をもって立ち上がる。

覆土 9層を確認し、人為埋土と判断される。7層は掘方埋土か。8層は壁の崩落土と判断されるが、9層は柱穴の可能性がある。南東隅には焼土・灰の一塊が堆積する。南西隅付近の床面には焼土が密着する。

- 1 緑褐色土 ローム粒子(<~0.2mm)、白色スコリア(<~0.5mm)。黒。しまりや中強。粘性あり。
- 2 黒色土 ローム粒子(<~0.2mm)少。ロームブロック(<~2.0cm)少。しまり強。粘性あり。
- 3 黒色土 ローム粒子(<~0.2mm)多。ロームブロック(<~2.0cm)少。しまりや中強。粘性あり。
- 4 黒色土 ローム粒子(<~0.2mm)多。ロームブロック(<~6.0cm)2.0cm以上多。しまりや中強。粘性あり。
- 5 黒色土 ローム粒子(<~0.2mm)少。ロームブロック(<~2.0cm)少。しまり・粘性あり。
- 6 黒色土 ローム粒子(<~0.2mm)多。ロームブロック(<~2.0cm)少。しまりや中強。粘性あり。
- 7 黒色土 ローム粒子(<~0.2mm)多。ロームブロック(<~2.0cm)主。しまり・粘性あり。
- 8 黒色土 粘性あり。ローム粒子(<~0.2mm)主体。しまり・粘性あり。
- 9 黒色土 (<~1.5cm)少。硬くしまる。

第69図 第8号土坑実測図

出土遺物 床面から5cm程高いレベルから土師器片2片、河原石3点が出土した。土師器は外面をハケで仕上げた小片と底部小片で、時期等の判別は困難である。何れも混入遺物と判断できる。



- P-03
1 明褐色土 ローム粒子 (~0.2mm) 少。しまりややあり、粘性あり。
(柱穴)
2 明褐色土 ローム粒子 (~0.1mm) 若干。しまりややあり、粘性あり。
3 黄褐色土 ローム粒子 (~0.1mm) 多。しまりややあり、粘性あり。
4 黄褐色土 ローム粒子主部。しまりややあり、粘性あり。
- P-04
1 明褐色土 ローム粒子 (~0.1mm) 少。しまり・粘性あり。(柱穴)
2 黄褐色土 ローム粒子 (~0.1mm) 若干。しまり・粘性あり。(柱穴)
3 黄褐色土 ローム粒子 (~0.1mm) 若干。しまり・粘性あり。
4 緑褐色土 ローム粒子 (~0.1mm) 多。しまり・粘性あり。
5 緑褐色土 ローム粒子 (~0.1mm) 多。しまり・粘性あり。
- SK-05
1 茶褐色土 ローム粒子 (~0.1mm) 若干。しまり・粘性あり。
- SK-07
1 茶褐色土 ローム粒子 (~0.2mm) 少。しまりややあり、粘性あり。
(柱穴)
2 明褐色土 ローム粒子 (~0.1mm) 多。しまりややあり、粘性あり。
(柱穴)
3 明褐色土 ローム粒子 (~0.1mm) 若干。しまりややあり、粘性あり。
4 緑褐色土 ローム粒子 (~0.2mm) 多。しまりややあり、粘性あり。
- SK-13
1 緑褐色土 ローム粒子 (~0.1mm) 少。白色粒子少。P粒子・化物粒子若干。かたくしまる。

第70図 土坑・ピット実測図

表27 ピット計測表

| 遺構 | 位置 | グリッド | 形状 | 規模 | 深さ | 特記事項 |
|-----|----|------|------|-----------|------|------|
| P3 | 3区 | I-8 | 不整円形 | 0.41×0.37 | 0.38 | 柱穴 |
| P4 | 3区 | I-8 | 円形 | 0.28 | 0.61 | 柱穴 |
| P16 | 1区 | P-14 | 楕円形 | 0.74×0.52 | 0.2 | |
| P17 | 1区 | P-13 | 円形 | 0.33 | 0.09 | |

4. 土坑

第5号土坑・SK-05（第70図）

位置 3区J-9グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 不整な円形。長軸約0.9m・深さ約0.18m。

形状 底面はほぼ平坦で、壁は角度をもって立ち上がる。

出土遺物 確認されなかった。

第7号土坑・SK-07（第70図・図版十三）

位置 3区I・J-7グリッドに位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 東西に長い不整な円形で、長軸約1.2m・短軸約1.0m。深さ約0.32m。

形状 底面は概ね平坦。中央部付近にピットが穿たれる。壁は角度をもって立ち上がる。

覆土 1・2層を柱痕、3・4層を埋土とする柱穴と判断できる。

出土遺物 確認されなかった。

第13号土坑・SK-13（第70図）

位置 1区P-13グリッドに位置する。遺構の北半部は調査区外に位置する。

重複 重複する遺構はない。

規模 円形状で、径約1.5m・確認面からの深さ約0.2m。

形状 底面は概ね平坦で、壁は角度をもって立ち上がる。

出土遺物 確認されなかった。

5. ピット（第70図）

7基のピットの詳細は表27に記した。

第6節 その他の遺物

造橋外土器及び出土造橋と大きく時期を違える遺物は、縄文時代～古墳時代まで約17点が出土した。以下、時期ごとに概略を記す。

1. 縄文・弥生時代（第71図・図版十六）

土器5片が出土した。

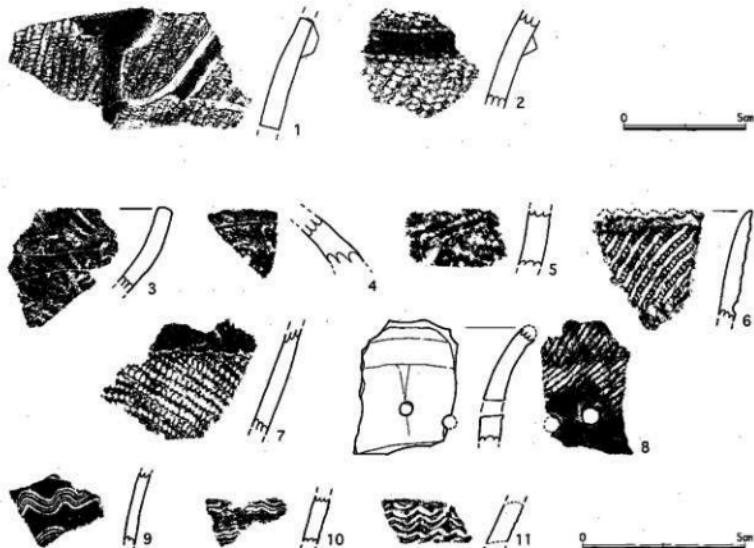
No.1は沈線を添わせた隆帯で幾何学的な文様を表す。剥落した隆帯の下に縄文の施文が見られる。縄文は前段半燃りとみられる。胎土に含まれる金雲母片の含有量は低い。中期中葉の所産か。No.2は隆帯で弧状の文様を表す。隆帯には不明瞭ではあるが沈線が添う。加曾利E I式期か。

図示し得なかった3片は、断面蓮鉢状の隆帯を貼り付けた小片、地縄文施文後隆帯を貼り付けた小片、胎土に金雲母片を含む地縄文の小片である。

2. 弥生時代（第71図・図版十六）

土器10片が出土した。No.3・4は文様の深さが2.0mm程あり、先端が極めた鋭利で、且つある程度の長さを持つ工具で渦巻き或いは同心円状の文様を表したものと考えられる。No.5～8はともに二軒屋式の範疇と判断されるがNo.7は硬質である。No.8の孔は焼成前に穿たれる。No.9～11は櫛齒状工具で波状文を表す。No.9は5本、No.10・11は4本以上の櫛齒を持つ。何れも十王台式か。

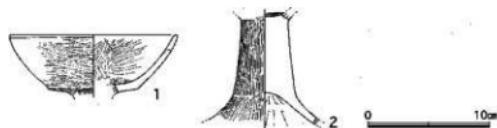
図示し得なかった1片はNo.3・4同様線描が施された微細片である。No.3・4と併せて同一個体か。



第71図 その他の遺物（縄文時代・弥生時代）実測図

3. 古墳時代（第72図）

2点のみが出土した。No.1・2とも6世紀前半の所産か。



第72図 その他の遺物（古墳時代）実測図

表28 その他の遺物（縄文時代・弥生時代）観察表

| 番号 器種 | 寸法 | 特徴 | 色調 | 胎土 焼成 | 出土状況 (注記) 残存状況 |
|------------|---------|--|----------------------------------|-------------------------|----------------------|
| 1 縄文土器 | 厚： 0.8 | 地縄文施文後に藤帯貼り付け | 内：10YR7/3 純い黄橙 外：7.5YR6/6 稜 | やや粗 ガラス質砂粒 白色粗砂粒 | |
| 2 縄文土器 | 厚： 0.9 | 地縄文施文後に藤帯貼り付け | 内：2.5YR5/6 明赤褐 外：2.5YR5/6 明赤褐 | やや粗 ガラス質砂粒 白色粗砂粒 | |
| 3 弥生土器 | 厚： 0.5 | 内：ヘラナデ 外：並行沈線→ナデ→脱利な沈線 | 内外：SYR6/6 稜 | やや緻密 微砂粒 線 赤色スコリア | 4と同一個体か |
| 4 弥生土器 | 厚： 0.8 | 内：ヘラナデ 外：並行沈線→ナデ→脱利な沈線 | 内：5YR6/6 稜 外：5YR6/6 明赤褐 | やや緻密 石英 赤色スコリア | 3と同一個体か |
| 5 弥生土器 | 厚： 0.7 | 内：ナデ 外：付加条原体を羽状に施文 | 内：7.5YR2/1 黒 外：7.5YR4/4 黑 | やや粗 白色粒 | |
| 6 弥生土器 | 厚： 0.5 | 内：ナデ 外：付加条 壁(RL-R)を模位 口縫つまみ上げ、口唇端に縄で縛り 口縫端から2cmほどとの間に列状に鉤刺突 | 内：5YR4/4 純い赤褐 外：5YR4/4 純い赤褐 | やや緻密 透明ガラス質粒子 白色粒 | 口縫部 |
| 7 弥生土器 | 厚： 0.5 | 内：ヘラミガキ 外：頭以下单脚斜条(LR)原体端部 | 内：10YR5/4 純い黄褐 外：7.5YR4/4 稜 | やや緻密 | 頭部 |
| 8 弥生土器 | 厚： 0.5 | 内：口縫に縄文(L) 外：ナデタテ→ロヨコナデ 焼成前の穿孔有り(2個) | 内：10YR6/4 純い黄橙 外：10YR7/4 純い黄橙 | やや緻密 | 口縫部 |
| 9 弥生土器 | 厚： 0.35 | 内：ナデ 外：ナデ→横描波状文 | 内：10YR6/4 純い黄橙 外：10YR6/4 純い黄橙 | 緻密 | |
| 10 弥生土器 | 厚： 0.5 | 内：ナデ 外：ナデ→横描波状文 | 内：7.5YR5/4 黒 外：2.5YR2/1 黒 | やや緻密 | |
| 11 弥生土器 | 厚： 0.55 | 内：ナデ 外：ナデ→横描波状文 | 内：10YR6/4 純い黄橙 外：10YR6/4 純い黄橙 | やや緻密 全表面 | |

表29 その他の遺物（古墳時代）観察表

| 番号 器種 | 寸法 | 特徴 | 色調 | 胎土 焼成 | 出土状況 (注記) 残存状況 |
|----------------|----------------------------|--|---|------------------------|----------------------|
| 1 土師器 高坏 | 口：[13.6] 底：一 高：(4.8) | 内：ヘラミガキ 口唇ヨコナデ 外：ロヨコナデ→ヘラミガキ(口) | 内：10YR6/6 明黄褐 外：7.5YR6/6 稜 | 緻密 白色粒 | 口1/5 |
| 2 土師器 高坏 | 口：一 底：一 高：(9.2) | 内：ヘラミガキ 回転させながらヘラナデ 外：ナデ→ヘラミガキ(タテ) 中実脚 | 内：10YR3/2 黒褐 外：5YR4/4 純い黄褐 外：7.5YR3/3 暗褐色 | やや緻密 角閃石 チャート 長石 | 脚のみ |

第5章 まとめ

第1節 赤曾II遺跡

1. 調査成果の概要

赤曾II遺跡は江川の東岸にあり、「S」字状に蛇行する川筋の大きな変換点に位置する。奥まった開拓台地の深部にあたり、遺跡のある台地下は、現状で湧水点の確認はないが、地域住民の回顧によれば降雨の際に必ず「水の湧く」場所（第2図★印）であったという。現在の江川も水量は豊富で、動・植物に対する恩恵には多大なものがある。かつて、「赤曾千軒」と呼ばれ、幾つもの「寺」があったと伝えられる本遺跡が、このような恵みを背景に立地したことはいうまでもあるまい。

遺構の概要については第3章第1節において既に述べたが、確認した住居跡10軒、土坑・ピット75基、性格不明遺構3基（周辺ピットを含む）について、時代別に整理を試みまとめをしたい。

2. 旧石器時代

剥片2片を確認した。表探遺物ではあるが、何れも調査区南西端部域のローム面から出土した。台地端部の様相は明らかではないが、遺跡付近への某かのアプローチがあったことは明らかである。

3. 繩文時代

陥穴状土坑1基と若干の遺物を確認した。土坑からの出土遺物はなく時期等は不明である。遺物は中期の小片と磨石が出土した。今回の調査においては江川に面した端部域の調査を実施し得ず不明瞭な点は多いが、現状からは生活の痕跡は薄い。江川沿いには繩文時代の遺跡が散在することから、本遺跡付近にも未知の遺構・遺物が存在する可能性は否定できないが、江川を挟んで対峙する亀山北遺跡も同様の調査状況であることを鑑みると、地形的な制約等により生活圏から除外されたとの指摘もできる。

4. 古墳時代

SK-23出土の須恵器、調査区内から前期の土師器片1片を確認した。また、SK-41から出土した輪型鍛冶滓は当該時期の可能性がある。SZ-12~15が当該時期である可能性が皆無とは言い難く、調査区外に遺構・遺物が存在するととも考えられるが、本調査区においては生活の痕跡は極めて薄い。また、江川を挟んで西には前期の集落である亀山北遺跡が存在することを見ても、当該時期及び前代の弥生時代の生活の場は本調査区周辺ではなかった可能性が推測される。

5. 平安時代

住居跡8軒を確認した。遺構の配置からは、本調査区を南東縁辺域とし、北西方向に広がる集落の存在は如実である。真岡市の遺跡分布調査によれば、本調査区を含む赤曾II遺跡の範囲は、径約800mの範囲に及び、遺物散布の中心は本調査区より北西約500m程の地点にある。本調査区がこの集落の周縁部であるか（遺構の変遷を含む）、推定範囲内に複数の集落が存在するかは定かにし得ない。しかし、遺構分布の空白域を含む集落地を調査し得た結果は大きい。

遺物は遺構への覆土に伴うものが大勢を占め、遺構の時期を示す資料に乏しい。事実記載中に示した各遺

構の時期については、埋没時期を推量したに止まるが、県内の遺物編年を基本に 以下の3期を設定した。

1期・・9世紀後葉 2期・・10世紀前葉 3期・・10世紀前半

各遺構の時期を見ると、大きく以下のような変遷を追える。

1期: SI-05, 09→1~2期: SI-07, 08→2期: SI-02, 03, 04→1~3期: SI-01

確認遺構数が僅少ではあるが、遺構の主軸方向（磁北との傾き）の傾向と併せてみると、

1期 : SI-05 (N-24° -w), 09 (N-7° -w)

1~2期 : SI-07 (N-30° -w), 08 (N-28° -w)

2期 : SI-02 (N-9° -w), 03 (N-26° -w), 04 (N-18° -w)

1~3期 : SI-01 (N-24° -w)

で、時期によってある程度の類似性が認められる。しかし、数値の大きい2期については、SI-03, 04が極めて近接する位置的関係を見ても、遺物からは推定しきれない時期差があることを明示しておきたい。

何れにしても、先述のごとく、集落内の遺構の変遷に起因するのか、集落自体の存続年月を示すものかは定かにし得ないが、100年強という短い期間に遺構の変遷があったことのみ確認しておきたい。

遺構については、1.床面に遺物を残さないこと 2.東竈が多いこと 3.竈構築材に山砂が多用されることなどが共通点としてあげられる。竈については、SI-07のみ山砂に加え粘土が用いられること、SI-02, 08の竈煙道脇に煙出し状の掘り込みが確認されたこと、などは特徴的である。

遺物については留意された点を列記する。

①墨書き土器について

SI-02No 5, SI-03・08No 6・7, SI-05No 3・4・7・9の7点出土した。全てが墨の掠れや土器の破片によって全文が見えないが、横方向の縦書きである点が共通する。SI-03・08No 7を含めればSI-02No 5・SI-05No 3・9の4点に「子」が含まれる。SI-05No 4には「寺」が読みとれる。冒頭で記した栄華の言い伝えが彷彿されるが、検証は後に譲りたい。

②製塙土器について

SI-03・08, 09から若干の破片が出土した。被熱により劣化した器壁の薄い破片で胎土の白色針状物質を含む。SI-03からの出土がないことから、SI-08に属する遺物である可能性が高い。

③胎土に金雲母片を混入する破片について

SI-01, 04, 09から出土する。破片であるため個体数が限定される可能性はあるが、出土破片数・胎土への混入量はSI-09が傑出する。

④須恵器・灰釉陶器の産地について

産地を明らかにし得た須恵器は少ないが、遺跡の所在地に近い益子窯産（SI-04床面, SI-05No 5・6・8・9, SK-45）や、南那須窯産（SI-02No 10, SK-22, SK-34）・常陸産（SI-05No 4）・三和窯産（SI-03・08No 8, SK-28）の須恵器片が認められる。灰釉陶器は猿投産（SI-02No 9, SI-08No 7, SK-43, 表探）・遠江～三河地方産（SI-03・08No 5）である。

⑤出土壺の口縁部形態について

各住居跡にはSI-07を除き煮炊き用と見られる壺の破片が少なからず出土する。何れも覆土からの出土破片であり、各住居の様相を示すものとは言い難いが、他住居からの廃棄品である可能性を念頭に、壺の口縁部形態による整理を行いたい。

口縁部の「タイプ」には、「素口縁（「く」の字）」「下野型」「武藏型」とともに「鶴田中原タイプ（註1）」

が混在する。宇都宮以北を中心分布域とする「鶴田中原タイプ」が芳賀郡域の中央部付近にまで分布することは特筆に値する。ここで、各住居出土の甕片を今一度総じてみると、SI-01=「下野型」、「武藏型」、SI-02=「下野型」、「武藏型」、SI-03=「下野型」、SI-04=「下野型」、「鶴田中原タイプ」、SI-05=「武藏型」、SI-08=「下野型」が出土する。これらからは、「下野型」の流通が定量あることが窺える他、「鶴田中原タイプ」・「武藏型」の出土する遺構が限定されることをあげておきたい。

⑥土器の仕上げについて

土師器坏は内面ミガキ：外面ロクロで仕上げるものが多く、甕はヘラケズリするものが多い。須恵器坏で底部の確認できるものは二次底部面なく回転ヘラ切り未調整数片である。これらの中で、内面をヘラミガキで仕上げた須恵器（SI-05No 7）やロクロを使わず外面をヘラケズリする坏（SI-03No 2）、体部の仕上げにハケを用いる甕、須恵器の叩き技法の見られる土師器甕（SI-08No 6）の混入は特徴的である。

⑦瓦について

SI-02No 1・2、SI-05No 12・不掲載破片が出土する。SI-02No 2は字瓦瓦当部の左端部の破片である。均正唐草文で、下野国分尼寺・下野薬師寺・大内庵寺・塔法田遺跡・中村遺跡・井頭遺跡出土の字瓦と同様で、8世紀中葉の西山瓦窯（益子町）産と見られる。SI-05No 12の女瓦は凹面に布目痕、凸面に繩叩き痕が見える。繩叩き痕の見られる女瓦は中村遺跡の全ての女瓦に共通する特徴である。

以上からは、②～⑤にみられるように広範囲な流通を窺わせる遺物の出土があるが、②・③・⑤のように遺構に限定される特徴が多く、一概には広域流通の確立がなっていたとは言えない状況といえる。

今回は集落域のごく一部を調査したのみで、集落の様相を明らかにすることは到底不可能であるが、⑦にあげたSI-02出土の字瓦瓦当部は示唆的といえる。床面から浮いた状態での字瓦瓦当部左端部の出土は、江川より一本東の谷に展開する井頭遺跡（1975年度報告 以下略 第4図49）の9世紀前半の住居跡（10区E-6号）から出土した字瓦と状況が酷似する。井頭遺跡は古墳時代以降空白期をおいて8世紀前葉～10世紀初頭（8世紀後葉～9世紀前半ピーク）に集落が展開する大規模集落であるが、鏡瓦・字瓦の出土によって直線距離で約3.0kmという近い位置にある芳賀郡衙（塔法田遺跡）との密接な関連が推定されている。本遺跡と各遺跡との直線距離は、井頭遺跡とは約2.5km、塔法田遺跡とは約4.2km、大内庵寺（芳賀郡寺）とは約4.0km、中村遺跡（芳賀郡倉別院）とは約6.2kmで、県内最大の「郡」である芳賀郡の郡衙・郡倉別院・郡寺とごく近い位置にある。これら郡衙関連遺跡と同等距離にある同時期の遺跡の調査例には、何れも道路建設に伴う面積の限られた調査であるが、大曲北遺跡・八木岡I遺跡・伊勢崎II遺跡・西郷如来遺跡・谷中遺跡などある。しかし、何れの遺跡からも瓦の出土は認められず、本遺跡並びに井頭遺跡の特異性が際出する。

赤曾Ⅱ遺跡集落展開の詳細は一重に今後の調査を待たねばならないが、①遺跡の推定範囲が径約800mの本遺跡と径約450mの井頭遺跡が2.5km程の近距離に位置すること②井頭遺跡では出土例のない繩叩き痕を持つ瓦が出土することの2点を調査のまとめとしてあげておきたい。

6. 時期不明の遺構

時期不明の遺構には住居跡2軒・土坑・ピット 基・性格不明5基がある。このうち、土坑・ピットに関しては、既に第3章第1節で述べたとおり、遺構の分布から1～3期の住居跡に伴うものと判断して大過ないものと考えられる。また、直線的なラインのとれるSK-17・23・24、SK-35・38・37・27・48についても、1～3期に伴うものと判断できることを追記する。

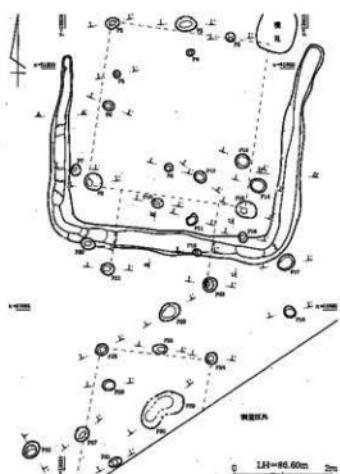
第12～15号円形周溝状遺構については、ほぼ磁北に沿って並んで位置することを指摘したい。

第61号「コ」字状周溝遺構（以下SX-61）及び周辺ピットについては、①遺構の空白域を挟んだ調査区南西端部に単独で位置する ②周溝は方形に近づいていた可能性が高い ③全てのピットは周溝の東辺・西辺を各々に伸ばしたラインの間に位置する ④ピットは周溝の内側・南辺付近・外側に三分され、P 1・8・15・擾乱、P 24~27を方形に繋ぐことが可能である ⑤周溝内隅部の掘り込みの立ち上がりと周溝南辺に近接するp 19~22とは相対する位置にある 等の特徴を抽出した。

①からは集落とは隔離された遺構分布及び住居跡などの生活遺構を伴わない遺構配置をもって非集落的遺跡景観の復元が可能である。非集落的景観の代表例としては、官衙・信仰関連施設等があげられるが、ここで、SX-61の立地の条件を整理すると、i 台地の端部 ii 蛇行する河川に沿った台地の深部 iii 遺構真下に降雨時の水量増加地点の3点を大きな特徴と捉えられる。これら3点と遺構の特徴としてあげた5点から、非集落的景観の復元を試みるならば、位置的に芳賀郡衙と郡倉別院を結ぶポイントにはあるが、柱穴の規模や規格性、施設配置の観点から官衙である可能性は消失する。次に、信仰関連施設としての可能性を検証するならば、取りも直さず i ~ iii は、a 世俗を隔離する位置関係 b 民俗学的に宗教施設が多いとされる河川蛇行点（水の輪） c 集落における水の保護・管理の適地 という宗教学上の要因を充足する。また、④・⑤からは掘立柱建物の想定が可能であり、且つ③によって「コ」字状周溝遺構の内外に想定した2棟は相互の存在を意識した企画性のある建物であるといえる。更に⑥に見る溝の立ち上がり部とp 19~22のラインはSX-61内側の推定建物跡（便宜上北棟と称する）の中央とSX-61外側の推定建物跡（便宜上南棟と称する）の正面あたり、三分されるピット配置の企画性は明確といえる。伴出遺物のないこと及びSX-61と周辺ピットの同時期性という多大な問題が残されているが、粗大な推測が許されるならば、②から周溝遺構隅部の掘り込みを雨水溜とする雨落ち溝とし、南棟を会集所的遺構、北棟を宗教施設遺構、南辺ピットを北棟に続く階的遺構と理解したい。この時、遺構が南面し集落に背を向けることとなるが、i ~ iii 、 a ~ c 及び丘陵頂部に施

設を持つ祭祀場の例（註2）、本調査区古墳時代の遺構・遺物の状況により、建物を配する信仰形態よりも古い時代の祭祀場の継承である可能性が考えられる。

SI-05の「寺」の字を含む墨書き土器の出土や「赤曾千軒」の古い伝えもあるが、伴出遺物のないことや、水靈信仰に結びつく立地、また、集落との隔離性からは、「仏堂」であるより「神社」であるとの考えに妥当性が強いものと思われる。



第73図 第61号「コ」字状周溝遺構および周辺ピット推定図

註1 堀本輝也・池田敏宏 1994 「鍋田中原遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告書第145集 栃木県教育委員会（財）栃木県文化振興事業団
阿久麻布・池田敏宏 2000 「小丸山北遺跡・山前代A遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告書第237集 栃木県教育委員会（財）栃木県文化振興事業団

杉浦昭博・池田敏宏 2001 「大関台遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告書第251集 栃木県教育委員会（財）とちぎ生涯学習文化財団
註2 横原祐一 2003 「「杉沢町遺跡」に見る律令初期「社」の存在について」『信濃・祭祀考古』第24号 祭祀考古学会

第2節 亀山北遺跡

1. 調査成果の概要

亀山北遺跡は江川の西岸にあり、対岸の赤曾II遺跡とは互いに呼応する位置にある。本調査区は、「S」字状に蛇行する川筋を見下ろす台地屈曲部の縁辺に位置するとともに、本調査以前に行われた真岡市教育委員会の調査（以下真岡市調査区）によれば、O-13・14グリッド付近で埋没谷の存在が確認されている。小河川・谷に東面し、豊かな水の恵みを背景に遺跡が立地したことは明らかである。

遺構の概要については第4章第1節において既に述べたが、確認した住居跡7軒・土坑・掘立柱建物跡1基・土坑・ピット13基について、時代別に整理を試みまとめとしたい。

2. 旧石器時代

グリッド内及び調査区内からナイフ形石器1点・削器1点・縦長剥片12点・剥片5点が出土した。このうち縦長剥片2点・剥片1点はハードローム下層～ブラックバンド上層において出土した。南関東地方の7層（ブラックバンド上層）の特徴と同様に、縦長の石刃の端部を折り取るものが多い。

3. 繩文時代

3区から陥穴状土坑1基と1区（SI-12覆土）及び3区遺構空白域から計2片の土器片を確認した。陥穴状土坑からの出土遺物はなく詳細は不明である。遺物は中期中葉の小片である。地形的な制約等により生活圏から除外された可能性を指摘した赤曾II遺跡の遺構・遺物の状況と近似し、生活の痕跡は極めて薄い。

4. 弥生時代

1区から10片の土器片が出土した。中期の東北系・後期の二軒屋式・十王台式に比定される。

本県の弥生時代の遺跡の在り方には、1小規模な遺構構成（1軒或いは2～3軒の住居と数基の土坑）、2東斜面の傾斜変更点付近（縁辺部）の遺構の存在、3「蛇行する支谷の屈曲部、つまり台地が低地へ向かって緩やかに張り出す南西向きの部分」への占地、4遺跡分布の特徴として、「一つの谷筋に一定の間隔を持つて集落が散在する」等、中期後半以来の傾向が引き継がれるとの指摘がなされている。（註1）

本調査区においては遺構の在り方について言及し得ないが、本遺跡の立地、周辺遺跡との関係など、上記の指摘事項（2・3）とリンクする事実は多い。また、集落地が古墳時代前期に引き継がれることの多い事例からみれば、小規模・短期的であるにしき本調査区付近における集落の存在が想定される。

本遺跡周辺の遺跡の様相は、小貝川流域の山崎遺跡・柳久保遺跡を筆頭とする小遺跡群、江川西岸に伊勢崎II遺跡・稻荷山遺跡・下高間木西遺跡、江川の東の谷の井頭遺跡に大きな分布域を認めることができる。しかし、二軒屋式が出土する遺跡が多く、中期の土器片が出土したのは、本調査区と下高間木西遺跡のみであり、僅かではあるが本調査区からの出土には大きな意味があろう。

5. 古墳時代

住居跡6軒を確認した。何れも出土遺物から前期の住居と判断でき、本節も前期を念頭に記述を進めるが、僅かながら後期の土器片が表探でき、集落の存続が予想されることを付記する。

遺構の配置は、3区にSI-01がある以外は1区にあり、蛇行する川筋を見下ろす台地縁辺部と冒頭で記したように、埋没谷に面する絶好のロケーションを占有する。本遺跡の様相は先の真岡市調査区の成果を待たね

ばならないが、本調査区の概要を把握し予察を試みたい。

時期については、伴出遺物から時期を推察したが、根拠となる遺物の編年は、県内の編年（橋本（1988）、今平（1997・2000）、片根・藤田（2001）など）を基本に時期を設定した。本文中の表記は前期を5分割した今平（2000）に相対する。

各遺構の時期は、SI-01=1～2期、SI-09=覆土2層の堆積時期が3期、SI-10=埋没時期が4期、SI-11=埋没時期が3期、SI-12=埋没時期が2期、SI-14=不明である。3区にあるSI-01のみ立地条件を明確にし得ないが、埋没谷をドーナツ状に囲む遺構配置であることが真岡市調査区の遺構分布から明らかであり、埋没谷から台地縁辺部へ向けて遺構の変遷があったと推測される。

遺構については、炉跡がロームをもって火床とすることや、五徳的な河原石が出土することが共通点といえる。しかし、大型で間仕切り等の付属施設を持つSI-09は特徴的で、貯蔵穴周辺の浅い掘り込みと炉跡に近接する焼土を含んだピットは、他の住居跡の貯蔵穴・炉跡ではなく、SI-09の特異性を強調する施設である。

遺物については、大多数が覆土からの出土である。SI-09・10について土層の堆積状況から一括して混入したことが明らかで、一住居から埋没過程にある住居跡への廃棄である可能性が高い。何れの住居跡も「S」字状口縁甕（以下「S」字甕）を伴うことは大きな特徴で、特にSI-09からは輪型鋳治溝が出土した点は特筆される。

遺物の本文中の土器整形方法を示す細分記号は以下を表す。

「S」字甕・・I 口縁部が受け口状

- II 口縁部短くが短く屈曲
- III 口縁が外反気味に屈曲
- a 内面頸部ヨコハケ
- b 外面肩部ヨコハケ
- c 外面羽状ハケ

「く」字甕・・A 頸部内外面に稜を形成しない

- B 頸部内外面に稜形成
- C 頸部内面に稜形成
- i 口縁端部面取り
- ii 口縁端部面取りなし

底部・・・・・① 底一体部が一端立ち上がってから開く（SI-09No19等）

② 底一体部が直線的に立ち上がる（SI-10No22等）

③ 底径が小さく底面が凹状 （SI-09No20等）

次に各々遺物について留意した点を列記する。

- 1) 胎土中の金雲母・雲母片の含有量が極めて少ない。
- 2) ハケ目下にヘラケズリ痕の認められる薄手の甕体部破片の出土。
- 3) 内面頸部・外面肩部にヨコハケを施す「S」字甕の出土。
- 4) SI-01No1, SI-10No17などの特徴的な遺物の出土。

2)については、本調査区から出土した土器片は何れも小さく、個々の特徴については明言できないが、外面をハケ目で仕上げた器壁の薄い甕の体部破片については、「S」字甕である可能性が極めて高い。これらの破片の中には、ハケ目下にヘラケズリ痕の見える破片が複数確認できる。多くは同一遺構中の極めて特徴

の似た破片で同一個体と考えられる。しかし、ヘラケズリ痕の確認できない破片は、破片自体が小さく、観察が容易でないことを考慮するならば、ハケ目下のヘラケズリが認められない破片にも、ヘラケズリが施されている可能性が高く、複数個体に認められる手法と捉えて大過ないものと判断される。

4)については、特徴的な遺物の出土が少くないが、特にこの2点についてあげておく。SI-01No.1は小片ではあるが、縄の押圧によって山形文或いは連弧文状の文様を表出し、縄目及び文様の内部を赤彩する。SI-10No.17は底一体部の積上部に縄の押圧痕ある小型の壺である。時期や大きさはことなるが、宇都宮市東部に位置する成願寺遺跡からは中期の壺に同様の痕跡ある。成願寺例は縄の痕跡が2~3重で壺に巻き付けたよう見える。成形・整形に係わる痕跡とも意図的な痕跡とも捉えられるが、稿を改めて検証したい。

以上の点を踏まえ、本遺跡付近の同時期遺跡との関連を見てみたい。

まず、本遺跡周辺の遺跡を見ると、江川两岸には、本遺跡の他、塚原遺跡、下高間木西遺跡、稻荷山遺跡、伊勢崎II遺跡、湧水地を控えた真岡台地の西端部に井頭遺跡、同じ真岡台地の東側縁辺の突端部に吹上遺跡、真岡工業高校北遺跡などがあり、これらの遺跡の中で「S」字壺が出土する遺跡は、吹上遺跡、真岡工業高校北遺跡、下高間木西遺跡及び本遺跡である。このうち内面頸部・外面肩部にヨコハケを施す（前述3）ものは、吹上遺跡、本遺跡のみで、真岡台地、江川における特徴的な集落展開を見ることができる。吹上遺跡の発掘調査は実施されておらず、その様相は定かではないが、本遺跡には前代の弥生時代中期～後期の土器片の出土あり、集落が継続して営まれた可能性を指摘できる。また、本遺跡同様江川の西岸に位置し弥生時代中期の土器片が出土する下高間木西遺跡には「S」字壺の出土がなく、本遺跡がこの時期における江川付近の特出した集落であったことに疑いはあるまい。今後、真岡市調査区や市之塚遺跡の成果、既に前期の表象的遺跡である谷近台遺跡の在り方を考慮する中で本遺跡の様相を明らかにしていかねばなるまいが、台地突端部に加え、谷に面する絶好の立地条件の他に、赤曾II遺跡で記した水靈信仰に結びつく立地をもつ台地下部を眼前に眺望する集落の位置などにも本遺跡を特徴付ける要因を見いだせるのであろうか。

最後となりましたが、本報告を刊行するにあたり多くの方にご協力いただきました。特に、旧石器時代については芹澤清八氏、弥生土器については藤田典夫氏、前期土器については今平利幸氏、平安時代土器については池田敏宏氏・内山敏行氏、「コ」字状周溝遺構については篠原祐一氏に多大なるご教示・ご協力を賜りました。末文ながら記して深謝の意を表します。

註1 岩上照明・藤田典夫 1997 「栃木県における弥生時代中期後半の土器群—上山系列の提唱—」『研究紀要』第5号

財団法人栃木県文化振興事業団 掘藏文化財センター

「」内は原文より引用

（主な参考文献）

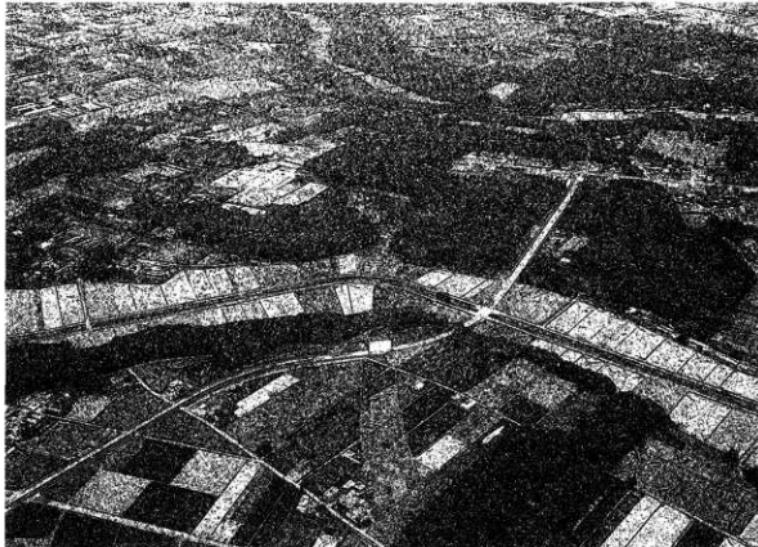
橋本證明 1998 「I 基調報告 3 栃木県」「シンポジウム 関東における古墳出現期の諸問題」 日本考古学協会

今平利幸 1997 「栃木県における古墳時代前期の様相—土器を中心として—」「前方後方墳の世界Ⅱ—那須に古墳が造られたころ—」

栃木県教育委員会

今平利幸 2000 「下野における古墳時代前期外来土器の波及と定着」『栃木県考古学会誌』第34集 栃木県考古学会

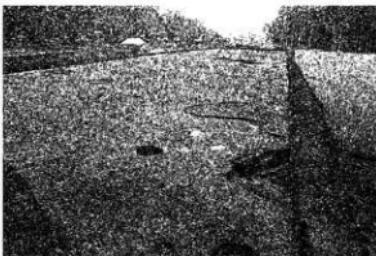
写 真 図 版



赤曾II遺跡・亀山北遺跡遠景（南西上空から）



調査区東半部近景（南から）



調査区全景（北から）



調査区南半部近景（南西から）



水田面より赤曾II遺跡を見る（南西から）

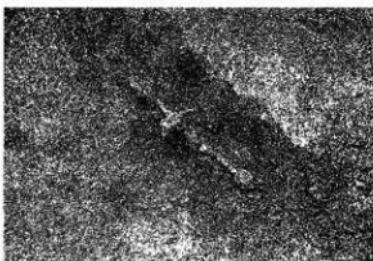
図版二
赤曾II遺跡
遺構



第1・第9号住居跡セクション（南東から）



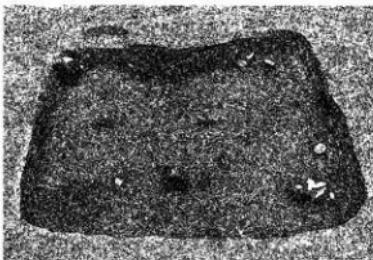
第9号住居跡竪渠道（西から）



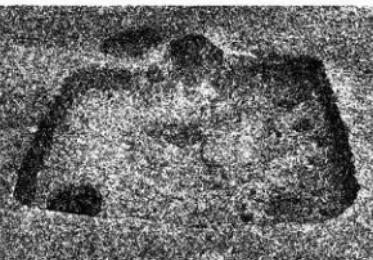
第9号住居跡紡錘車出土状況（北西から）



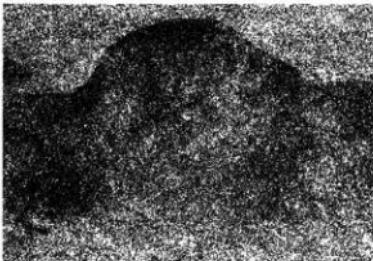
第1・第9号住居跡掘方（南東から）



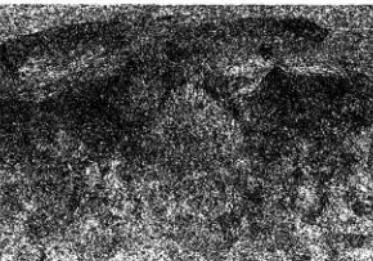
第2号住居跡遺物出土状況（西から）



第2号住居跡掘方（西から）



第2号住居跡竪（西から）

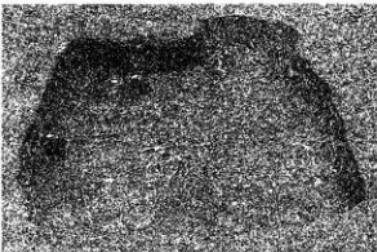


第2号住居跡竪煙出し（西から）

図版三 赤曾二遺跡 遺構



第2、第3・8、第4号住居跡完掘（南西から）



第3・8号住居跡遺物出土状況（南西から）



第3・8号住居跡掘方（南西から）



第3・8号住居跡発見出し（南西から）



第4号住居跡遺物出土状況（西から）



第4号住居跡完掘（南から）

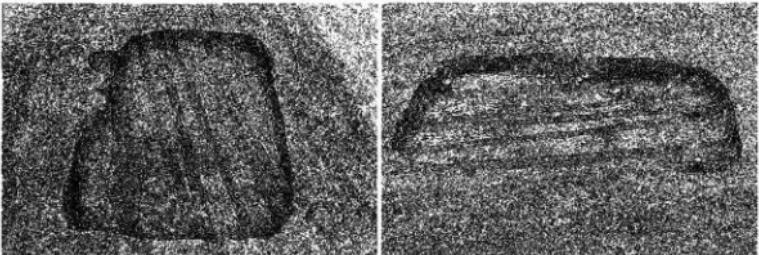


第4号住居跡発見（西から）



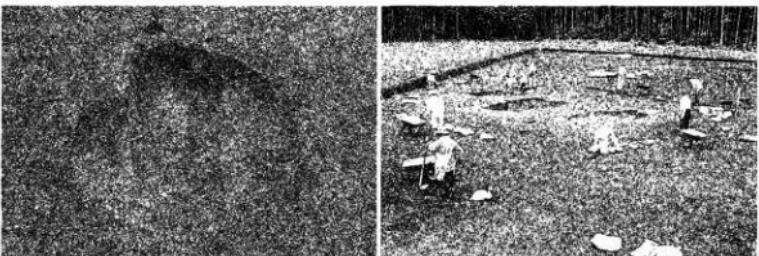
第4号住居跡掘方（南から）

図版四
赤曾II遺跡
遺構



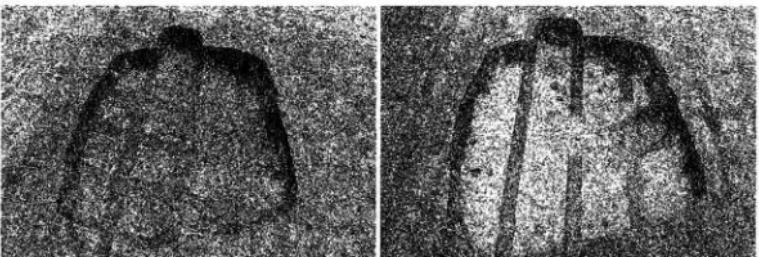
第5号住居跡完掘（西から）

第5号住居跡遺物出土状況（南から）



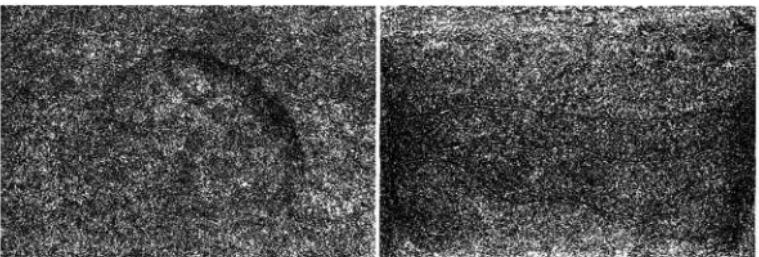
第5号住居跡竪完掘（西から）

第4号住居跡付近作業風景（南西から）



第7号住居跡完掘（南西から）

第7号住居跡掘方（南西から）

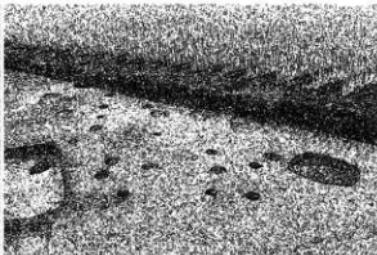


第44号住居跡竪完掘（西から）

基本土壠（南から）



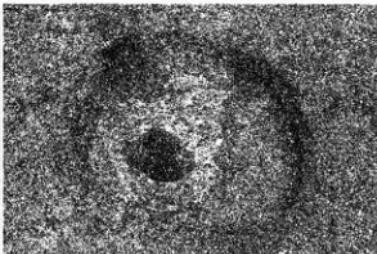
第26号土坑完掘（南西から）



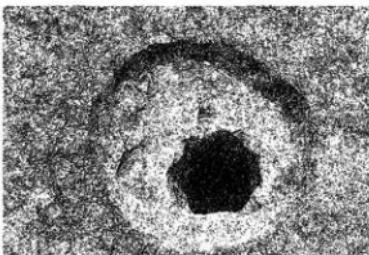
第26号土坑周辺（南東から）



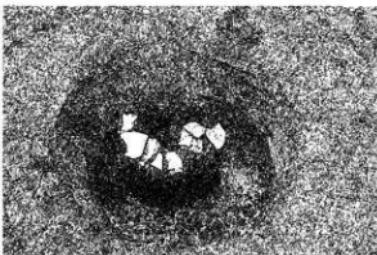
第23号土坑周辺（東から）



第17号土坑完掘（東から）



第22号土坑完掘（東から）



第23号土坑遺物出土状況（北から）

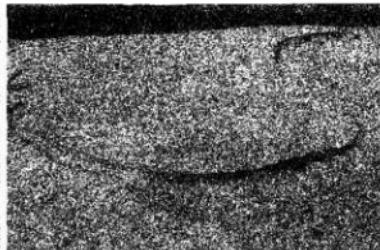


第48号土坑周辺（南西から）

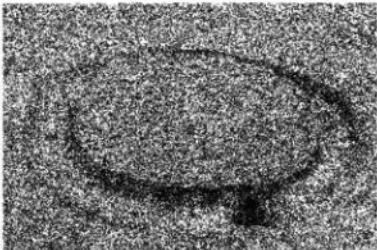


調査参加者

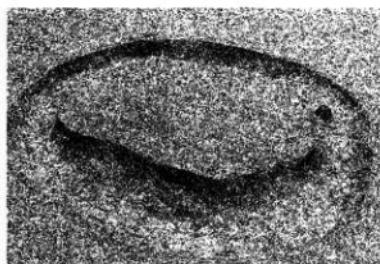
図版六
赤曾II遺跡
遺構



第12・第13号円形周溝遺構（南から）



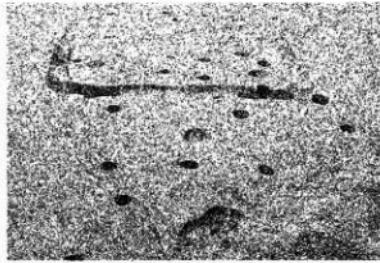
第14号円形周溝遺構（北から）



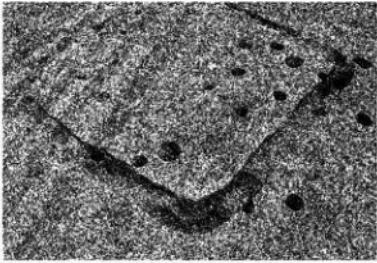
第15号円形周溝遺構（東から）



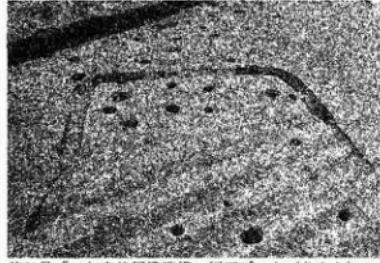
第14・第15号円形周溝遺構近景（南東から）



第61号「コ」字状周溝遺構・周辺ピット（東から）



第61号「コ」字状周溝遺構近景（東西から）

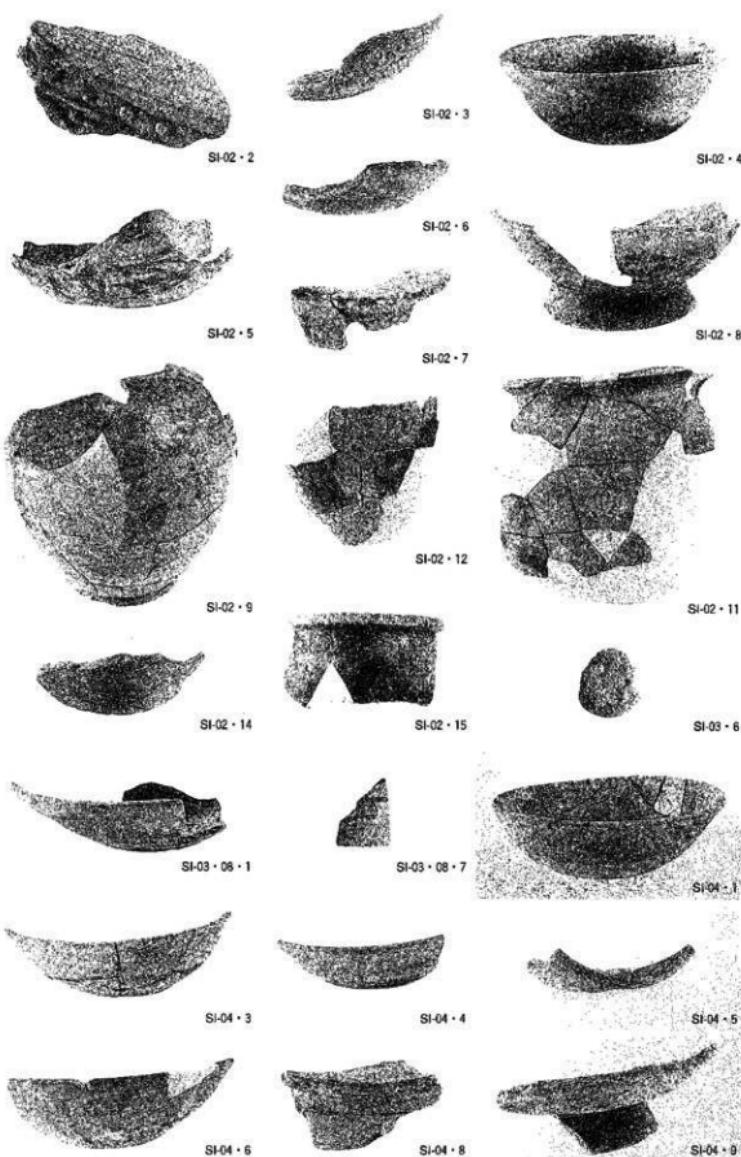


第61号「コ」字状周溝遺構・周辺ピット（北から）

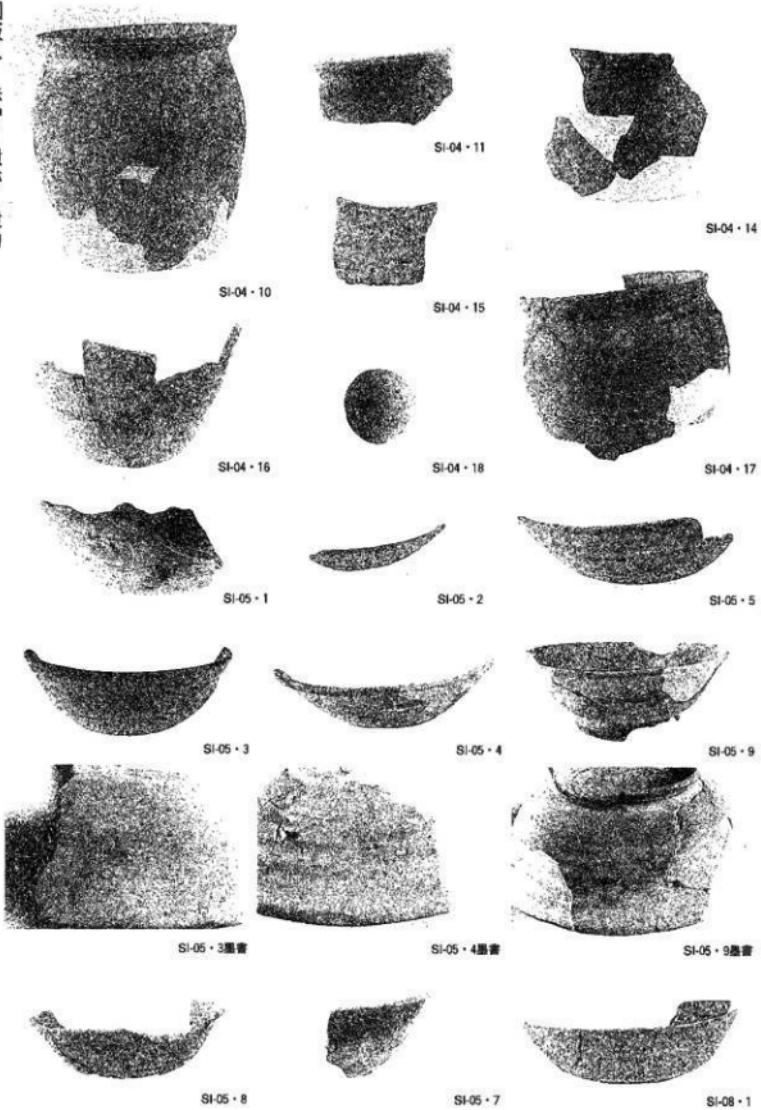


第58号土坑、「コ」字状周溝遺構近景（北東から）

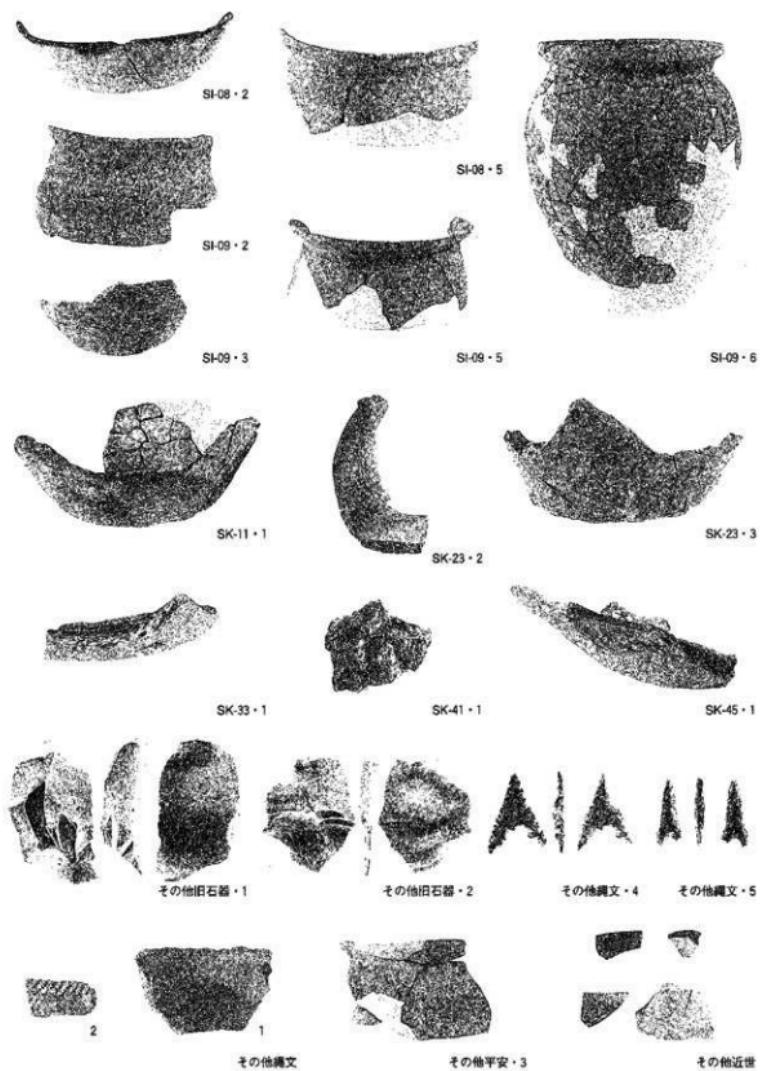
図版七 赤曾II遺跡 遺物



図版八
赤曾II遺跡
遺物



図版九
赤曾II遺跡
遺物



図版十
亀山北遺跡
遺構



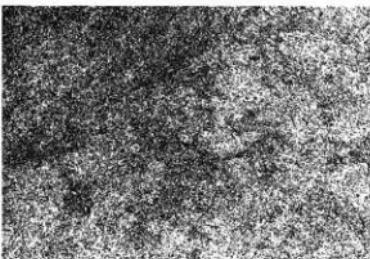
赤曾II遺跡・亀山北遺跡遠景（南上空から）



水田面より亀山北遺跡を見る（東から）



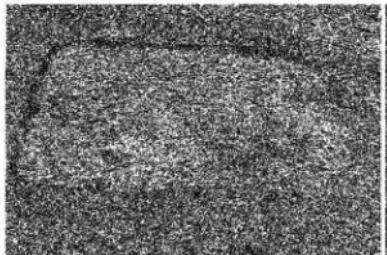
旧石器調査グリッド近景（北東から）



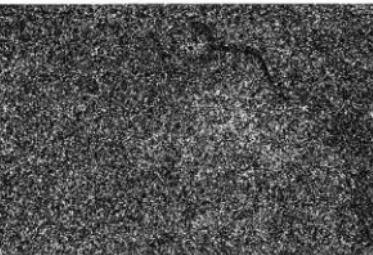
J-9 グリッド南東部分UP（南西から）



基本土層（南から）



第1号住居跡完掘（南西から）



第2号住居跡完掘（南西から）



第9号住居跡完掘（東から）



第9号住居跡炉跡（南から）



第9号住居跡床面施設（東から）



第9号住居跡壁柱穴（東から）

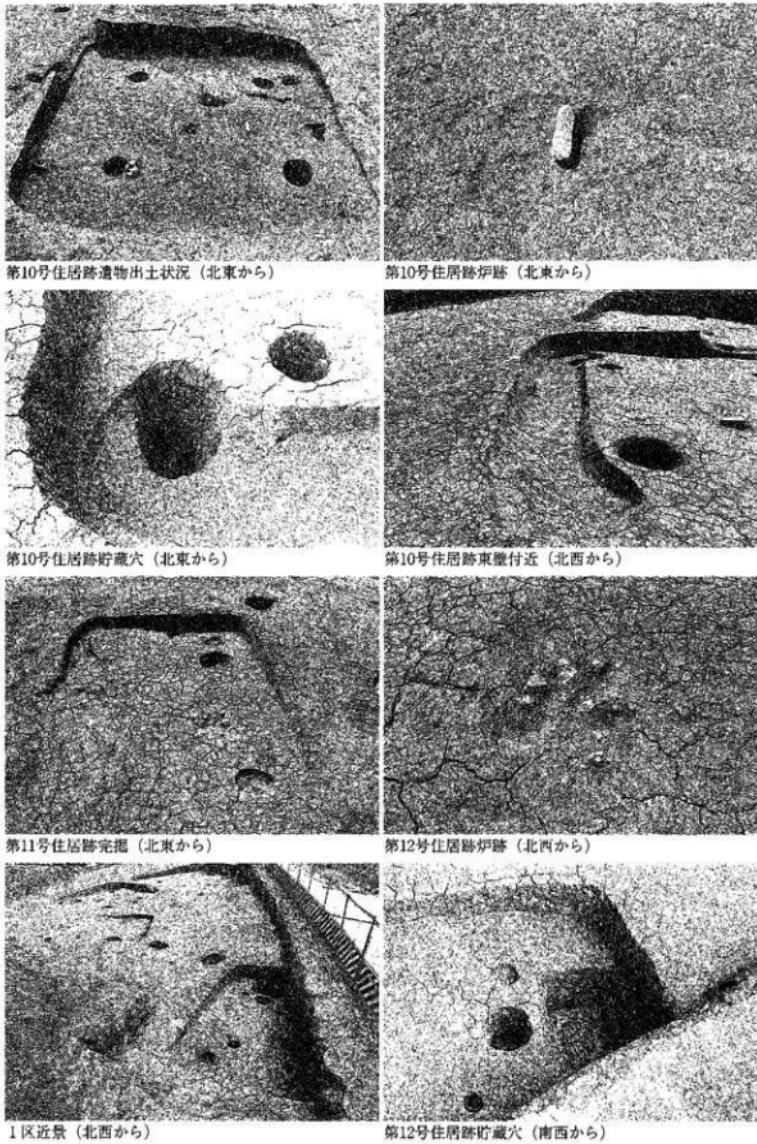


第9・第10号住居跡完掘（北から）



作業風景（北東から）

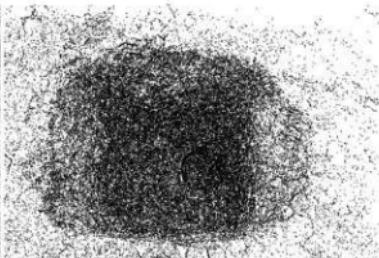
図版十二 龜山北遺跡遺構



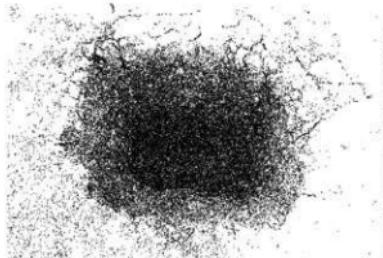
図版十三 亀山北遺跡 遺構



第15号掘立柱建物跡完掘（北西から）



第15号掘立柱建物跡完掘 p 1（北東から）



第15号掘立柱建物跡完掘 p 2（北東から）



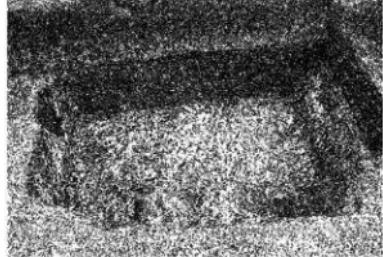
3区近景（南東から）



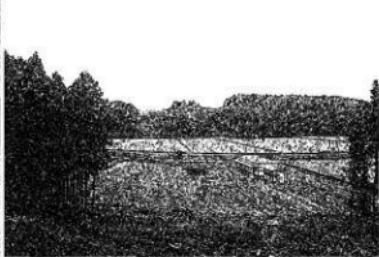
第6号土坑跡完掘（南から）



第7号土坑跡完掘（北から）

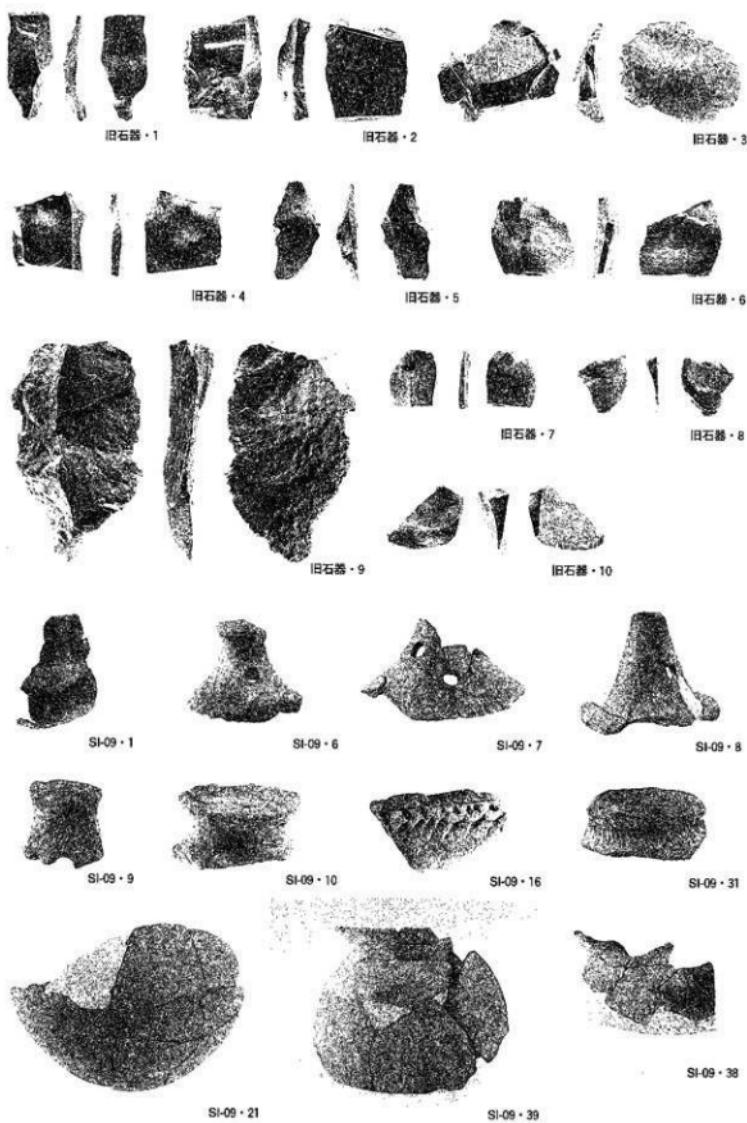


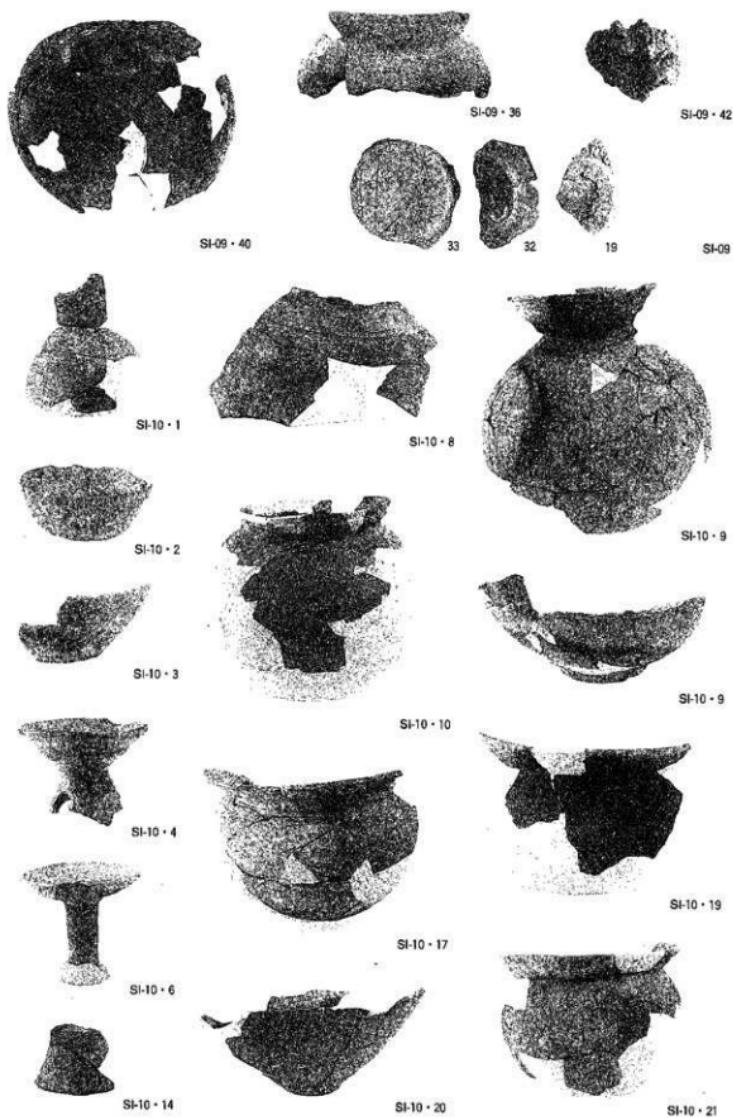
第8号土坑完掘（南から）



赤曾II遺跡から亀山北遺跡を見る（北東から）

圖版十四 龜山北遺跡
遺物





図版十六

亀山北遺跡
遺物



その他縹文



その他共生

報告書抄録

| | | | | | | | |
|----------------|---|--------------------|---------------------------|------------------|-------------------------------|--------------------------------|---|
| ふりがな | あかぞにいせき・かめやまきたいせき | | | | | | |
| 書名 | 赤曾II遺跡・亀山北遺跡 | | | | | | |
| 副書名 | 国庫補助道路改築事業・一般国道408号真岡北バイパスに伴う埋蔵文化財発掘調査 | | | | | | |
| 卷次 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 栃木県埋蔵文化財調査報告 | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第282集 | | | | | | |
| 編著者名 | 篠原浩恵 | | | | | | |
| 編集機関 | 財団法人とちぎ生涯学習文化財団 埋蔵文化財センター | | | | | | |
| 所在地 | 〒329-0416 栃木県下都賀郡国分寺町大字国分乙474 TEL0285-44-8441 | | | | | | |
| 発行機関 | 栃木県教育委員会 財団法人とちぎ生涯学習文化財団 | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 2004年3月26日 (平成16年3月26日) | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード 市町村 遺跡番号 | 北緯 ° ° ° | 東経 ° ° ° | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
| あかぞに 赤曾II遺跡 | もおかしもこちや 真岡市下龍谷 地内 | 09209 | 36°28'4" | 139°59'14" | 2003.4.1 ～ 2004.3.30 | 赤曾II遺跡 11,600m ² | 国庫補助道路 改築事業一般 国道408号真 岡北バイパス に伴う埋蔵文 化財発掘調査 |
| かめやまと 亀山北遺跡 | もおかし かめやま 真岡市亀山 地内 | | | | 亀山北遺跡 13,000m ² | | |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | |
| 赤曾II遺跡 | 集落 | 縄文時代 | 陥穴状土坑 | 1基 | 土器器・須恵器・梳型鍛冶 滓など | 平安時代の 集落及び周 辺域 | |
| | | 平安時代 | 竪穴住居跡 土坑・ビット 性格不明遺構 | 10軒 74基 3基 | | | |
| 亀山北遺跡 | 集落 | 旧石器時代 | 陥穴状土坑 | 1基 | 剥片・土器器・須恵器・梳 型鍛冶滓など | 古墳時代前 期の集落 | |
| | | 縄文時代 | 竪穴住居跡 | 7軒 | | | |
| | | 古墳時代 | 掘立柱建物跡 | 1棟 | | | |
| | | 中・近世 | 土坑・ビット 方形竪穴 | 12基 1基 | | | |

栃木県埋蔵文化財調査報告第282集

赤曾 II 遺跡・龜山北遺跡

国庫補助道路改築事業一般国道408号真岡北バイパスに伴う埋蔵文化財発掘調査

発行 栃木県教育委員会

宇都宮市塙田1-1-20

T E L 028 (623) 3425

財団法人とちぎ生涯学習文化財団

宇都宮市本町1-8

T E L 028 (643) 1011

平成16年3月26日発行

編集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団

埋蔵文化財センター

下都賀郡国分寺町大字国分乙474

T E L 0285 (44) 8441

印刷 株式会社 松井ビ・テ・オ・印刷